イスラームの理解

Towards Understanding Islam

JAPAN 2201010

THE COOPERATIVE OFFICE FOR CALL & GUIDANCE AT- SULAY, RIYADH
P.O.BOX 1419 ZIP CODE 11431, TEL.NO (01) 2410615 -FAX (01) 2414488-232
E.mail : sulay@w.cn

イスラームの理解

アブルアァラー・マウドゥーディー著
小泉明訳

目　次

第1章　イスラーム

世界のあらゆる宗教にはその創始者の名、あるいはその宗教が生まれた社会や国家に因んだ名が付けられている。たとえばキリスト教は預言者イーサー（イエス・キリスト）の名から付けられたものであり、仏教はその創始者ゴーダマ・ブッダの名から、またゾロアスター教はその創始者ゾロアスターの名から、またユダヤ人の宗教であるユダヤ教はそれを生んだユダヤ族の名が由来している。その他の宗教の場合もよく似ている。しかしイスラームの場合は全く異なる。イスラームの特徴は、特定の個人や民族と何ら関係がないことである。「イスラーム」という言葉はこのような関係を含んでいない。イスラームは特定の個人、集団、国家に属していない。

イスラームという名称は、特定の民族、集団、国家から生まれたものでもなければ、特定の社会とも関係がない。イスラームは人間の心の中にその教えに基づいた信仰と道徳を育成し啓発する普遍的な宗教である。これを信仰する者は誰でも一いかなる人種、党派、社会、国家に属していようとも一ムスリムである。あらゆる時代を通じて、あらゆる人々の間にこの信仰を持った敬虔で善良な人々は存在していたし、また今も存在している。そのような人々は皆、ムスリムであったし、現在もそうである。

ここでおのずと次の疑問が湧いてくる。イスラームとはどういう意味なのか。またムスリムとはどういう人々のことなのか。

1. イスラームの意味

「イスラーム」とはアラビア語で服従、帰依、従順を意味する。宗教

的には、イスラームは唯一神アッラーに対して完全なる帰依と服従を表明することである。これが「イスラーム」と呼ばれる所以である。

＊注　イスラームのもうひとつの意味は「平和」である。これは、人間は唯一神アッラーへの帰依と服従によって初めて、肉体と精神の本当の平和を得ることができるということを意味している。このような従順な生活は心の平和をもたらし、ひいては真の社会平和を建設することができる。

我々が住んでいる宇宙が秩序正しい組織体であることは明らかである。この宇宙のあらゆる構成要素の間には一定の法則と秩序がある。万物は思慮を絶する壮麗な動きをしている宇宙の中に各々の位置が割り当てられている。太陽、月、星そしてあらゆる天体は壮大極まりない機構の中で互いに結び合っている。それらは不変の法則に従い、定められた進路から逸脱することはない。地球は地軸を中心に自転し、太陽の周囲を回転するが、必ず定められた軌道を廻る。同様にこの世のあらゆるものは－極微小な電子から膨大な星雲に至るまで－必ず定められた法則に従う。物質、エネルギー、生命の全てはその法則に従って成長し、変化し、生きて、死滅する。人間の世界においても自然の法則が働いていることは一目瞭然である。人間の誕生、成長、生命は一連の法則、いわゆる生物学的な原則によって規制されている。人間は不変の法則に従って自然から生活の糧を摂取する。微小な組織から心臓、脳に至るまで、人間の身体のあらゆる器官は定められた法則によって支配されている。要するに我々が住む宇宙は一定の法則によって支配されており、そこに生存する万物も各々に定められたコースを歩んでいるのである。

極微小な塵から天空の壮麗な銀河にいたるまで、宇宙を構成するありとあらゆるものを支配する偉大な普遍の法則は、宇宙を創造・支配する唯一神の法則である。一切のものは唯一神の法則に従っている。まさに

全宇宙がイスラームの教えに従っているのである。すなわちイスラームとは宇宙の唯一創造主アッラーへ帰依し服従することである。太陽、月、地球、その他あらゆる天体は創造主の命令を忠実に実行するもの、すなわちムスリムである。空気、水、熱、石、木や動物も同様にムスリムである。宇宙の万物は唯一神の法則に従っており、ムスリムである。この意味において、唯一神を信じない人や唯一神以外のものを崇拝する人でさえ肉体的生存に関する限りムスリムであるといわざるをえない。何故なら人間の全生涯は、胎児の段階から死して肉体が土に帰るまで、筋肉の全組織と四肢を含め唯一神の定められた道に従うからである。無知ゆえに唯一神の存在を否定し、多神教を唱える者さえもその本質はムスリムである。アッラー以外のなにものかに跪拝するその頭も生来はムスリムである。本当の無知ゆえにアッラー以外のなにものかに愛着と崇拝の念を抱くその心も本来はムスリムである。これらはすべて唯一神の法に従い、その機能と活動は唯一神の法則によってのみ支配されている。

以上が人間と宇宙の真実の姿である。ここで別の観点から問題を検討してみよう。人間の構造には 2 つの面、すなわち 2 つの異なる活動がある。ひとつは唯一神の法によってすべて規制されている活動であり、そこからはわずかも動くことができないし、一歩たりとも離れることができない。またいかなる方法、いかなる形態をもってしてもそれを回避することはできないのである。事実人間は他の一切のものと同様、自然の法則に完全に縛られ、それに従う運命にある。しかし、人間の活動にはもうひとつの面がある。すなわち人間は天賦の知性と理性を与えられている。人間は思慮し、判断し、選択し、反駁する能力を与えられている。人生でいかなる選択をし、歩もうとも自由である。いろいろな考えを持つこともできるし、好みの主義・趣向に合わせてどんな生活をも営むことができる。自分で生活信条を規定してもよいし、他人が規定した

生活信条を受け入れてもよい。人間は「自由意志」を与えられ自分の行動方針を設計できるのである。この「自由意志」において、人間は他の生物とは異なり、思想、選択、行動の自由が与えられているのである。この2つの面は人間の生活の中に並存している。

まず人間は他の生物と同様、生来のムスリムであり唯一神の法に必ず従うように運命づけられている。もうひとつの面についていえば、人間は自らムスリムになろうが、それを拒絶しようが自由である。人間は選択の自由を与えられているため、この自由をいかに使うかによって2つに－すなわち信仰する者と信仰しない者に－大別することができる。創造主を認める人は唯一神を己の主として崇拝し唯一神の法と命令に誠実かつ厳格に従い、唯一神が人間と社会生活のために示した法に従い、完全なムスリムになろうとする。このような人は、自由と選択が与えられている範囲内で主体的に唯一神に従うことを決意したことによって、そのイスラーム的認識においていわば完全の域に達したといえる。

今や全生活で唯一神に従うことを決意したため、人間性において、いかなる矛盾や葛藤もなくなる。その考え方は完全なるムスリムであり、そのイスラームに対する信念は完璧である。－何故なら全生涯をアッラーの意志にそって生活することがイスラームであり、まさにイスラーム以外のなにものでもないからである。

それまで無意識的に従っていた創造主に、今や意識的に服従し、それまでは何気なく服従していた唯一神に今や自発的に服従することになったのである。知覚しかつ認識する能力をお授けになった「全智全能の自存者」を認めることによって、その人の認識は本物となる。今やその理性と判断は確固不動なものとなる－なぜなら、人間に思考し判断する機能をお授けになった全智全能の自存者に正しく服従することを決めたからである。

人間に舌を活かす機能をお授けになった主の真意を、確信を持って表明するため、その口から発する言葉は真実なものとなる。今や自発的であるかどうかにかかわらず、人生のあらゆる面で宇宙の主である唯一神の法則に従い、その真理を具体化することになる。このように、全宇宙が帰依崇拝する主に従うのである。このような人は地上における唯一神の忠実な僕である。

2. クフルの本質

以上述べたような人物とは反対に、生来のムスリムでありながら、また死ぬまで無意識的にはムスリムでありながら、理性、知性、直覚の機能を真の主、すなわち創造主を認めるために働かせず、選択の自由を誤用して唯一神を否定する人がいる。このような人は不信仰者ーイスラームでは「カーフィル」ーと呼ぶ。「クフル」は文字通りには「覆う」「隠蔽する」という意味である。唯一神を否定する人は不信仰により自分の本質の中に潜在し魂の中に秘されているものを隠蔽するために、ーなぜならば、人間には本質的に「イスラーム」が浸透しているのであるからーカーフィル（隠す人）と呼ばれる。人間の肉体、筋肉や内臓はすべてその本能に従って働く。ありとあらゆる構成要素はー活動しているものもそうでないものも含めてーイスラームに従って機能しており、個々に割り当てられた役割を果たしているのである。しかし視覚が曇り、知性が乱れると、その証拠を見出すことができない。自分自身の本質さえも心の眼から隠蔽され本質を全く無視した行動を取ってしまう。そうなるとおよそ真理から遠ざかり、道に迷ってしまう。これがクフルの性質である。

クフルは純粋かつ単純な無知の一形態である。唯一神すなわち全宇宙

の創造主について無知であること以上に大きな無知があるだろうか。自然の広大なパノラマ、休むことなく働く壮大なメカニズム、創造のあらゆる面に現われている唯一神の偉大な配慮を見る。彼らはこの壮麗な機構を見ても、誰がそれを作り、誰が支配しているのかを知らないのである。人は自分の身体の中で精巧に働く素晴らしい器官には気を配り、目的を遂行するために働かせる。しかしながら自分の身体を生み出した「原動力」、この精巧なメカニズムを設計し創り出した「製作者」、炭素、カルシウム、ナトリウム等の無機質から唯一無類の生き物を創られた「創造主」のことが理解できないのである。宇宙の素晴らしいメカニズムを見ても、その背後にいる「設計者」のことは考えない。宇宙の偉大な美と調和を見ても、万物の「創造者」を見ようとしない。自然の素晴らしい景観は見ても、その「設計者」を知らないのである。我々が住む世界において、科学と知識、数学と技術、計画と目的が結合する完成物について、眩いばかりの一大壮観を眼にするが、この無限で広大無辺の宇宙を誰が創り出したのかについては全く知らないのである。人間はこの重大な事実を知らずに、どのようにして知識の真の姿に近づけるのであろうか。このような人にどうして真理と知性の扉が開かれることがあろうか。出発点に誤りがある人がどうして正しい目的地に到達することができようか。こういう人は真理を把握し得ないであろう。「正しい道」は隠蔽され、どんな科学や学問に専心勉励してみても、その人の眼前には真理と知恵の栄光は決して輝くことなく、渦に巻かれ、無知の暗闇の中にさまよい模索するのである。

それだけではない。クフルは悪徳や極悪非道の暴虐である。暴虐とは何か、それは権力と威力を残虐かつ不正に行使することである。もし物事を不正に行使させ、その真意、意志、先天的性向に反してその不正を強制するならばそれは徹頭徹尾暴虐である。

我々は宇宙のすべてのものが、創造主に従っているということを知った。唯一神の意志、唯一神の法に従って生きることは一もっとはっきりいえば、イスラームであることは一天地万物の真性に初めから備わっている法である。唯一神は人間に物事を処理する能力を与えられたが、その能力は唯一神の意志を成就するために使うべきであって、決してその他の目的に使うべきではない。しかし唯一神に従わずにクフルに随する者は、不正非道を犯す者である。唯一神から授けられた肉体と精神の諸々の能力を本来の真性に反して用い、逸脱した人生を送ってしまうからである。そして唯一絶対神ではない諸々の神々に頭を垂れ、心の奥底から湧き出る本能的呼び声を無視して、他の「権威」に執着し、崇拝し、畏怖の念を抱く。自分に与えられた能力と思い通りになるあらゆる物事を駆使して、唯一神の自明な意志に反抗し、「暴虐の時代」を作るのである。この世のあらゆるものを搾取乱用し、こともあろうにそれを自然と正義に反する方向に強制することほどこの世に大きな不正非道、暴虐、残忍なものがあるだろうか。

クフルは単なる暴虐だけではない。少なくともそれは反逆、忘恩、裏切りの行為である。いったい人間の実在とは何であろうか。人間の力、権威とはなんであろうか。人間は己の精神、心、魂その他身体諸器官の創造主であろうか。それとも、それらは唯一神によって創造されたものであろうか。一体誰があらゆる力とエネルギーを人間に役立たせるようにしたのだろうか。一人間か神か。もしあらゆるものが唯一神のみによって創造されたのであれば、一体、万物は誰に属するのだろうか。誰が万物の真の所有者であろうか。誰が万物の正しい支配者であろうか。明らかにそれは唯一神であり、唯一神以外のなにものでもない。唯一神が創造主、主人、支配者であるならば、唯一神から授けられたものを唯一神の法を犯して使う人間一唯一神に背を向け邪悪な考えを起こし、唯一

神に不信の念を抱き、支配者の意志に反して諸々の能力を使う人間ーほど罪深い反逆者はないであろう。もし召使いがその主人を裏切るならば、人はその召使いを忠実でないと非難するであろう。もし役人が国家に忠義を尽くさなければ、売国奴と呼ばれるであろう。もし恩人を欺く者があれば、恩知らずと槍玉に上げられるであろう。しかしこれらの裏切り、忘恩、反逆も、不信の徒がクフルによって犯す罪に比べればものの数ではない。一体誰があらゆる力と権威の真の源泉であろうか。誰が人間に自然を支配する力を授けたのだろうか。誰が人間を高い権威と力を持つ地位にまで高めたのだろうか。人間が他人のために使う一切のものは唯一神から贈られたものである。人間がこの世で持つべき最大の感謝の念は両親に向けられるべきであるが、それでは誰が子供に対する愛を両親の心に植えつけたのだろうか。誰が母親に子供を養育し成長させる意志と力を授けたのだろうか。誰が親に持てる全ての物を子供の幸福のために惜しみなく与えようとする気持ちを授けたのであろうか。少しでも沈思熟考してみれば、人間の最も偉大な恩人は唯一神であることがわかる。唯一神は人間の真の王、支配者であるとともに人間の創造者、主人、養育者、支持者である。これが唯一神の人間に対する立場であるから、人間がその真の主人、支配者を否定し服従しないクフルを犯すことほど罪深い裏切り、忘恩、反逆、背信はないのである。

では、人間はクフルを犯すことにより全能の神に被害を与えているといえるであろうか。それは全くばかげたことである。無限の宇宙の一点に立つ、取るに足らない極微粉のような人間が、最高級の望遠鏡を借りてもその境界を見出せないほど無限に壮大な領域を統べ給う宇宙の主にどのような損害を与えることができようか。唯一神の力は、地球、月、太陽、星など数えきれないほど多くの天体を命じられた通りに小さなボールのようにその周りを回転させるほど偉大である。神は全宇宙の唯一

の主であるだけに、その富は計りしれない。万物のために恵みを垂れ給うのは誰か。唯一神のために仕えないのは誰か。唯一神に対する人間の反抗は唯一神に僅かの損害をも与えることはできないのである。逆に、唯一神に服従しない者は目もあてられぬ破滅と没落の道を辿るだけのことである。

このように唯一神に反抗し唯一神の実在を否定することの必然的な結果は、人生究極の理想に失敗することである。このような唯一神への反逆は決して真の知識と洞察力をもたらさないであろう。創造主を明らかにできないような知識は真理を説き明かせないであろう。このような知性と理性は迷路に陥ってしまう。創造主を認識できないような理性は人生の道を照らすことはできないであろう。このような人は人生のあらゆる出来事に失敗するであろう。道徳、市民生活、社会生活、生存競争、家庭生活などやがて全生活がくつがえされるときが来るであろう。地上に混乱と無秩序を撒き散らし、良心の呵責に咎められることなく、他人の血を流し、他人の権利を侵略し、他人に残虐に当り散らし、そしてこの世に無秩序と破滅の種を蒔いて去って行く。その歪曲した考え方と野心、曇った洞察力と不当な価値観、更にその非道な行為は自らのみならず周囲の人々の人生をも暗いものにする。このような人は人生の平静と均衡を破壊し、喪失してしまう。現世において自分の本性、能力、才能に関して犯した罪のために、来世において有罪の宣告を受けるであろう。身体のあらゆる器官ー頭脳、目、鼻、手、足すらもーそれらに加えた不正義と残虐非道に対して攻撃するであろう。自分を形成しているあらゆる組織は唯一神に向かってこの人を非難するであろう。正義の源泉であり給う唯一神は、その罪にふさわしい最も厳しい罰を下し給うであろう。これがクフルの不名誉な結末である。クフルは現世においても来世においても人を完全なる破滅の袋小路に迷い込ませるであろう。

3. イスラームの恩恵

さてクフルの罪悪とその不利益について述べるのはこの辺でとどめ、次にイスラームの恩恵に目を転じよう。

人は自らの小宇宙の中にも唯一神の神秘の力とその啓示を数限りなく見ることができる。不変の法則と比類なき秩序に従って滞みなく動くこの素晴らしい宇宙はその設計者、創造者、支配者こそが無限の万物を包括する全能者であることを示している。そして計り知れない能力と知識と資源を持った全能の「自存者」であり、またその知恵は最も完全で、宇宙の生きとし生けるものの中でその「自存者」に従わないものはひとつとしてないという事実を証明している。この宇宙に在るありとあらゆるものと同様に、唯一神に服従することが人間たるものの本性である。実際のところ人間は毎日毎日無意識的に唯一神の法に従って生きているのである。なぜならば唯一神の法を逸脱するや否や、人間は死と破滅に曝されるからである。この唯一神の法こそが我々が日常遵守している自然の法則と呼ばれるものである。

唯一神は人間に知識を得る能力と思考熟慮する感性、善と悪を識別する判断力を授けようと思召され、人間にかなりの意志と行動の自由を授けたのである。この自由の中にこそ人間にとって真の試練がある。人間の知識、知恵、識別力、意志と行動の自由はすべて試されているのである。この試練においては、人間は一定の道を取ることを押し付けられてはいない。強制されれば試練の目的そのものが失われる。試験の際、答案用紙に決まった答えを書くように強いられるならばそれは受験者の自由意志に基づいた答案ではなくなり、当然その試験は無効になる。本当の価値は自分自身の知識と理解力に従って質問に自由に答えられる場合にのみ正当に評価できる。答えが正しければ成功し、将来の発展へ

の道を開くであろう。答えが違っていれば失敗し、将来の発展を妨げるであろう。同じことは人間がいかに生きていくかということについてもいえる。唯一神は、人間が好きなように人生の選択をし、イスラームになるかクフルになるか、自分自身で自由に決められるように意志と行動の自由を与えられたのである。

ところで、一方で自分の本性も宇宙の本質も理解しない人がいる。真の主を認めることができず、唯一神が賦与されているものを知ることができないのである。このような人は、知識、知性、義務感の試練に落第したのである。一定標準に達し得ず、好ましい運命は望めないのである。

また他方にはこの試練に見事に合格する人がいる。知識と知性を正しく用いて創造主を認識しかつ信仰し、強制されていないにもかかわらず創造主に服従する道を選ぶ。過ちを犯さず、善悪を識別し、邪道に陥る性向を持ちながらも正義に従うことを選ぶ。自分自身の本性を理解し、自然の法則と実在を実現し、いかなる道をも選べる能力と自由を持ちながらも唯一神への従順と忠実の道を選ぶのである。自分の知性やあらゆる機能を正しく使うからこそ試練に成功できるのである。目は実在を見るため、耳は真理を聴くため、精神は正しい意見を持つために用い、心と魂はそのように選んだ正しい道を辿るために働かせる。真理を選び、実在を見、自発的に喜んで自分の主人である支配者に従う。そして思慮深く、誠実で義務感の強い人になる。なぜなら、闇の上に立つ光を選んだからであり、実在の光明を見た後は、その光の呼び声に喜び熱心に応えたからである。その人は行為によって、真理の探求者であるだけでなく、真理を知る者、真理を崇拝する者であることを証明するのである。この人は正道に立っているのであり、現世においても来世においても成功することは明らかである。

このような人は知識と行動のあらゆる分野において常に正しい道を

選ぶであろう。唯一神と、唯一神の賦与し給うあらゆる恵みを知る者は、実在の出発点と共に究極の目的を知っている。正しい道に立ち、人生航路の方向と終着点を確信しているから決して迷路に陥ることはない。哲学においては宇宙の秘密を考察し自然の神秘を探ろうとはするが、不信心な哲学者のように、疑惑と懐疑の迷路に陥ることはないだろう。人生の道は唯一神の啓示によって照らされ、自らの足はすべて正しい方向に向くのである。科学において自然の法則を知り、地球の隠された宝物を見出し、まだ知られていない精神と物質のあらゆる力を管理しようと努めるが、それはすべて人間性の向上のためである。知識と能力に至るあらゆる道を開発し、人類の幸福のために地上と天上にあるあらゆるものを駆使しようと全力を尽くす。その探究の全段階を通じて、唯一神を意識し、科学と科学的方法を邪悪かつ破壊的に使う過ちを犯さないのである。自分を万物の支配者と宣言したり、唯一神の領域と至高の力を我物顔に独占したり、世界を転覆しようとする野心を抱いたり、不正不義の手段により人類を屈服させ全世界を制御しようと企てたりして自分自身を欺くような行為はしない。ムスリムの学者がこのような唯一神に対する謀反の戦いを挑むことはありえない。ただカーフィルの科学者だけがこのような幻影の餌食となり、この妄想の虜となって人類を全面破壊と絶滅の危機に曝すのである。

これに反してムスリムの科学者は全く違った態度で振舞うであろう。科学の世界への洞察が深ければ深いほど、ますます唯一神への信仰は強くなり、喜んで唯一神の前に頭を垂れるであろう。自らの主人が偉大な力と知識を与えられたように、自分もまた自分自身と人類の幸福のために努力しなければならないと思うようになるであろう。傲慢の代りに謙虚になるであろう。力に酔いしれる代わりに人類に奉仕しようという実感が湧き出るであろう。自由は放縦ではなくなり、道徳と唯一神の啓示

に導かれるであろう。科学を掌握して破壊の道具にする代りに人類の福祉と道徳の再生の発動力として役立てるであろう。これこそが、我らの主が人類に授けた贈物と恩恵に対して、我々が感謝を表わす方法なのである。

＊注　現代人が直面する事態について同じことがいえる。ジュード博士は云う。「科学は我々にも神にも等しい力を与えた。しかし我々はそれを小児のように使う。」

＊また著名な哲学者バートランド・ラッセルは次のように語る。『・・・一般的に我々は手段に関しては高い技術を持つが結果に関しては愚劣極まりない処置を執る。目的達成のために技術の進歩が結局悪い結果に終わる場合が多い。』

また歴史学、経済学、政治学、法律学、芸術、自然科学のあらゆる分野で、ムスリムは研究面で決してカーフィルに遅れを取らないが、それぞれの物の見方に従って、運用方法は非常に異なる。ムスリムは正しい観点から学問のあらゆる分野を研究し、正しい目的のために努力し、正しい結論に達する。歴史学においては人類の過去の経験から正しい教訓を学び、文明の栄枯盛衰の正しい結末を究明する。過去において、ムスリムは善であり正義であったあらゆるものを活かし、諸国家を衰亡と没落に導いた一切のものを賢明に回避しようと努めるのである。政治学におけるムスリムの唯一の目的は、人間すべて兄弟として個々の人格を尊重し、いかなる搾取も奴隷制も許さない、また個人の権利が確実に擁護され国家の権力は唯一神からの神託と見なされ、万人共通の福祉のために行使されるような平和と正義と友愛と慈善が支配する国家の樹立にまい進することである。法学の分野において、ムスリムが追求することは法律を真の正義の具現とし、万人ー特に弱き者ーの権利の真の擁護者とすることである。あらゆる人が各々正当な分け前を持ち、不正と圧迫

が誰にも加えられないように配慮することである。さらには法律を尊重し、他の人々にも尊重させて法律が正しく公平に行使されるように配慮するのである。

ムスリムの道徳生活は常に敬神と敬虔と正義と真実の念に溢れている。神のみが万物の主であり、自分も他人もそれぞれが持っているすべてのものは唯一神から与えられ、自分が行使する力は唯一神からの委託にすぎず、自分に授けられた自由は無分別に使うべきではなく唯一神の意志に従って使うべきであるという信念を持って、ムスリムは現世を生きるのである。ムスリムは常にいつの日か唯一神の御許に帰り、全生涯の報告をしなければならないことを念頭に置いて生きている。ムスリムはこの責任感を常にしっかりと心中に持っているため、決して放縦で無責任な行動は取れないのである。

このような精神で生きる人間の高い道徳性を見るならば、人生は純潔と敬虔と愛と思いやりであることがわかる。このような人物こそは人類の祝福である。邪悪な考え方や歪曲した野心で穢れることはない。悪事を見ることも聞くことも行なうことも慎む。口舌を慎み、決して虚偽を語らない。公明正当な手段で生活の糧を得、搾取や非道、虚偽によって不正に得た食物よりむしろ飢餓を選ぶ。その理由の如何を問わず、他人の生命と名誉を決して弾圧、蹂躙することはない。どのような高価な犠牲を払おうとも決して悪には屈しない。善良と高貴の具現者であり、その生命を犠牲にしても正義と真実を高く掲揚するであろう。あらゆる不正不義を憎み、逆境の下でも強く真理を擁護する。このような人はひとつの権威であり、必ずや成功するであろう。何事も決して妨害されることなく、また行く手を阻まれることもないのである。

このような人こそ最も名誉ある最も尊敬すべき人である。この点では何人も比べられない。宇宙の支配者である万能の神以外の何ものかに恩

恵を求めて頭を垂れたり、またそれに手を伸ばすことを絶対にしない人に、どのような恥辱が訪れることがあろうか。

このような人こそ最も権威があり最大の成果を収める人である。何人も彼以上に強くなることはできない。なぜならば、唯一神の他に何ものをも恐れず、唯一神の他に誰にも祝福を求めないからである。このような人に、どんな圧力をかければ正道から逸脱させることができるのだろうか。どれほどの巨大な富を以ってすれば、彼を屈服させることができるだろうか。いかなる権力を以ってすればその良心を変えることができるのであろうか。どんなに圧力をかけても、この人の信仰と行動を弾圧することはできないであろう。

彼こそ最も富める者である。この世の何人も彼以上に富み、かつ独立することはできない。彼は簡素ながら満足と安定の生活をしている。好色家でもなければ道楽者でもないし貪欲でもない。正直に稼いだもので満足し、たとえ不正の手段で得られた富を前に差し出されたとしても、それを受け取らないことは当然である。見向きすらしないだろう。彼は心の平和と安定を保っているのである。これ以上の大きな富がありえようか。

彼は最も尊敬され愛され親しまれる人である。何人も彼以上に愛されることはないであろう。なぜならば慈愛と恩恵の生活を送るからである。すべての人に正義を以って接し、義務を正直に果たし他人の幸福のために誠実に働く。人々の心は自然と彼に惹きつけられ、彼を好み、愛し、尊敬するようになる。

彼は最も信頼される立派な人である。何人も彼以上に信頼されることはない。なぜなら信頼を裏切らず、また正義を踏みはずすことがないからである。自分の言葉に忠実で、その行ないは真っ直ぐである。自分の係わる出来事に対して明瞭かつ公正に接する。なぜならばいかなる時に

も、いかなるところにおいても唯一神がすべて見通しておられることを確信しているからである。このような人の信用と善意がいかに大きいかは筆舌しがたい。彼を信頼しない人はいるだろうか……。ムスリム（イスラーム信徒）の人生と品格は大体以上のようなものである。

もしあなたがムスリムの本当の特性を理解するならば、ムスリムは屈辱と卑下の下に生きることはできないということを知るであろう。ムスリムは究極においては必ず勝つであろうし、地上のいかなる力も彼を抑圧したり征服したりすることはできないのである。なぜならば、イスラームはいかなる現世の魅力や幻影によっても曇らすことができない品性を彼に植えつけるからである。こうしてムスリムはこの世で尊重すべき栄誉ある人生を終えた後、創造主の許に帰るのである。

創造主は最も豊かな恩恵を彼に施し給うであろう。なぜならば彼は義務を果たしたからである。自分の使命を立派に遂行し試練を見事に克服したからである。己の人生で現世と来世にわたり成功を収め、永遠に平和歓喜と幸福の中に生きるであろう。

これが人間の自然の宗教、すなわちいかなる個人、民族、時代、場所に拘らない宗教イスラームの本来の姿である。イスラームは自然の道であり、人間の真の宗教である。あらゆる時代、あらゆる国家、またあらゆる民族の中で唯一神を知り真理を愛する人はイスラームを信奉し、この宗教の戒律の下に生きてきた。彼らが「イスラーム」と呼ぼうが、その他の名で呼ぼうがそんなことは関係なく、彼らはすべてムスリムなのである。呼名はなんであれ、それはイスラームを意味し、イスラーム以外の何ものでもない。

第2章　信仰と従順

イスラームとは唯一神に従うことである。そのためには人生の根本的事実を知り、その事実に確固たる信念を持たなければならない。この事実とはどういうことであろうか。唯一神の道に適合した人生を設計するために知らなければならない根本の事柄とは何か。本章ではこのことを論じてみたい。

まず、我々は唯一神の存在に不動の確信を持たなければならない。唯一神の存在を確固かつ純粋に信じることができずに、どうして唯一神に従うことができるであろうか。

次に我々は唯一神の特性とは何かを知らなければならない。人間が持つ諸々の特質の中で、美徳と信仰に溢れた人生を設計できる最も高貴な人間を培うものこそが唯一神の特性である。もし無知ゆえに「神は唯一であり万物の創造主かつ支配者、宇宙を支えるものであり、かれに対比されるものはなにものもない」ことを知らなければ、虚構の神々に頭を垂れその恩恵を受けようとするであろう。

しかし神の真の特性である唯一性（タウヒード）を理解すれば、邪神の幻影に叩頭する過ちを犯さないはずである。同様に「神は全智者、全聴者、全視者として我々の公私一切の行為のみならず心の奥に秘められた思いさえも聞き、見、かつ知る」ことがわかれば、どうして唯一神をないがしろにし、唯一神に背くことができようか。人は自分が永遠の守護と意志の下にあると感ずるからこそ唯一神の法に従うのである。しかし唯一神のこの特性を認識しない人は無知ゆえに唯一神に従わず、彷徨うのである。唯一神のあらゆる特性に関してもこれと同様である。実際に、人間が持たなければならない特質と本性は、イスラームの道を探求し、唯一神の特性を深く認識することによってのみ発展し成就させるこ

とができる。人間の心と魂、信仰、道徳、行為を純化させ給う唯一神の本性を知るべきである。

この本性は単に生かじりや、つけ焼刃のような知識だけでは不十分である。知らぬ間に忍びよる疑惑や曲解に振り廻されないように心と魂にしっかり根を下ろした確固不動たる信念を持たなければならない。また唯一神の思召しに従った生き方を十二分に会得しなければならない。唯一神が喜ばれることと厭われることを知らずにどのようにして善きことを選び、悪しきを避けることができるであろうか。また、唯一神の法を知らずにどのようにしてそれに従うことができるであろうか。このように唯一神の法と人生の啓示を知ることは絶対に必要不可欠なのである。

しかし単に知るだけでは充分とは言えない。それが唯一神の法であり自己の救済はこの法に従う以外にないということに対して絶対的な自信と確信を持たなければならない。なぜならばこのような確信を伴わない知識は、「正しい道」に導く力になり得ず、不従順の袋小路の中に迷いこませるからである。

最後に、信仰と従順の結末と、不信仰と不従順の結末を知らなければならない。唯一神の道を選び純愛と美徳と従順の人生を生きるならば、どのような恩恵が注がれるかを知るべきである。また不従順と反逆の道を取るならば、どれほど凶悪で悲惨な結果が起こるかを知るべきである。さらに死後の人生を知ることは絶対に欠くべからざることである。死が生命の終焉ではないという事実に不動の信念を持たなければならない。死後の復活があり、人間は唯一神みずからが司る最高審判に呼び出される。そこでこの最後の裁きにおいて善行は報いられ悪行は罰せられる。いかなる人間も公平に取扱われ、しかもその裁きから逃れることはできないのである。このことは必ず起こるのである。この事実を認識するこ

とは、唯一神の法に従うために必要欠くべからざることである。

来世を知らない人は、従順も不従順も全くどちらでもよいことであると見なすであろう。人々は信仰する者も信仰しない者も共に似たりよったりの終末に会うだろうと考えている。というのも死後はいずれも灰燼に帰すると考えているからである。このような考え方を持っている人が、自発的な従順の人生には必ずついてまわるあらゆる厄介と困難を甘受してまで罪悪を回避することがどうしてできるであろうか。これらの罪はこの世では表面的には道徳的および実質的損失をもたらさないならなおさらである。このような心構えでは唯一神の法を認識することはできないし、当然唯一神の法に従うこともできないのである。また来世の生命と唯一神の審判を信じない人は、罪悪と災禍の誘惑に満ち溢れた世間の荒波に毅然と立ち向かうことはできないであろう。疑惑とためらいは人間から行動の意志を奪い取ってしまう。信仰が確固不動であればこそ、行動が確信に満ちたものとなるだろう。ふらついた精神では、決して毅然たる態度をとることはできない。唯一神の法に従うなら祝福が到来することを、またそれに従わないなら災禍と悲嘆に引き込まれることを確信して初めて、心底からこの道に従うことができる。このように信仰あるいは不信仰による人生の結末と来世の生命を深く認識することは、唯一神の教えに従って人生を歩むために極めて重要なことである。

以上が唯一神に従う人生、すなわちイスラーム的生き方のために必ず知らなければならない基本原則である。

信仰－それは何を意味するのか

信仰とは「知識と信念」であり、これまで論じてきたところのものである。英語でFaith（日本語で信仰）と訳しているアラビア語のイーマーンは、文字通りには「知る」「信じる」または「いささかの疑惑も持

たずに信じる」という意味である。信仰とはこのように知識と確信から生じる確固たる信念である。神の唯一性、神の属性、神の法、啓示された導き、報いと罰の神の定めを知り、それに不動の信念を持つ人はムゥミン（信仰者）と呼ばれる。この信仰は常に唯一神の意志に従い唯一神の御許に戻る人生に人を導くのである。また、このように唯一神の意志に従い生きる人をムスリムと呼ぶのである。

このことは信仰（イーマーン）を持たなければ何人といえども真のムスリムになりえないという厳然たる事実に帰着する。それは必要欠くべからざる根本的な事柄である。いや、それが解らなければ始められない出発点そのものであると言えよう。イスラームとイーマーンの関係は、ちょうど樹木とその種子の関係と同じである。樹木は種子がなければ育たないのと同じように、出発点となるべき信仰を持たない人間はムスリムになることはできない。逆に、種子を蒔いても樹木がいろいろな理由で発芽しなかったり、その発芽や成長が妨げられたり、遅れたりすることがあるように、信仰を持っている人もいろいろな弱さのために真に強いムスリムになれないことがある。ここで、信仰が出発点であり、信仰が唯一神に従った人生に人間を導くということ、信仰がなければムスリムになることはできないということを理解した。反対に信仰を持っていても意志が弱かったり、崇拝行為がたりなかったり、環境が悪いと、真のムスリムの生活をすることができないこともありえるのである。そのためイスラームの観点から人間を４つのカテゴリーに分類することができる。

1. 確固たる信仰一心から唯一神に服従する信仰を持つ人間。彼らは唯一神の道に従って唯一神が喜び給うことを行ない、唯一神が厭われ給うことを避け、全身全霊をあげて唯一神の嘉みし給うことを求める。その献身さは現世の財産や名誉を求める人を遥かに凌ぐものである。

このような人は真のムスリムである。

2. 信仰を持って唯一神を信じ、唯一神の法と審判の日を信じてはいるが、その信仰が強くないために絶対的に唯一神に服従することができない人間。彼らは真のムスリムのような強い信仰を持たず、怠慢と逸脱行為のゆえに罰を受けるであろうが、それでもなおムスリムである。怠慢で不埒者であるが反対はしない。唯一神の権威と法を認め、たとえ唯一神の法を犯すことがあっても唯一神の権威には反抗しない。彼らは唯一神の崇高さと自分の罪を認めている。彼らは罪を犯しているために罰を受けるかもしれないが、それでもかれらはムスリムである。

3. 全く信仰を持たない人間。唯一神の権威を否定し唯一神に反抗する人間のことである。仮に彼らが善い行ないをしたとしても、また社会に害悪や暴力を被らせなかったとしても、彼らは反逆者でありその見せかけの善行もほとんど価値がない。この人達は無頼漢のようなものである。彼らの行為は国の法律から逸脱していなくても彼らは法を守る忠実な市民になることはできない。全く同様に、唯一神に反逆する者の見せかけの善行は犯した罪悪と反逆と不従順の重大さを償うことはできないのである。

4. 信仰を持たず善い行ないもしない人間。彼らは世界に混乱をまき散らし、あらゆる暴虐と抑圧をほしいままにする。彼らは人間のうちでも最悪の部類に属する。彼らは凶悪者、罪人であるとともに唯一神に反逆する者である。

以上のように人間を分類すると、人間の真の成功と救いはイーマーン（信仰）にあることがわかる。唯一神に従う人生（イスラーム）はイーマーンという種子から生まれるのである。イスラームを信奉する人の性格は完璧であるかもしれないし、また欠点があるかもしれない。しかしイーマーンなくしてはイスラームたりえないのである。すなわちイーマ

ーン（信仰）なきところにイスラームはないのである。イスラームがないところにはクフル（不信仰）がある。形や性質は異なるかもしれないが、イスラームがないところにはクフルが蔓延りクフル以外には何ものもない。

このことは唯一神への絶対的服従の人生にとっていかにイーマーンが大切であるかを十二分に教えてくれている。

1. いかに唯一神を知るか

さてここで疑問がある。人はいかにして神、神の属性、神の法、最後の審判の日を知り、それを信じることができるのだろうか。

本書では我々の周囲と我々自身の中にある、数えきれない唯一神の啓示を述べてきたが、それは唯一神が－この壮大な宇宙の唯一の創造者、支配者である神が－存在し給い、宇宙を支配し、統べ給うものであるという事実を証明している。この証明は創造者の神聖なる本質を表わしている。唯一神のその偉大な叡知、万物を知り給う知恵、全知全能、慈愛、万物を統べ給う力、反抗を許さない力を示している。要するに、唯一神の御業の印はあらゆるところに顕在しているのである。だが人間の知性と能力ではそれを見出し理解することは難しい。この唯一神の啓示は全く明白自明であり、我々の眼は被造物の上に大きく書かれてあるものを自由に読めるはずである。しかしこの点で人間は過ちを犯してきたのである。ある者は 2 つの神があると言いふらし、ある者は三位一体を信じ始め、またある者は多神教に追従してきた。ある者は自然崇拝を始め、ある者は雨の神、空気の神、火の神、生命の神、死の神というように神を多種多様に分けてきた。唯一神の啓示が明らかであるにもかかわらず、人間の理性はさまざまな場合に曇り、正しい位置にある唯一神の実在を

見失ってきたのである。その理性は次々と疑念に惑わされ、思想の混乱をもたらすのであった。今さらここで人間の判断の誤りを説くまでもないであろう。

死後の生命に関しても、人間は多くの誤った考え方をしてきた。たとえば人間は死んだらすべて灰燼に帰し復活などありえないとしたり、あるいは人間は現実にこの世において繰返し生まれ変わり、来るべき輪廻の中で罰せられたり報いられるという類の考え方をしてきた。

人の道になるともっと難しくなってくる。人間の知性だけを頼りにして唯一神の嘉し給う完全に調和した人の道を規定することは非常に難しい。最高の理性と知性を備えた高い見識と豊富な思索経験を持っている人ですら、人間の生命と生き方について正しい考え方を形成する可能性は薄い。人生とは何かを思索し続け、悟ったとしても、まだ自分が本当に真理を悟り正しい道を歩んでいるのかその自信が揺らぐことがある。

人間の理性と知性と知識を最も完全かつ公平に試す方法は、外からの誘導なしで自分の持っているものだけに頼ることである。それぞれ正しい生き方を求めようと苦心するが、その場合、賢明に求道し努力して真理と正義に達した者は成功と救いを得、真理と正義に達しない者は敗北し去るのである。しかしながら唯一神は人間をこのような過酷な試練より免れさせ給うた。唯一神は人間に対する慈悲と慈愛をもって人間の中から真に人間らしい人間を召し給い、生きる意味と目的、死後の生命について教え、それに従うならば必ず成功し永遠の喜びを得られる道を示されたのである。この選ばれた人々は唯一神の使徒たち、預言者たちである。唯一神はこれらの人々にワーヒイ（啓示）という手段によって知識と知恵を伝達された。この唯一神の伝達を記した書物は、「神の書」または「神の御言葉」と呼ばれる。人間の叡知と知性の試みは、預言者

の純粋で敬神な生涯をくわしく知り、精魂を傾けてその貴き教えを学んでから、唯一神の使者を認めるか否かにかかっている。正しい叡知と健全な良識を持つ人は、唯一神の使者がもたらす真理を事実と認めその教えを受け入れる。もし人が唯一神の使者とその教えを拒むならば、それはその人に真理と正義を見出す能力がないことを表わしている。そしてこの真理を拒む者は試練に失敗したのである。このような人は唯一神と唯一神の法と死後の生命に関する真理を見出すことはできないであろう。

2. 未知の信仰

日頃私たちは何か知らないことがあると知っている人に尋ね、その人の言葉を信じ頼る。もし病気にかかり自分で治療できない時は医者の診断を受け、疑問なく医者の診断を受け入れてそれに従う。なぜだろうか。それは医者が医学的な助言を与える立場にあり、多数の患者を扱い治療した経験があるからである。医者の忠告をよく守り医者が勧めることを行ない、禁ずることを避ける。同様に、法律の問題においても法律の専門家の言葉を信用し、それに従って行動する。教育の場合も教師や先生を信じ、その教えを真実として受け入れる。ある場所へ行くのにたまたま道を知らない時は、その道を知っている人に尋ね、教えられた道を行く。要するに知らないまたは知ることができない物事について、普段日常生活で選ぶ正しい方法は、それを知っている人に助言を仰ぎそれに従って動くことである。その物事や問題に認識不十分な場合はそれを知っている人を苦心して探し、その助言を受け入れる。その場合、これと思う人を選ぶのにあらゆる努力をするであろう。しかしふさわしい人を選んだならば、問題なくその人の忠告を受け入れるだろう。このような信

じ方は「未知の信仰」と呼ばれる。自分の知らない事を知っている人に頼るからである。このように以前に知らなかったことを信じたり信仰したりすることは「未知の信仰」(イーマーン・ビル・ガイブ) と呼ばれる。

イーマーン・ビル・ガイブとは知らなかった物事についての知識を、それを知っている人から得るということである。神と神の本性を知らないとする。唯一神の天使たちが唯一神の命に従って全宇宙の機構を統べ、四方八方であなた方を取り囲んでいるということに気付かない。創造者の嘉し給うことを求めるにはどういう人生の道を辿らねばならないかが分からない。来世の生命についてもまた全く盲目である。これらすべての事柄に関する知識は、至高者と直接に接触を持ち正しい知識を授かっている預言者を通じて授けられているのである。預言者とは誠実さ、清廉、真実、さらに絶対的に純潔な生活によって、その知識を持っていると公言している真実を明白に証明できる人である。そしてなによりもまず、預言者の叡知と警告の力そのものが、真理を説く説教が信頼にたり、かつ従うに値すると聞く者に思わせるのである。このような確信がイーマーン・ビル・ガイブである。真理を判断し真理を認める態度 (イーマーン・ビル・ガイブ) は唯一神に従うために、また唯一神の嘉みし給うことと一致して行動するために不可欠である。なぜならば真の知識を得るためには、唯一神の使徒の他に仲介者が存在しないし、また正確な知識がなければ、イスラームの道を正しく進むことはできないからである。

第3章　預言

本書でこれまで論じてきたことは次の3つに要約することができる。

1、 まず、人間の正しい道は唯一神の教えに従った生活をすることである。唯一神を知り、唯一神に従い、唯一神を信じる生活をするためには次のことを知ることが不可欠である。唯一神の真性、唯一神が喜ばれることと厭われること、唯一神の選び給う道および唯一神の審判の日。そしてこれらを知ることが根本であり真実であることを固く信じること。これがイスラームである。

2、 次に、唯一神は人間に個人の努力だけでこの知識を得るという困難な仕事を免れさせられた。唯一神は普通の人々にはこの試練を課せられなかった。唯一神はこの知識を人類の中から選ばれた預言者に啓示し、唯一神の意志を人類に伝え人間に正しい道を示すように預言者に命じられた。

3、 最後に、一般の人々の義務は預言者を認めることである。その預言者が唯一神の本当の預言者であることを確かめてから、預言者とその教えを信じ、預言者に心から従い、その模範的な生き方に従って生きることであり、それこそが救済への道である。

この章では、預言者の性質と歴史およびその特質について論じている。

1. 預言者－その性質と必要性

人は、唯一神が慈愛をもって人間がこの宇宙で必要とする一切のものを授け給うたことを知っている。生まれたての赤ん坊はそれぞれの機能を持った五感と身体、そして感じるための心を授けられてこの世に出て

くる。人間が必要とするあらゆる潜在力、能力、機能は細心の考慮を払って創られ、驚くべき精巧さでちっぽけな身体の中に組み入れられている。微小なあらゆる必要物も予知され与えられている。人間が必要とするものは洩れなく与えられているのである。

同じことは、我々が住んでいる地球についても言える。人間の生存に不可欠なもの－空気、光、熱、水は地球に溢れている。幼児は目を開けるや否や母親の胸の中にある生命の糧を見出す。両親は子供の面倒を見、すくすくと成長させ、子供の幸福のためには自分の一切を犠牲にしようという抗し難い衝動が植え付けられている。子供はこのような生存の庇護の下で成長し、人生のあらゆる段階で必要とする一切のものを自然から得る。生存と成長のためのあらゆる物質的条件は与えられている。我々は全宇宙が人間に奉仕し、あらゆる局面で人間に役に立っていることを知る。

更に人間は生存競争に必要なあらゆる能力と機能－肉体的にも精神的にも道徳的にも－に恵まれている。ここでも唯一神は素晴らしい配慮を示し給うた。唯一神はこれらの恵みを厳密に平等には与えられなかった。唯一神の恵みが平等であるならば、人間は相互に信頼し合わなくなり、お互いの気づかいと協力の可能性が損なわれるであろう。このように人類全体としては必要とするあらゆるものを持っているが、しかし人間の間では天賦の能力は平等にかつ十二分に分配されてはいない。ある者は強い肉体を持ち、ある者は知的な才能に秀でている。ある者は偉大な文才をもって生まれ、ある者は雄弁の才能を持ち、またある者は優れた軍事的能力を持ち、更に商業に長ける者、数学の天才、科学への情熱、文学鑑賞、哲学的志向を持つ者など・・・・数え上げればきりがない。人間は特別な才能を持つために個性があり、他の人が理解できないような複雑で込み入ったことをも捉えることができるのである。これらの洞

察力、傾向、才能は唯一神の贈物である。それらは唯一神がある一定の特性を授けようと思召された人間の性質の中に具体化されている。これらの才能は大部分生まれながらのものであり、単に教育や訓練によって得ることはできない。

この唯一神の贈物に対する配慮を注意深く観察してみると、その才能が驚くほどうまく人間に分配されていることが明らかになる。人間の文化を保つために一般に不可欠な才能は普通の人間に与えられているが、限られた程度のみ要求される特殊な才能は少数の人間だけに与えられている。兵士、農民、職人、労働者の数は多い。しかし将軍、学者、政治家、知識人は比較的少数である。同じことは、職業、芸術、文化事業についてもいえよう。高い能力と偉大な天才であればあるほど、それを持つ人間の数が少ないことは一般的に妥当である。人間の歴史に不朽の足跡を残し、その影響が何世紀間も人類を導くような超天才は極めて稀である。その天賦の才能を持つ人にいたっては更に少ない。

ここでもうひとつの疑問に直面する。人間の文化が絶対的に要求するのは、法律と政治、科学と数学、技術と機械学、財政と経済等々の分野のエキスパートと専門家だけであろうか。それとも人間の文化は「正しい道」－唯一神と救いへの道－を人類に教える人間の出現もまた要求するのであろうか。その道の権威者達はこの世のあらゆる知識とそれを利用する方法と手段を我々に提供するが、しかし創造の目的と人生そのものの意味を我々に教える人がいなくてはならない。人間とは何か、また何故に人間は生まれてきたのか。誰が人間にあらゆる能力と資源を与えたのか。またその理由は。人生の正しい目的とは何か、いかにしてその目的を成就すべきか、人生の正しい価値とは何であり、いかにしてその価値に達することができるのか。これらの疑問は人間が最も知りたいと思う事柄であり、これらを知らなければ人間は健全なる基礎の上に文化

の殿堂を築くことはできないし、また現世においても来世においても成功することは難しい。しかし必要とする最も些細なものまで人間に授けられた唯一神が、人間の最も本質的で強いこの要求を知られないはずがない。断じてそんなことはありえない。事実またそうではない。唯一神は芸術と学問に非凡な人間を創られたが、その人が唯一神を知り理解するように深い洞察力と純粋な直感力と最高の能力を与え給うたのである。神御自身がその人々に信心と敬虔と正義の道を啓示し給うた。唯一神は人生の目的と道徳の価値をその人々に教え給い、その啓示を人類に伝え正しい道を示す義務を託された。その人々こそ預言者であり唯一神の使徒である。

預言者は特別の才能と生まれつきの精神的傾向、謙虚で意義深い生活によってこの世に高くそびえ立つ人である。預言者は芸術や学問上の天才達と同じように、希有な能力と生まれつきの天才を兼ね備えたその英姿は颯爽としている。天才的な人間は人を感服させる風格を持ち、人をして直ちに天才であることを認めさせ、納得させる何ものかを持っている。たとえば天性の詩人の詩に接すると、我々は彼が非常な天才であることを認める。もし生まれながらの才能を持たない人が文芸で一家を成そうと最大の努力をしたところで真の成功は期し得ないであろう。同じことは生まれながらの雄弁家、著述家、指導者、発明家についてもいえる。このような天才はすべて素晴らしい能力と驚くべき業績によって卓越し、他の人々の追従を許さない。預言者についても同じことがいえる。預言者の心は他の人々の心では捉えられない問題を把握する。預言者は他の人が論じることのできない物事を論じ、新しい光を投げつける。預言者は、何年も深く思索し瞑想しても誰一人として理解できなかった微妙で複雑な問題を看破する。理性も預言者の説くところを認め、心もその真理を直感する。日常の出来事の経験とこの世の様相を観察してみて

も、預言者の口から出るすべての言葉は真実であることが分かる。しかし我々が同じようなことを試みても、結局失敗に終わってしまう。預言者の気質は非常に善良、純粋で、その本質はすべての面において真実、率直、高貴である。預言者は決して不正を言ったり行なったりしないし、どんな悪事も犯さない。預言者は善行と正義を鼓舞し、他人に説教することを自ら実践する。預言者のいかなる行為も彼の生活が彼の信仰告白と一致していることを示している。預言者の言葉も行為も決して個人的な利益によって動かされることはない。預言者は他人の幸福のために苦しみ、自分の名誉のために決して他人を煩わせない。預言者の全生涯、全生活は真実と高貴と純粋と高尚なる思索の典型的なものであり、人間性の最も高揚した形である。預言者の人格は非の打ちどころがなく、いくらあらを探そうとしても彼の生活にはひとつの欠点も見出せないであろう。これらすべての事実とこれらすべての品格は彼が正真正銘の唯一神の預言者であり、我々は彼を信じなければならないという結論に到達する。

このような人が唯一神の本当の預言者であることが明らかに解れば、我々の当然なすべき次のことは預言者の言葉を受け入れ、その教えに耳を傾け、その言うところに従うことである。逆に預言者の言に従わないことは唯一神に従わないことになる－そして唯一神への不服従は我々を滅亡と堕落に導く以外のなにものでもない。そのため、預言者を容認すること自体がその教えを崇めることを義務づけさせ、絶対に異議を挟むことなく教えを受け入れさせるのである。あなた方はもろもろの命令の叡智と有為性を十分に把握することはできないかもしれないが、その教えが預言者から出た限りはそれが真実であることを十分に保証し、疑念の余地をはさむことはできない。あなた方が理解できないからといって真理が欠点や誤りを持っているのだということにならない。普通の人

の理解力には限界があり、その限界を無視することはできない。ある分野の技能を知らない人はその精巧優秀さを完全に理解できない。しかしそういう人が彼自身その道をよく知らないからという理由だけでその専門家の言うことに反駁するのはばかげている。この世のある重要な事柄において専門家の助言を求める場合、あなたがたはその専門家を信頼して依頼する。自分の判断と解釈を捨て、専門家に心より従うであろう。普通の人間はこの世のありとあらゆる学問や技能を修得できるものではない。そこで一般の人々にとって正しい道は、自分でできることは自分で行ない、できないことは自分を導き助けてくれるのに相応しい人を見つけるため、知恵と頭脳を働かし、そのような人を見出すと彼の助言を受け容れ、彼に従うことである。この人が自分の目的に最も有益で最上の人間だと確信するならば、その人に助言と指導を懇願し、心からその人を信頼することである。法律上の事件で弁護士に依頼するときに、あなたがたは弁護士のやることなすことにひとつひとつ干渉しない。むしろ弁護士を信頼し彼の忠告に従うだろう。医者のもとに治療しに行くならば、医者の指示に従うであろう。医学上の事柄にでしゃばることもしないし、理論上で自分の方が勝っているからと言って医者と議論をすることもないであろう。これが人生の正しい態度である。同じことが宗教においてもいえる。あなたがたは唯一神を知りたいと念願している。唯一神の嘉し給うところに従った生き方を知りたいと念願している。だがあなたがたはこれを知る手段を持たない。それ故に、唯一神の本当の預言者を探すことがあなた方の義務になる。預言者を探すにはあなたがたの最大の苦心と洞察力と知恵を動員しなければならない。なぜならもし預言者に悪い人間を選ぶならば、悪への道に陥ってしまうからである。しかしあらゆる事情を正しく照合し、考察して、この人こそ本当の唯一神の預言者であると決めるならば、あなたがたは心から彼を信頼し彼の

あらゆる教えに忠実に従わなければならない。

今や、人間の正しい道は預言者が示す道、しかもそれのみであり、人間の正しい生き方は預言者が唯一神から聞いて我々に教える生き方だけであるということが明らかになった。我々は預言者を信じ預言者に従うことはあらゆる人間に絶対必要であり、預言者の教えと預言者そのものを無視する者は自ら墓穴を掘って正しい道から逸脱し、迷路に入り込む者であることが容易に理解できるであろう。

この点で我々は奇妙な誤解をしやすい。預言者の完全さと真実さを認めても、預言者を敬愛する心掛けなく、また自分の処世上の都合で預言者に従わない人々がいる。このような人々はカーフィル（不信仰者、背教徒）であるだけでなく、不自然な愚かしい生き方をしているのである。何故ならば、預言者を認めていながら預言者の教えに従わないことは、まさしく自ら己の心を裏切り故意に不真実を求めていることに他ならないからである。世にこれよりも愚かなことがあるだろうか。「我々は預言者の導きなど必要としない。我々自身で真理への道を見出すであろう。」と言う人々がいる。これもまた誤った傲慢な考え方である。あなた方は幾何学を学んだならば、二点の間にただひとつの直線だけがあり、その他のあらゆる直線はその点から外れ、その点を通らないということを知っているに違いない。イスラームの用語でスィラート・ル・ムスタキーム（真直ぐな道）と呼ばれる真理への道についても全く同様である。この道は人間から始まり真直ぐ唯一神に通じ、この道はただひとつであり、ひとつでなければならない。その他のあらゆる道は外れ道であり、迷路に通じている。その道を無視し、他の方向を求める者はただ自らの想像、幻想のとりこにすぎない。彼はある道を選びそれが正しいと想像するが、間もなく自分が罠にかかり、自分の想像が作り出した嘘八百と迷路に陥っていることが解るだろう。道に迷っているとき、親切な人が

正しい道を教えているのに、「あんたなんかの指示を受けないし、道なんか教えて貰いたくもない。未知なところでも自分で手探りで道を探すし、好きなように目的地に達するさ。」と言って、親切な人の指図をきっぱり無視するような人間をあなたがたは考えることができるだろうか。預言者の明瞭な指導があるのに、このような拒否をするならば、全く愚劣の極みである。出発点から再び出直そうとするならば、それは時間と精力の大いなる浪費であろう。我々はこんな無駄なことを科学や学問の分野では決してしない。しかるに何故宗教においては敢えて愚かなことをするのだろうか。

これはよくある過ちであるが、少し考えてみればその欠点と弱点がすぐにわかる。あなたがたが少し立ち入って考えるならば、本当の預言者を信じることを拒絶する者は唯一神に至る真直ぐな道を見出すことはできないことがわかるであろう。その理由は、真実な人間の忠告を信じようとしない者はひねくれた態度を取るから真理への道は彼から離れ、彼は自らの頑固、傲慢、偏見、曲解の虜になるからである。またこの拒絶はしばしば、偽りの傲慢、盲目の保守主義、先祖代々の生き方に対する固執、自分自身の矮小な願望の虜のために、預言者の教えに服従することを不可能にさせる。もし我々が今述べた事態に陥るならば、真理への道は閉ざされる。世のすね者のように物事を真実の偽りない観点から見ることができなくなるのである。そうなれば救いの道を見出すことはできない。これに反して、我々が誠実で真理を愛し、上述の事態にとらわれていないならば、真実の道は常に我々に開かれ、預言者を信じようとしない理由は見つからないはずである。預言者の教えの中に我々の魂の反映そのものを見出し、預言者を発見することによって我々自身を再発見するのである。

何よりもまず重要なことは、本当の預言者は神御自身によって創られ

たということである。預言者を人類に遣わし、人間に唯一神の意志を伝達させられたのは唯一神である。預言者を信じ預言者に従うことは唯一神の命令である。だから、唯一神の使いを信じようとしない者は、現実に唯一神の命令に従うことを拒絶した者であり、反逆者となる。例えば一国の元首の遣わした総督の権威を認めようとしない者は、現実にはその元首の権威そのものを拒絶したことになる。このような不敬の人は反逆者とされる。唯一神は宇宙の支配者、元首、王の王である。唯一神の使者と伝道者の権威を認め、唯一神の遣わし給うた預言者として従うことは、あらゆる人間が責任を持ってなすべき義務である。唯一神の預言者に背を向ける者はたとえ唯一神を信じていようが信じていまいがカーフィル（背教者）である。

2. 預言者の歴史

ここで預言に関する歴史を調べることにしよう。どのようにしてこの長い連鎖が始まり、どのようにして唯一神のメッセージが次第に打明かされ、遂には最後かつ最高の預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に至ったかを調べる。

人類は最初一人の人間から始まったーアーダム（アダム）である。人間の家族が成長し人類が分かれたのはアーダム（アダム）からである。この世に生まれたあらゆる人間は結局あの最初の夫婦アーダム（アダム）とハウワー（イブ）ーに端を発しているのである。

＊注　これは非常に重要で革命的な概念である。その論理的な帰結は人類の一体化と人間の平等である。人間を階級、皮膚の色、人種、領土の相違に基づいて分類するのは愚劣である。ナショナリズムと偏狭な人種主義と残虐な反セム運動が世界をずたずたに引き裂いてきた時代において、この人類の一体化の

信条は将来への強力な光明である。—編者

また人間の起源を科学的に研究してみると、世界の各地でいろいろな人間が、同時にまたは異なった時期に生まれたのではないことは明らかである。大多数の科学者もまた最初に一人の人間が誕生し、そして全人類はこの同じ一人の人間から出ているという説を支持している。

地上の最初の人間であるアーダム（アダム）はまた唯一神の最初の預言者として任ぜられたのであった。唯一神はその宗教ーイスラームーをアーダム（アダム）に啓示し、イスラームを子孫に伝導するように命じ給うた。すなわち人間に、アッラーは唯一であり世界の創造者であり支配者であること、アッラーは宇宙の主人で人間はアッラーのみ礼拝し従うこと、人間はいつの日かアッラーの許に帰らねばならず、アッラーのみに助けを求めるべきであること、人間は唯一神の嘉し給うところに従って善良で謙虚で正義の生き方をせねばならず、そうすれば唯一神から良い報いを恵まれ、唯一神に背を向け従わないならば、人間は現世でも来世でも失敗者となり不信仰と不従順のゆえに厳重に罰せられること、これらのことを人間に伝えるように唯一神はアーダムに命じ給うた。

アーダムの子孫のうちで善良なる者はアーダムによって示された正しい道を選んだが、悪い者は彼らの父の教えを捨てて次第に邪道に踏み入っていった。ある者は太陽と月と星を崇拝し始め、ある者は樹木と動物と河川を崇拝しだした。ある者は、空気や水や火や健康やその他自然のあらゆる恵みと威力はそれぞれ異なった神々の支配下にあるから、それぞれの神々を礼拝して慰めなければならないと信じた。このようにして無知な多神教と偶像崇拝を生み出し多くの宗教が形成された。これはアーダムの子孫が地球上いたる所に散らばり、それぞれの異なった人種と民を形成した時代においてであった。あらゆる民はそれぞれ独自の形式と儀式を持つ異なった宗教を作り出した。神ー人類と宇宙の唯一の主

人で創造者ーは全く忘れ去られた。それだけではなく、アーダムの子孫達は唯一神が人間に示された偉大な人類の教師達が人間に教えた生き方さえ忘れてしまった。彼らは自分の短知少才に従ってきた。あらゆる種類の悪い習慣ができ、あらゆる種類の無知が彼らの間にはびこり、彼らは善と悪の見分けがつかなくなり混同し始めた。多くの悪が善と見なされるようになり、多くの善行が無視されるばかりでなく却ってこれは悪と呼ばれた。

＊注　イスラームの多くの見方は自然崇拝を最初の段階とする進化論的宗教観と正反対である。この説を唱える人々は原始的社会における自然崇拝の発表に止まり、もっと初期の宗教形態を調べようとはしないのである。最近の科学的研究によれば、タウヒード（唯一神崇拝）は礼拝の最も初めの形であって、その他のあらゆる形態は原始宗教を後に曲解して作られたものであるということがわかっている。この問題を詳しく研究したい方は、W・シュミッド博士の「宗教の起源と成長」（H・J・ローズ氏の英訳ありーロンドン、メセヴン社）を参照されたい。ー編者

この時にあたって唯一神はあらゆる民族に預言者を下し給い、イスラームを伝えさせた。預言者達はそれぞれの民族に忘れ去られた教えを覚醒させた。預言者達は彼らに唯一神を礼拝させることを説き、偶像崇拝と絶縁すること、つまり唯一神への崇拝と唯一神以外への崇拝とを結びつけることに終止符を打ち、あらゆる無知の習慣を取り去り、彼らに唯一神の嘉みし給うところに従った正しい生き方を教え、それに従うように説き、かつ社会で施行すべき生きた法を与えた。唯一神の真の預言者はあらゆる民にーあらゆる土地と人間の間にー遣わされた。彼らは一人残らず同じ宗教を持っていたーすなわちイスラームという宗教を（注）。もちろん、それぞれ預言者達の教えの形式と宗教の戒律は彼らが生まれた民族の必要と文化の程度によって少しは異なっていた。各預言者の教

えの詳細はその預言者が直面し取り除くことに苦心している害悪の種類によって決められた。改革の方式は様々な概念や考え方と戦う事態の相違によって異なった。社会、文明、知性の発達が低い段階にあった時は、預言者の法と指図は簡単であったが、それは社会が進化し発展するにつれて修飾され進歩していった。しかしこの相違は表面的一面的にすぎない。あらゆる宗教の根本的な教えは同じであった。一神がひとつであることを信じ、謙虚に善行と平和の生活に終始し、報いと罰を正しく審判する死後の世界を信じることである。

＊注　特に西洋の学者の間にはイスラームの起源は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）であるという誤解が多く見られる。ムハンマド（彼の上に平安あれ）を「イスラームの創始者」と呼んでいる学者さえある。これは真理の冒涜である。イスラームは唯一神のあらゆる預言者達の宗教であって、すべての預言者は唯一神から同一の啓示を受けたのである。預言者達はイスラームの創始者ではなく、教えを伝達する人間、メッセンジャーであった。イスラームは真実の預言者達から人類に伝えられた唯一神の啓示の教えであった。

人々の預言者に対する態度はさまざまであった。まず人々は預言者を虐待し教えを聞き入れることを拒絶した。ある預言者はその土地から追放され、ある預言者は殺害された。またある預言者は人々が白眼視する最中にも全生涯にわたって説教し続け、わずかに数人の共鳴者を獲得するにすぎなかった。激しい反対と嘲笑と侮辱を浴びてもこれらの唯一神の使者達は説教することを止めなかった。彼らの忍耐強い決心はついに勝った。彼らの教えは結局功を奏さないことはなかったのである。大多数の民族と民はついに彼らの宣教を受け入れ彼らの教義に改宗した。幾世紀も続いた逸脱と無知と破廉恥行為から生じた人々の悪い傾向は今や変わった形を取った。しかし預言者達の存命中は人々はその教えを受け入れ実行していたが、預言者の死後、人々は次第に歪曲した考え方を

宗教に取り入れ、預言者の教えを変えてしまった。人々は唯一神を礼拝するのに全く新奇な方法をとった。ある者は預言者を神の権化とし、ある者は預言者を神の子とした。またある者は預言者を神聖さにおいて神と同一とした。つまり、このことに対する人間のさまざまな態度は理性の乱用であり人間自身を愚弄するものであった。その使命が偶像をこなごなに破壊することであった預言者をこともあろうに人間は偶像にしてしまった。宗教に無知の習慣と儀式と根も葉もないでたらめの伝説と人間が作った掟をまぜて、人間は預言者が説いた教義を変え歪曲した。それによって時が経過するにつれて真実と虚偽が混然一体となり、無価値なものと本質的なものを区別することが出来なくなった。人々は更に、預言者の教えをこのように堕落させただけでは満足せずに、預言者の生涯に根も葉もない逸話やとるにたらぬ伝説を付け加え、預言者の生涯の信頼できる真の記録が認められないほどに虚偽のものにでっちあげた。追従者によるこのような虚構にもかかわらず、預言者の偉業は全く失われはしなかった。あらゆる勝手な作り変えとでっちあげにもかかわらず。あらゆる民の間に真理が少しは残存していた。神と死後の生命の考え方は明らかに似かよった形に同化した。善行と真実と道徳のある種の原理は全世界を通じて共通に認められる。このように預言者は人々が普遍的世界的宗教ー人間の本質と全く一致し、他のあらゆる教養やあるいは社会で良いとされているものを含み、全人類に自然に共通して受け入れられる宗教ーを安心して歓迎することができるように、それぞれの民族の知的態度に応じた説き方を準備した。

上に述べたように、はじめは預言者達がそれぞれ異なった民や民族集団の間に出現し、それぞれの預言者の教えは特別に自分の民族または集団に向けられていた。歴史の段階においては、それぞれの国家は地理的に離れた位置にあり、国家間の接触は互いに断絶されて閉鎖されていた

ため、国家間の交渉手段は存在しなかった。このような状況の中で、この世の生活に適した法律制度を伴った共通の普遍的信仰を布教することは困難であった。そのうえ、古代の民族の一般的状態は互いに非常に異なっていた。無知は大きく、それぞれの民族の間で道徳的頽廃と信仰の歪曲がいろいろな形で蔓延っていた。そのため預言者たちが生まれ、人々に真理を説教し、唯一神の道に向かわせ、徐々に害毒と頽廃を根絶し、無知蒙昧の生き方を改めさせ、敬虔な正しい生き方の最高原理を実践することを教えて、人生の生業に訓練させ熟達させることが必要であった。唯一神のみが、このように人間を育成し、人間を知的、道徳的、精神的に発展させるのに何千年かかったかをすべてご存知なのである。とにかく人間は進歩を続け、遂に人類が幼児時代から発展し、成熟の時代に入る時が来たのである。

交易、産業、芸術の発達と普及に伴って、交流が諸民の間で確立された。中国や日本から、遠くヨーロッパやアフリカ大陸から、本格的な交通路が海や陸で開かれた。多くの人々がものを書く方法を学んだ。知識と学問は広がり、思想は国から国へ伝達され、学問と技術は交流し始めた。偉大な征服者が現われ、征服を遠く広く押し進め、大帝国を建設し、多くの異なった民族をひとつの政治組織の元に結びつけた。この様にして諸民族は次第に交流を深め、彼らの相違は次第に少なくなってきたのである。この様な状況下で、包括的な全人的な人生態度を示唆し、人類の道徳的、精神的、社会的、文化的、政治的、経済的その他あらゆる切望を満たし、宗教的にも世俗的にも必要なものを具現化した唯一の信仰が唯一神から全人類に授けられることになったのである。2000年以上昔に人類は普遍的宗教を渇望するようになったほど、一般的な進歩を遂げたのである。仏教は道徳的原理をあまり含まず、人生の完全な組織ではなかったが、インドから発生し、東は日本や蒙古まで、西はアフガニ

スタンやボハラにも広まった。仏教の伝達者達は世界の隅々まで布教の旅に出た。数世紀後にはキリスト教が現われた。イーサー（イエス）（彼に平安がありますように）によって伝えられたこの宗教は本来イスラームに他ならなかったが、後の信奉者達はこの宗教をキリスト教と呼び、ペルシャや小アジアの各地に深く浸透し、更には遠くヨーロッパやアフリカの国々まで伝播していった。これらの出来事から、その時代の人々が全人類に共通普遍の宗教を切望していたことが判る。かれらは完全な真の宗教でないとわかると、どのように欠点があり、不完全で満足ができないものであれ、より優秀な宗教を他の諸民族に伝道し始めたのである。当時、人類の文明はこの様な決定的な段階に達しており、人間の心そのものが世界的な宗教を渇望していた時に、全世界と全民族のために一人の預言者がアラビアに生まれた。その預言者が伝道するために与えられた宗教が再びイスラームであった。－だが今度は個人と集団、人間の道徳的・物質的生活のあらゆる面にわたる包括的で完全な形で啓示されたのである。その預言者は全人類の預言者とされ、これを全世界に広める重大な使命を持っていたその預言者こそ、イスラームの預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）であった。

3. ムハンマドの預言

世界地図を見ると、我々が念願の世界宗教を受け入れるのにアラビアよりも他に相応しい国はどこにもないということがわかる。アラビアはアジアとヨーロッパの丁度真中に位置している。そしてヨーロッパからもそれほど遠くはないのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代、ヨーロッパの文化的に進んだ民族がヨーロッパ大陸の南部に居住していた。アラビアは地理的にインド人とヨーロッパ人のほぼ中間的な位

置を占めていた。この事実がアラビアに中心的な位置を与えたのである。

またその時代の歴史をひも解くならば、この預言が与えられるのにアラビア民族以上に相応しい民族は他にいなかったことがわかるだろう。

世界の偉大な諸民族は世界征服を目指して烈しく争ってきたが、この長い闘争と絶えざる戦果を通して財力と活力を強めた。アラブ民族は生気溢れる剛健な民族であった。いわゆる社会的進歩は進歩した民に数々の悪習をもたらしたが、アラブ民族にはそのような社会機構が存在しなかったため、奢侈と官能的飽満から生じる無気力、頽廃、放縦に陥ることはなかった。信仰を持たなかった 6 世紀のアラブ民族も、世界の征服民族の人工的な社会組織と文明から悪影響を蒙らなかった。アラブ民族は、当時の「社会進歩」に犯されない民族が必ず持っているあらゆる良い人間性を持っていた。かれらは勇敢で、恐れを知らず、寛大で、約束に忠実で、自由を愛し、政治的に独立していた。そのため、いかなる大帝国の支配にも屈しなかった。彼らは簡素な生活を営み、贅沢と放縦の生活には縁がなかった。勿論、後で述べるように好ましくない生活態度も合ったが、このような状況があったことは、何千年も彼らの中に預言者が出現しなかったことが理由であった。そのため彼らを啓蒙し、彼らの道徳生活からあらゆる有害な不純物を取り除く改革ができなかったこともその原因であった。乾燥した砂漠の中に何世紀にもわたって自由と独立の生活を営んだことが、アラブ民族に極端な無知が広がってしまったのである。そのため、彼らを人間らしくすることが並大抵ではできないほど、彼らの心は頑迷になり無知の伝統を固執するようになった。しかし同時に、かれらは尋常でない力を持った人間が改革のため招かれ、彼らに高貴な理想と完全な計画を与えるならば、その呼び声に応じ、目的達成のために迅速に行動し、そのためには戦いも犠牲も惜しまないような性格を有していた。アラブ民族は、彼らの使命のために、躊躇する

ことなく全世界の敵意とすら勇んで直面した。世界の預言者「ムハンマド」（彼の上に平安あれ）の教えを布教することを命じられた民族は、若く力強い剛健な民族であった。

さらにアラビア語を学び、その文学に精通するならば、アラビア語ほど高い理想を表現し、神に関する難解で微妙な問題を説明し、人間の心を強く打ち唯一神への従順を呼びかけるために相応しい言語が他にはないことを確信するであろう。簡単な文句と短い文章でも深い思想を表現し、同時に心に染込み、「聞いただけで人間を感動させ恍惚とさせる」ほど偉大である。アラビア語の言葉は蜜が耳に注ぎ込まれるというほど甘い。その言葉は、聞く人の全身、あらゆる器官がそのシンフォニーに感動させられるほど調和に溢れている。唯一神の偉大な御言葉、クルアーンに必要なのはこのような豊富な偉力ある言語である。

唯一神が世界の預言者の誕生地としてアラビアの土地を選び給われたのは、唯一神の偉大な叡智の顕われである。ここで、世界の預言者のために唯一神から選ばれた祝福された人がいかに特色のある素晴らしい人物であったかを見てみよう。

A．合理的な証明

目を閉じて、1400 年前に生きていたと想像するならば、今の世界の混乱と転倒の様相を全く持たない、現代とは完全に異なった世界を見出すであろう。その時代は思想の交流の機会など皆無であった。伝達の手段が制限され、未発達な状態であった。人間の知識は恐ろしく卑小で貧弱であり、見識は驚くほど狭かったのである。人間は迷信と不毛の悪ずれした考え方に覆い被されていたのである。

暗黒が支配し、人間の知識をほとんど照らさないような一条の学問の光があるにすぎなかった。無線もなければ電話もなく、もちろんテレビ

も映画もなかった。鉄道や自動車は夢にも考えられず、印刷機や出版技術は知られていなかった。手写しの写本と写本を作る人だけがごくわずかの書物を提供し、その書物は世代から世代へと受け継がれていった。教育は極恵まれた者だけの贅沢三昧を意味し、教育施設は全くないといってよかった。人間の知識量は少なく、見識は狭く、人間と物事に関する考え方は制限された環境に閉じ込められていた。当時の学者さえある点では今日の一般人よりも知識が乏しく、最も文化の高い人でも今日の普通の人間よりも洗練されていなかったのである。

実際に人間性は無知と迷信にはまり込んでいた。学問の光はあることにはあったが、いたるところに蔓延っている暗黒に対して負戦を続けているようであった。今日では常識的な事柄も、当時においては何年間も考察され忍耐強く審査された後ですら、ほとんど受け入れられることがなかった。現代人は万人の遺産である知識を獲得するために、危険な旅をし、全生涯を費やす必要はない。今日では「神話」や「迷信」に類する物事がその当時では疑いの無い真理であった。現代では我々が極悪で野蛮と見なす行為が当時の「秩序」であった。現代の道徳観では耐えられないことがその時代の道徳の精神であり、自分達の生き方とは異なる生き方があるとは当時ほとんど想像することもできなかったのである。不信と懐疑が広範囲に広まっていたため、当時の人々は超自然的で、異常で、神秘的で、信じられないような装いをまとわなければ、物事を深遠で崇高なものと考えようとはしなかった。人々は人類が神のような魂を持ち、人類が聖人になることは想像することもできなかったほどに劣等感をはびこらせていた。

B．アラビアー無限の暗黒

その混迷の時代に暗黒がさらに深く重く横たわっていた土地があっ

た。ペルシャ、ビザンチン、エジプトなど隣接する国々には低次の文明と学問の微光が見られた。しかしアラビアはそれらの文化的影響を全く受けることができず、砂漠の大海原にさえぎられて孤立していた。アラビア商人は数ヶ月もかかる遠距離を旅し、これらの国々のあちらこちらへ荷物を運んだ。だが彼らの旅行は知識を得るためではなくまたそれを吸収する下地として必要な知的教養も持ち合わせなかった。自分の国にはひとつの教育施設も図書館も持たなかった。誰一人として教養や知識の向上に関心を示さないようであった。読み書きのできるわずかの人々も学問と科学を活用するほどの教養を持ち合わせていなかったが、彼らは人間の考えの微妙な色合いを素晴らしく上手に表現することができる高度に発達した言語を持っていた。また高尚な文学趣味を持っていた。しかし彼らの当時の文学遺産を研究してみると、いかに彼らの知識が乏しく、いかに文化と文明の水準が低く、いかに迷信が心に染み込んでいたか、いかに思想と習慣が野蛮で凶暴であったか、またいかに道徳観が粗暴で頽廃していたかがよく解る。アラビアは統治者のいない国であった。それぞれの部族は主権を主張し、独立体であると信じていた。「ジャングルの法」以外に法律は無かった。罪の無い弱い人々から略奪し、放火、殺人が当時の秩序となった。生命と財産と名誉は常に危険にさらされていた。それぞれの部族は互いに深い敵意を抱いていた。どんな些細な事件でも残忍凶暴な戦争の原因となって、時には数世代も執拗に続く、国を挙げての大戦火に発展した。実際ベドウィン人は自分が生殺与奪の権利を持つと考える他の部族の人間をなぜ解放しなければならないのか理解できなかったのである。

＊注　ジョゼフ・ヘル教授は「アラビア文明」で次のように書いている。「これらの闘争は民統一の理念を破壊し、救いがたい「特殊主義」を発展させた－それぞれの部族は自給自足できると信じ、他の部族を殺人と強盗と略奪の合法

的犠牲と見なした。」ー編者

彼らの道徳や教養や文明に対する考え方はたいてい粗野で原始的であった。彼らは純粋なものと不純なもの、合法的なものと非合法的なもの、社会的なものと非社会的なものの区別がほとんどできなかった。彼らの生活は野蛮であった。彼らの秩序もまた野蛮であった。彼らは不貞と賭博と飲酒に耽り、分捕りと略奪をモットーとし、殺人と強盗は常習であった。良心にとがめられることもなく互いに真裸でいた。婦人でさえも、カアバを巡回する儀式の際にも裸であった。全く愚かな威信から、自分の娘を生きたままで埋めたりした。彼らは自分の父親が亡くなると継母と結婚した。彼らは食事の作法や清潔な衣服を身に着ける日常作法の初歩さえ知らなかった。

彼らの宗教的信仰は、世界の人々を破壊におとしめているものと同じ害悪を蒙っていた。石や樹木や偶像や星や妖精ー要するに神の外に考えられるすべてのものを崇拝した。彼らはいにしえの預言者の数を全く知らなかった。彼らはイブラーヒームとイスマーイールが自分達の先祖であると言うことは知っていたが、イブラーヒームとイスマーイールの宗教の教えと彼らが礼拝した唯一神についてはほとんど知らなかった。彼らの伝説にはアードとタムードの物語を見出せるが、その物語は預言者フードとサーリフの教えに全く触れていなかった。ユダヤ人とキリスト教徒はイスラエルの預言者のことを述べている伝説的な説話を彼らに伝えていた。

C．救世主の誕生

このような無明時代の暗黒の国に、一人の人間が生まれた。幼年時代に両親を失い、その後数年して祖父も亡くなってしまった。そのため彼

は同年配のアラビアの子供たちが受けるわずかばかりの訓練と教育すら受けることができなかった。少年時代にはベドウィンの少年達に混じって、羊と山羊の世話をしていた。成年に達すると商売をはじめた。彼が交際し商売をした人間はすべてアラビア人であったが、当時のアラビア人の状態はすでに述べた通り教育とはおよそ縁遠いものであった。彼は全く無学文盲、無教養で、学問のある人に交わる機会が全く無かった。というのは当時のアラビアには学問のある人間は全くいなかったのである。国外に出る機会は多少あったが、その場合も普通のアラビア商人の隊商となんら異なるところはなかった。もし彼がその旅行で学問のある人に接したり、文化と文明の素晴らしさを観察する機会があったとしても、それは彼の人格形成には全く資することがなかったであろう。なぜならば、そのような偶然の出会いは、生まれ育った環境から彼を完全に引き上げ、変貌させ、彼が生まれた社会とは全然関係のないような創造性と栄光のあの素晴らしい高さにまで、彼を成長させるほど深い影響を与えられるものではなかったからである。またそんなことはこの無学な一介のベドウィンを、彼が生きた国と時代だけではなく全世界と未来永劫の指導者にさせるような、あの深遠で広大な知識を獲得する手立てとはなりえなかったからである。人々はこの隊商旅行がどれほど彼に知的・文化的影響を与えたかを想像するが、実際にその旅行が当時の世界には全く存在しなかった宗教、倫理、文化、文明の理念と原理を彼に与えるものではありえなかったし、また当時何処にも見出すことができなかった崇高で完璧な人間性を彼に備えさせたわけではなかった。

D．石の中のダイヤモンド

本項では、アラビアの社会だけでなく当時の全世界と関連させながら、この高貴な人間の生涯と業績を見ることにしよう。彼は、共に青年時代

と壮年時代の初めを過した人々とは全く異なっていた。まず彼は決して嘘は言わない。彼を信じるあらゆる人々は異口同意に彼の誠実さを証言する。彼を憎悪する敵でさえも、彼の生涯のいかなる時にも嘘をついたと彼を非難したことは一度もなかった。彼は丁寧に話し、みだらな悪い言葉は決して使わなかった。彼は自分に近づく人々の心を魅惑する魅力的な人格とマナーを持っていた。人々と接触する際には常に正義と公正の原則に従った。彼は永年にわたり交易と商業に従事したが、決して不正な取引はしなかった。商売上彼と交渉する人々は彼の正直さを心から固く信じた。あらゆる人々は彼を「アル・アミーン（正直で信頼できる人）」と呼んだ。彼の敵ですら大事な所有物を安全に保管するために彼に委託し、彼は彼らの信頼に誠意を込めて応えた。全く無作法が慣例となっていた当時の社会で、彼は謙譲の権化のようであった。飲酒や賭け事を美徳と思っていた人々の間で生まれ成長したにもかかわらず、決して酒を口にせず、賭け事をしなかった。彼の民族は粗野で教養がなく不潔であったが、彼は最高の教養と最も洗練された美的感覚を体得していた。凶悪な心を持った人々に四方八方取り囲まれながらも、彼自身は親切な人情がミルクのように流れ出る心を持っていた。彼は孤児と未亡人を助けた。旅行者を親切にもてなし、他人を傷つけず、進んで人の為に苦難を忍んだ。戦争が飯より好きな人々の間で生きながら非常に平和を愛したので、人々が武器を取り戦火を交えようとした時でさえ、彼の言葉は人々を和らげた。彼は彼の部族の争いに加わらず真先に和解をもたらそうとしたのであった。偶像崇拝の民族の中に育っていながら、唯一真の神の外、天上にも地上にも礼拝するべきものは何もないと考えるほど、彼は澄んだ心と純粋な魂を持っていた。少年時代でさえ、被造物の前に頭を下げず、偶像に献げられた供物を食べようとしなかった。本能的に彼は神以外のあらゆる被造物と存在物への一切の崇拝を憎んだ。要

するにそのような無明と暗黒の環境の真只中にあっても高くそびえ光輝を放つ「この人間」の人格は暗黒の夜を照らす照明灯か、用途のない積み上げられた小石の中に輝くダイヤモンドに喩えることができる。

E．革命来たる

このように彼は清潔で純粋に人生の大半を過した後に、内面的な革命が起こった。周りに蔓延る暗黒と無知に辟易してきた彼は、四方八方から取り囲んでいる無知、頽廃、不道徳、偶像、無秩序のいまわしい海を泳ぎ渡りたいと願った。周囲のすべてのことが自分の魂と調和しないことに気がついた彼は、人の雑踏と騒音を離れて山にこもり、完全な隠遁と瞑想に昼夜を過し、魂と心が純粋に気高くなるまで断食をした。

彼は深く瞑想し、沈思し、周りの暗黒を取り去らせる光を求めていた。当時の頽廃し切った無秩序の世界に終焉をもたらし、新しくよりよい世界の基礎を築く力を得たいと強く願った。

見よ。驚くべき革命が彼を襲った。突然、彼の心に唯一神の光が輝き、祈願していた力が与えられた。その後、洞窟の隠遁生活から出て人々の所に行き、次のように説いた。

「あなたがたが礼拝している偶像はごまかしにしかすぎない。今すぐそんなものを礼拝することは止めなさい。どんな人間も、樹木も、星も、石も、妖精も、人間が礼拝すべきものではない。偶像の前に頭をさげて礼拝することを止めなさい。全宇宙の中に在るすべての物は全知全能の神のものである。唯一神こそが万物の創造者、養育者、支持者である。すべての人々は唯一神の御前に跪き、唯一神に祈り、唯一神に従わねばならない。神こそが我々の唯一の主である。唯一神にのみ礼拝し、唯一神の命令に従いなさい。略奪と横領、殺人と強盗、不正と残虐ーあなたがたが行っているすべての悪徳は、唯一神の眼から見れば罪である。あ

なたがたはこの悪い道を避けなさい。唯一神はそれらすべてを憎んでおられる。真実を話しなさい。正義を守りなさい。何人も殺してはいけない。何人からも盗んではいけない。分け前は公平に取りなさい。公正に判断して正当と思われる分を他人に与えなさい。

あなたがたは人間である。あらゆる人間は唯一神の眼から見れば平等である。誰も顔に恥ずかしい汚名をつけて生まれてきたのではないし、誰も胸に名誉の勲章をぶらさげて世に出てきたのでもない。唯一神を恐れ、唯一神を敬い、言葉と行為が真実である人間だけが高貴で名誉を与えられる。家柄の良さや自分の民族が栄えていることは偉大さと名誉の尺度ではない。唯一神を恐れ良い行ないをする者が最も高貴な人間である。唯一神の愛を失い不義不正に耽る者は呪われた人間である。あなたがたには死んでから唯一神の御前に現われなければならない日が必ずやって来る。あなたがたは自分の行為−善行も悪行も−の責任を釈明しなければならないだろう。そしてその時、あなたがたは何事も隠すことができない。あなたがたの全生涯の記録は唯一神の御前に明らかにされる。あなたがたの運命は自らの行為の善し悪しによって決定される。真実の審判者 −全知全能の神−の法廷では、不公平やえこひいきの心配はない。あなたがたの素性や家柄は全く考慮されないのである。真の信仰と良き行為のみがその時あなたがたの役に立つであろう。信仰と善行を深めてきた者は天国で永遠の幸福の中に生きるが、そうでない者は地獄の業火の中に投げ入れられるのである。」

これが彼のたずさえてきた唯一神のメッセージであった。無知な人々は彼に背を向け、尊い彼の身体に悪口と小石を容赦なく投げ付けた。想像を絶するあらゆる責苦と残忍さが彼に向けられた。そしてその苦難は一両日だけではなく13年間絶えず続いたのである。そしてとうとう彼は追放されたが、そこでも休息を与えられなかった。彼は追放された先

でも様々な方法で苦しめられた。アラビアの全土は彼に反抗するように煽動された。そこで更に 8 年間も絶えず迫害は続けられ、あらゆる迫害を蒙ったが、それでも彼は自分の立場から一歩も動こうとはしなかった。彼は目的と任務において決意が固く毅然とし不動であった。

F．なぜあらゆる敵意があるのか

なぜ彼の民が彼に対しこの世に生かしておけないほどの憎しみを抱くのか疑問に思うかもしれない。金銀やその他の現世の富が問題なのだろうか。流血の戦いが原因だろうか。それとも彼が自分の民族に物質的なものを要求したのだろうか。そうではない。あらゆる敵意は彼が人々に唯一の真の神を礼拝するように求めたからであった。彼は唯一神以外のものを崇拝してはいけないと説教し、人々の悪い生活態度を非難した。彼は聖職者の世俗的策略の根元を暴いた。彼は人間の中の高貴と貧賤の差別を烈しく非難し、宗教と民族の偏見を全く暗愚だと非難した。記憶がないほど遠い昔から続けられてきた社会構造のすべてを改革しようと試みたのである。一方で、人々は彼の伝道の原理が先祖伝来の伝統を破壊するものだと主張し、彼に伝道を止めるか、それとも最悪の結果を望むのかと彼に詰め寄った。

人々は何のために彼がそのようなあらゆる苦難を耐え忍んだのか尋ねるかもしれない。彼が教えを説くことをやめ、預言を流布することをやめさえすれば、彼の民族は彼を主人として迎え、彼にその土地のあらゆる富を差し出すことを提案した。しかし彼はその誘惑の提案を拒否し、任務のために受難の道を選んだ。それは何故だろうか。もし人々が信仰深くなり行ないが正しくなることで、彼が何か得をすることがあったのだろうか。

なぜ彼は富と贅沢と王位と安逸と豊かさを少しも求めようとしなか

ったのだろうか。彼はそんなものなど比べようにならないほどもっと高価な物質的利益を得ようとして活動していたのだろうか。その物質的利益は、彼が火の中、槍の中にも敢えて入って行き、心の平静を失わずに魂の苦悶と肉体の苦難を何年間も耐え忍ぶことができるほど欲望をそそるものであったのだろうか。我々はこの疑問に答えるために沈思考慮せねばならない。

人間の進歩向上のために最善の努力をしている人が、こともあろうに幸あれと願っている当の人々から石を投げられ、虐待され、亡命先にあってさえ住居を与えられなかったのにもかかわらず、彼らの幸福のために奮闘することを惜しまず、他人の幸福のために自分の幸福を犠牲にする人がいるならば、その人間こそ同胞に対する献身、同胞愛と親切の最も貴い模範である。どんな真面目な人間であっても、誤った思想のためにそれほど大きな辛苦をなめることができるだろうか。いかなる不正直な思索家と夢想家でも、自分の民族が彼に対して武器を取って立ち上がっており、想像もできないような危険と暴虐に対しても自説を堅持して、冷静、沈着でいられるほど自分の理想に対する強い確信と決意を抱くことができるだろうか。

最後の勝利を得るまで彼の運動を導いた信仰とそれに基づく忍耐と決意は、それ自体彼の宗教の崇高な精神を雄弁に物語るものである。心の中に少しでも疑惑と不安があったならば、彼は 23 年間もの長い間、暴虐の限りをつくした攻撃と陰謀に対し勇敢にいどみ打ち勝つことは決してできなかったであろう。

これが彼の内部の中に起った革命の一面である。もうひとつの面はもっと素晴らしく驚くべきことである。

G．40才の時に襲った運命の大展開

40年間にわたり彼はアラビア民族の中でアラビア人として生きてきた。その長い間、彼は政治家、説教師、雄弁家としては全く知られていなかった。後に彼が布教を始めた時、誰も彼が知恵と知識のエッセンスを授けられているのを聞いた者はいなかった。形而上学、倫理学、法学、政治学、経済学、社会学等の原理を講述している彼の姿は一度も見られなかった。偉大な将軍としてはもちろんのこと、普通の兵士としても知られることがなかった。彼は神、天使、啓示書、初期の預言者、過去の民族、審判の日、死後の生命、地獄と天国などについては一言も話したことはなかった。もちろん彼は優れた性格と魅力的な態度を持ち教養が高かったが、将来人類が彼から偉大で革命的な精神の糧を期待できるような印象の強い並外れたものは何も彼にはなかった。

彼は人々の間では気立ての良い真面目で落ち着いた上品な性格で、法を守る人として知られていた。しかし彼が新しい教えをたずさえ洞窟から出て来た時には変貌していた。

彼が唯一神の啓示を説教し始めると、全アラビア人が愕然とし、威怖し、驚倒し、彼の素晴らしい雄弁に魅せられた。彼の雄弁は彼を最も憎む敵ですら思わず耳を傾けるほど印象的、魅力的であった。彼の雄弁は人々の心の奥底、骨の髄まで浸透し、彼らの足場を切崩し、古い宗教と文化に別れを告げさせるほどの力強いものであった。彼が自分に敵意を抱く人々に向かって彼が朗唱した文句に似たものを一行でもよいから作ってみるようにと挑戦した時、全アラビアの最高級の詩人、説教師、雄弁家でさえ、言葉の美しさと表現の卓越さにおいてそれに匹敵するなにものも作れなかったほどに比類のない素晴らしさであった。

H. 普遍的なメッセージ

今や彼はユニークな哲学者、優れた革命家、文明と文化の新しい形成者、優れた政治家、偉大な指導者、最高の審判官、比類なき将軍として人々の前に現われた。この無学な砂漠のベドウィンは、何人も彼の先にも後にも説くことができなかったような学識と知恵を以って人々に語りかけた。彼は形而上学と神学の複雑な問題を説明した。過去の改革者の業績を評論し世界の様々な宗教を批判し、民族の間の摩擦と相剋に判断を与えた。倫理の規範と文化の原則を教え、最高の思想家や学者が生涯をかけて研究し、人事百般について深い経験を経て初めて本当の真理が把握できるような社会文化、経済組織、集団行動、国際関係の原理を説いた。実際、人間は理論的知識と実際的経験において進歩するに従って、知識と経験の美しさは漸次実ってくる。

以前に一度も剣を振ったこともなく、軍事訓練を受けたこともなく、戦争にはただ一度のみ－しかもただ傍観者としてしか参加したことのなかった、この静かな平和を愛好する商人はどんな激しい戦いであれ一度も退却しなかった勇敢な軍人に突然変わった。兵器が未発達で、交通機関が貧弱であった時代に、僅か9年間でアラビア全土を征服したほどの偉大な将軍となった。彼の軍事的才能と機動力は最高度に発揮され、彼が鼓吹した尚武の精神と、アラビア人の塵のような群衆に授けた軍事訓練によってアラビア軍は数年を経ずに、当時の二大強国を打ち破り、当時知られていた世界の大部分の支配者になったほどの奇跡を生んだ。

50 才をとっくに越してから今まで政治活動には少しの関心も示さなかったこの落ち着いた物静かな人物が、非常に偉大な政治の改革者として突然世界の舞台に現われた。彼はラジオや無線や印刷物の助けを借りないで120万平方マイルの砂漠に散らばって住む人々、好戦的で無知、粗野、暗愚で、部族同士で共倒れになるまで戦いに耽っている民族をひ

とつの旗印、ひとつの法律、ひとつの宗教、ひとつの文化、ひとつの文明、ひとつの政治形態の下に統一させた。

彼は人々の考え方、習慣、道徳を変えた。粗野な人間を上品に、野蛮な人間を文化的に、悪事をなす性悪な人を、唯一神を恐れる敬虔な正しい人間に変えた。彼らの手には負えない頑固な性質は法律と秩序に服従させる模範となった。高名と言える偉大な人間を一人も産んだことのないその民族が彼の影響と指導の下に、数世紀の間に宗教と道徳と文化の原理を説教するために世界の隅々まで出かけた何千人もの高貴な人間を生んだ。

彼はこの偉業を世俗的な魅惑や圧迫や強制によってではなく、魅力的な態度と誰からも慕われる高潔な人格と確信に溢れた伝道によって成し遂げたのであった。彼は高貴で上品な態度で彼に敵意を抱く者とすら仲良くなった。限りない同情心と親切心で、人々の心をとりこにした。彼は正しい政治をした。彼を生まれ故郷から追放したり、アラビア全土をあげて彼に反対させた、憎むべき敵すら、復讐に狂って彼の亡くなった伯父の肝を食ってしまった人々でさえも弾圧しなかった。彼らを征服した時には、彼ら全てを許した。彼は自分の個人的不満や自分に加えられた悪意のために復讐したり、恨みを晴らすようなことは決してなかった。

彼は国の支配者になったにもかかわらず、非常に無私無欲かつ謙虚でその生活は極めて簡素であった。以前と同じように粗末な草葺の泥の家に住み、床の上に眠り、粗末な衣服を身にまとい、最も質素な食物を食べ、時には何も食べずに出かけて行くこともあった。そして夜は主の御前に祈りをささげながら過すのが常だった。いつも貧しく一文もない人々を救いに出かけた。

彼は労働者のように真っ黒になって働くことを少しも恥とは思わな

かった。最後まで王者のように華美を誇示したり、権勢者や富者にありがちな傲慢な態度が少しも見られなかった。普通の人のように人々と共に日常坐臥し、苦楽を共にした。彼は人々と交わり一緒になっていたので、知らない人や外部の者には、誰が民の指導者、国家の支配者であるのか見分けることは難しかったという。

それほど偉大でありながら、彼が貧しい人に接する時の態度は、何等他の人と分け隔てがなかった。全生涯の努力と奮斗を通じて、自分のための利益や報酬を求めず、また後継者に財産を残さなかった。彼は総てを共同体のために投げ出したのであった。彼の子孫がザカート（喜捨）の恩恵を受けることすら禁じたほどであるから、彼や彼の子孫のためには何ものをも求めなかった。将来彼の信者が彼の一族のためにザカート（喜捨）の全割当を出すようになるのを恐れたからであった。

I．人類の思想に対する預言者ムハンマドの貢献

この偉大な人間ムハンマド（彼の上に平安あれ）の業績はこれだけではない。彼の真の価値を正しく評価するためには、世界史全般の背景の下で調べねばならない。そうすれば1400年前の「無明時代」に生まれたこのアラビアの砂漠の無学な人間が「近代」の本当の開拓者、人類の本当の指導者であったことが明らかになる。彼は彼の指導を受け入れる人々だけではなく、彼を指導者として認めない人々、さらには彼を非難する人々の指導者でもある。ただ唯一の違いはこのような人々には彼の導きが感じられないが、依然として彼らの考え方と行動に影響を及ぼし、彼らの生活を律する原理であり、かつ近代の精神そのものであるという事実に気がつかないことである。

人間の思想の進向を、迷信、自然でないもの、神秘的なものごとや修道院制度への執着から、合理的なアプローチ、真実を愛し、敬虔で調和

がとれた現世の生活を愛するようにさせたのは彼であった。要するに、超自然的な出来事のみを奇蹟と見なし、その出来事に宗教的使命の真理の証明を要求し、それに対する合理的証明と信仰を求める努力を真理の基準であると強調したのは彼であった。当時、自然現象の中に唯一神の印を求めていた人々を開眼させたのは彼であった。根拠のない推測の代りに、観察、実験、調査に基づいた合理的な理解と健全な推測の道に人類を導いたのも彼であった。感覚による認識、理性、直観力の機能と限界を明白にしたのも彼であった。精神的価値と物質的価値の調和をもたらしたのも彼であった。信仰に知識と行動を調和させたのも彼であった。宗教の力をもって科学的精神を創造し、科学的精神に基いた真の熱烈な宗教を発展させたのも彼であった。

あらゆる形の偶像崇拝、人神崇拝、多神教を徹底的に根絶し、神は唯一であるという非常に強い信仰の下に、迷信や偶像崇拝を基本としている宗教でさえこの一神教的要素を取らざるをえないようにしたのも彼であった。倫理と霊性の根本的概念を変えたのも彼であった。難行苦行と自己寂滅のみが道徳の規準と精神の純潔－その純潔は現世の生を逃れ、人間性のあらゆる欲望を無視し、肉体をあらゆる苦難に投じなければ得ることはできない－であると信じていた人々に、身近な世界の現実の出来事に積極的に打ち込むことによって精神の発達、道徳の解放と救済を得ることの道を示したのも彼であった。

人間の本然の価値と位置を人類に教えたのも彼であった。神の化身や神の子だけを道徳的教師かつ精神的指導者として仰いでいた人々に、いかに神に近いとはいえ神ではない人間が地上における神となることはできないことを教えられた。偉大な人間を神と宣言し崇拝していた人々は、自分達が崇拝しているものは結局人間にすぎず、それ以上の何者でもないということを納得させられた。いかなる人間も「生まれ」によっ

て神聖や権威や支配を要求することはできない、また何人も不蝕賎民や奴隷や農奴の名を持って生まれたのではないと強調したのも彼であった。人類の一体化、人間の平等、世界の真の民主主義と真の自由思想を鼓吹したのも彼であった。

観念の領域から一歩眼を転ずれば、この無学であった人物の思想が世界の様々な規範とあり方に強く影響を与えている現実を無数に見出すことができる。今日世界に広く行きわたっている善行、文化と文明や思想と行為の純潔に関する非常に多くの原理はその起源をさかのぼれば彼に負うところが多い。彼が与えた社会の規範は当時の人々の社会生活とその構造に深く浸透しており、今日に至るまで影響をあたえている。彼が説いた経済の基本原理は世界史の多くの運動に取り入れられてきたが、将来においてもその可能性は高い。彼が規定した支配の規範は世界の政治に対する考え方と倫理に多くの論争をもたらしたが、今日までその影響は持続されつづけている。彼の天分を示す法学と裁判の根本的な原理は諸国家の法廷における裁判に顕著な影響を与えてきたが、後世の多くの立法学者にとって永遠に尽きない導きの源泉でもある。この無学なアラビア人が始めて国際関係の全機構に足跡を残し、戦争と平和の法を規制した最初の人間であった。なぜならば、戦争にもまた倫理的規範が必要であり、国家間の関係は共通の人類という基盤に立って調整することができるという考えを持った人が以前に一人もいなかったからである。

J. 偉大な革命家

世界史上でこの素晴らしい人間の崇高な姿が、国家の英雄として名高いあらゆる時代のあらゆる偉人達の上に高くそびえているので、彼と比較するとどんな偉人でさえも小人のように見えるほどである。彼らの中

には、唯一人として人間生活の１つか２つの面以上に深い印象を与えることができる天才はいなかったのである。ある者は理論と思想に優れているが、実際的な活動に欠けている。ある者は行動の人であるが見識がたりない。ある者は政治家としてのみ知られ、ある者は策略と戦術の名人であった。ある者は他のいろんな局面に目をつぶって、社会生活の一面だけに全力を注いだ。ある者は倫理的・精神的な真理の探究に精力を注いだが、経済や政治は無視した。ある者は経済や政治に専心したが、道徳や人生の精神的な面を怠った。要するに、我々が英雄と呼んでいる人々はたいてい人生行路のただひとつの面の達人、熟練者であった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）だけがあらゆる美徳長所を人格の中に渾然と具現している唯一の例である。彼は哲学者であり、預言者であり、自分の教えを一身に具現した人である。軍事的天才であるとともに偉大な政治家である。立法者であり、かつまた道徳の教師である。宗教の導きであるとともに精神の光明である。彼の眼は人生のすべての面を洞察し、彼が触れて飾らないものはひとつもない。彼の法と命令は国際関係の調整から、飲食、身体を清潔にすることなどの日常生活の習慣に至るまで広範囲にわたっている。彼の理論に基づいて、文明と文化を建設し、欠陥や弱点や不完全がいささかも見られないほど、人生の矛盾した様々な面に素晴らしい調和を生み出している。このように完全で万能的な人間を彼の他に指摘することができるだろうか。

世界の著名な人物の多くは環境の産物であると言われている。だが彼の場合は一種独特である。彼の環境は彼の人格形成には関係がないように見える。また歴史的に見て彼の出現が当時のアラビアの事情に合致したとはいえない。せいぜい言えることは、当時のアラビアの事情は、相争っている部族をひとつの民に結合することができ、また他の諸国を支配下において経済統一と福祉の基礎を置くことができるような人間の

出現ーつまり当時のアラビア人の特性をすべて持ち、残虐、圧迫、流血、欺瞞、偽善その他善悪のいかなる手段を用いても、民を富ませ、その後継者の遺産として王国を残すことができるような民的指導者の出現を切実に待望していたということである。当時のアラビアの歴史を見ると、この切実な要求以外に見出すことができない。

ヘーゲルの歴史哲学やマルクスの唯物史学の観点からせいぜい言えることは、時代と環境が、民を形成し国家を建設することができる指導者の出現を要望したということである。しかしヘーゲル流やマルクス流の哲学では説明できないことがある。どうしてそのような環境が、最善の道徳を教え人間性を清め無明と暗黒の時代の偏見と迷信を一掃する使命を帯びた人間、人種や民族や国家の頑迷な区別を超越した人間、自国のためばかりでなく、世界の幸福のために、道徳的、精神的、文化的、政治的な上部構造の基礎を置いた人間、理論上でではなく現実に、商取引、市政、政治、国際関係等を道徳の基礎の上に置き今日までも彼の生前と全く同じように、知恵と預言の傑作と見なされ、世俗的な生活と精神的な向上の間で調和する中庸の統合を作りだした人間ーこのような人間を生み出すことができたのだろうか。このような人間が、アラビア全土に浸透した暗黒の産物と言えるであろうか。

彼はただ自分の環境と無縁であったばかりではない。彼の偉業を見るならば彼は本当に時空間のいかなる限界をも超越しているという結論に達せざるをえない。彼の洞察力はアッラーの許しによってあらゆる俗界や自然界の障害を通り抜けて看破し、あらゆる人間の歴史を包括しているのである。

彼は歴史から忘れられるような人間ではない。生きている時良い指導者であったために賞讃されるのではない。彼は彼の時代にそうであったように、いつの時代にでもその時代の要望に応え、時代と共に進む、人

類の唯一無二で比較する者がない指導者である。まことに彼の教えは明日の朝のようにモダンである。

人々が「歴史を作った人間」と呼んでいる人達は「歴史から作られた人間」にすぎないのである。まことに人類の全歴史において、彼こそは「歴史を作った人間」の唯一の例である。革命的大改変をもたらした世界の偉大な指導者達の生涯と環境を調べてみると、どんな場合についても革命の気運がまさに起ろうとする動乱に対して凝集して、ある一定の方向に進路を取り、ただ爆発する瞬間を待っていたにすぎないことを見出すのである。この革命の気運の時を得て行動に移すために、革命指導者は舞台と役割が前もって定められていた役割を果たしたのであった。これに反してあらゆる時代のあらゆる「歴史を作る人間」と革命的な人物の間で、彼は革命に必要な条件を結集するために方法と手段を探し、彼の目的のために要求される人間を自ら教育し作り上ねばならなかった唯一人の人間である。なぜならば、彼の運命が投ぜられたアラビアの人々の間には革命の精神とそれに必要な道具立てが少しも存在しなかったからであった。

彼は力強い人格で何千人もの弟子達の心に消えることがない影響を与え、彼の望むように彼らを統治した。彼の意思によって革命の基盤を準備し、その性格と姿を創り上げ、さまざまな事件の流れを彼が期待し要望したひとつの水路に信仰を定めた。これほど優れた「歴史を作る人間」の例を、これほど優秀で素晴らしい革命の例を誰か他に指摘することができるであろうか。

K．最終の証明

アラビアのような未開の地で、1400年前の無明時代に元々羊飼いで無学なアラビアの商人あった人間がなぜこのような光、知識、偉力、能

力、そして素晴らしく発達した道徳を持つようになったのであろうか。我々はこのことを沈思考慮しなければいけない。

彼の啓示に特別変わったところは何もない。それは彼自身の心からの産物であると人は言うかもしれない。もしそうであるならば彼は自分が神であると宣言したはずである。そしてもし彼が当時そのような宣言をしたならば、ただ想像からクリシュナや仏陀を神と呼び、イーサー（イエス）を神の子と呼び、また火や水や空気などの自然の力さえ平気で崇拝していた当時の人々のことを考えると、このような素晴らしい人間を主なる神自身であるとただちに認めたであろう。

しかし、彼の啓示は全く反対であった。彼は次のように言った。

「私はあなた方と同じ人間である。私は自分では何物もあなた方に与えることはできない。すべては唯一神が私に啓示されたものである。私が持っているあらゆるものは唯一神のものである。同じものを誰一人作ることができないこの啓示は唯一神の啓示である。私の心の中から作られたものではない。そのひとつひとつの言葉はすべて唯一神から啓示されたものであるが、あなたがたの眼には私の功績であるように映っているであろう。素晴らしいすべての偉業、私が授けたあらゆる規範、私が説き教えたすべての原理の中で、私から出ているものはひとつもない。これらはどれひとつとっても私個人の能力と才能から作り出すことは全く不可能である。私はあらゆる物事を為すためにすべて唯一神の導きにすがっている。唯一神が欲し給うことを私は行ない、唯一神が命じ給うことを私は宣言しているだけである。」

ああ、なんと素晴らしい感激であろうか。なんという正直さと名誉の模範であろうか。嘘つきや偽善者は他人の名誉を自分のものに横取りしても、化けの皮がはがれても、少しも良心のとがめを感じない。しかしこの偉大な人間は、彼のインスピレーションの源を見出す方法がないの

で、誰も彼を否認することができないほど明らかなことでも、彼の偉業のどれひとつとして自分の名誉にしようとはしない。

目的の完全な率直さ、性格の素直さ、魂の崇高さをこれ以上に証明するものがどこにあるだろうか。これほどの多芸多才と能力を秘密の経路から得ているのに、自分を啓発し激励したあらゆるものの源泉を明らかに指摘した彼ほど誠実な人間が他にいるだろうか。これらの要因はすべて、このような人間こそ唯一神の真の御使いであったという結論に我々を必然的に導くのである。

この人こそ我々の預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）であった。彼は驚嘆すべき価値を持った人であり、美徳と善良の典型であり、真実と正直の象徴であり、唯一神の偉大な使徒であり、かつ全世界への御使いであった。彼の生活と思想、彼の真実と正直、彼の信仰と親切、彼の性格と道徳、彼のイデオロギーと業績－これらはすべて彼の預言に対する非難の余地のない証明である。偏見を持たずに彼の生涯と教えを研究する人は誰でも明らかに彼が唯一神の真の預言者であり、クルアーン－彼を通じて人類に与えられた啓典－は唯一神の聖典であったことを証明するであろう。偏見を持たない真面目な真理の探究者はこの事実を見逃すことはない。

更に、ムハンマド（彼の上に平安あれ）を通じてのみ、我々はイスラームの道を正しく知ることができることをはっきり理解しなくてはならない。クルアーンとムハンマド（彼の上に平安あれ）の伝承（ハディース）だけが、人間が唯一神の意志をことごとく知るために役に立つ信頼できる典拠である。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は全人類に対する唯一神の御使いであり、往古から、次から次へと続いてきた預言者達の輪は彼のところで止まった。彼は最後の預言者であり、直接の啓示を通じて人類に伝えるのが唯一神の御意志であったあらゆる教えは、ムハ

ンマド（彼の上に平安あれ）を通じて唯一神から授けられ、クルアーンとハディースの中に大切に秘められている。真理の探究者、正直なムスリム、唯一神の道の誠実な信者にならんと願う人は誰でも、唯一神の最後の預言者を信じ、彼の教えを受け入れ、彼が人類に示した道を進まなければならない。これが成功と救いへの真の道である。

4. 最後の預言者

ここでムハンマド（彼の上に平安あれ）の預言の面を考察しよう。

預言の性質は既に論じられたが、この論述で預言者の出現は普通の出来事ではないことが明らかになった。預言者の肉体の現存もまたあらゆる土地、民族、時代に必要欠くべからざることでもない。預言者の教えは人々を正しい道に導く照明灯であり、預言者の教えと導きが生きているかぎり、いわば預言者自身も生きていることになる。預言者の本当の死は肉体的な死ではなく、彼の教えが弱まり、彼の導きが改ざんされることにある。以前の預言者達は、信奉する人々がその教えに卑しくへつらい、教訓を勝手に作り変え、偽りの出来事を付け加えて伝承を汚してしまったために、死んでしまったのである。以前の聖典－タウラート（ムーサーの律法）、ザブール（ダーウードの詩篇）、インジール（イーサーの福音書）－はいずれも今日その原典が残っていないため、その聖典を信じる人々も原典を持っていないことを告白している。過去の預言者達の生涯についてその記録はフィクションが非常に多く混じっているため、彼らの生涯を正確に信頼できるように記述することは不可能である。彼らの生涯は物語や伝説となってしまい、信頼すべき記録はどこにも見当たらない。記録が失われ、存命中の教えが忘れられているばかりでなく、いつどこでその預言者が生まれ成長したか、いかに彼が生き、どん

な規範を人類に与えたかも確実に言えないのである。まさに預言者の真の死はその教えが死滅したことにある。この点から事実を判断するのならば、何人もムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えが生きていることを否定することはできない。彼の教えは偽作されずにあるし、偽作することもできないのである。クルアーンー彼が人類に与えた啓典ーはその語句もつづりも少しも違いなく、原典のままに存在している。彼の生涯のあらゆる出来事ー彼の言ったこと、訓示したこと、行動したことなどーは完璧な正確さで保存されている。そのため、13 世紀経った今日でさえ、その歴史の叙述は、我々がすぐ間近に自分の眼で彼を見ているように思うほど明瞭で完全である。どんな人間の伝記もイスラームの預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の伝記ほどよく保存されているものはない。我々の生涯のあらゆる場合に、我々はムハンマド（彼の上に平安あれ）の導きを求めることができるし、彼の伝承から教訓を得ることができる。それが最後の預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の以後に他のいかなる預言者も要求されない理由である。

また新しい預言者の出現を必要とする 3 つのことがある。預言者の死去だけではもう一人の預言者の出現を招くことにはならない。新しい預言者を要望する事態は次のように要約される。

1、 前の預言者の教えが勝手に作り変えられたり、偽作されたり、または教えが死滅しその復活が望まれている場合。このような場合には、人々の生活から穢れを取り除き彼らの宗教を元の形態と純粋に再生するために新しい預言者が送られる。

2、 既に亡くなった預言者の教えが不完全であり、その教えを修正し、改善し、またその教えにいくらか付け加えることが必要な場合。その時は、それらの改善進歩を成し遂げるために、新しい預言者が遣わされる。

3、 以前の預言者がある特定の民や地域にのみ遣わされた場合は、他の民族や国家のために預言者が派遣される。

以上が新しい預言者の出現を必要とする 3 つの根本的条件である。だが注意してみると、これらの条件がどれひとつとして今日存在しないことがわかる。最後の預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えは完全に保存されてきて不朽のものとなり生きている。彼が人類に示し給うた導きは完全で欠点がなく、聖クルアーンの中に大切に保存されている。イスラームのあらゆる典拠は完全にそのまま残っており、預言者のあらゆる教訓と行為は、少しの疑惑を持たずに確かめることができる。このように彼の伝えた教えは完全に元のままであることから、この点に関し新しい預言者の必要はないのである。

*原著者注　もうひとつの場合は、他の預言者を助けるために預言者が現われる場合である。だがそのような場合の例は極めて稀である。ークルアーンにはその例が 2 回あるにすぎないーこのような預言は極めて例外であり一般的でないから、我々はこれを 4 番目として取り上げなかったのである。

第二は、唯一神は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を通じて、唯一神の啓示された導きを完成され給うたのであるからイスラームは人類の完全な宗教である。彼は「今日、汝らの為に、汝らの信仰ー宗教を完成したり。汝らに与えるわが恵みを完成したり。」と言い給うた。人生の完全なる道として、イスラームを徹底的に研究するならば、このクルアーンの言葉の真理が分かる。イスラームは現世と来世の生き方の導きを与え、そして人間の導きに必要欠くべからざることは決して漏れていない。宗教は今や完成された。未完成という理由で新しい預言者を求める必要はない。

最後にムハンマド（彼の上に平安あれ）の伝えた教えは、特定の民族、

土地、時代にのみ与えられたのではない。彼は「世界の預言者」として一全人類に対する真理の御使いとして一遣わされたのであった。クルアーンにおいてはムハンマド（彼の上に平安あれ）に「おお人類よ。我は汝らすべてへの唯一神の使いである」と宣言させている。彼は「世界の（あらゆる民族への）祝福」であると記されている。彼の教えの説き方は普遍的で人間的であった。それが彼以後に新しい預言者の出る必要がなく、彼がクルアーンにハータムン・ナビィイ（最後の預言者）と記されている理由である。

唯一神と唯一神の道を知るための唯一の源泉はムハンマド(彼の上に平安あれ）である。我々は、終末の日まで人間を導くことができる完全で総括的な彼の教えを通じてのみ、イスラームについて知ることができるのである。今や世界は新しい預言者を必要とはしない。ムハンマド(彼の上に平安あれ）を心から信じる人々が彼の神託の伝導者となり、それを全世界に布教し、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が人類に与えた文化の建設に努める人々のみを世界は必要とする。彼の教えを実行に移し、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が建設するために遣わされた、唯一神の法に支配された社会を建設することができる人々を世界は必要としている。これがムハンマド（彼の上に平安あれ）の使命であり、その成否に人間の成否がかかっている。

第4章　信仰箇条

先に進む前に、今まで論じてきたことを復習し、その真髄を要約することにしよう。

1. イスラームは宇宙の主であられるアッラーに帰依し服従することであるが、唯一神と唯一神の法を知る唯一の真正かつ信頼できる源泉は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えである。イスラームとは預言者が説く唯一神の教えを信仰し、彼の生活態度を模範と仰ぎ、これに近づこうと努力する宗教であると定義される。
2. 古代にはそれぞれの民族に別々の預言者がいた。そして預言の歴史は、単一の同じ民族の中にすら、幾人もが次から次と出現したことを教えている。その時代においては、イスラームとはそれぞれの真の預言者によって民族に教えられた宗教の名前であった。イスラームの性格と真髄はいかなる時代や国においても同じであったが、礼拝の仕方、法の様式、その他の生活の詳細な規範や規定は、あらゆる民族の地方的な事情にしたがって多少異なっていた。そのため、どの民も他の民の預言者に従う必要がなかったし、その民の責任はその預言者から与えられた導きに従うかどうかということに限られていた。
3. この多くの預言者の時代はムハンマド（彼の上に平安あれ）の出現とともに終焉した。イスラームの教えは彼を通じて完成された。ひとつの根本的規範が全世界のために作られ、彼は全人類の預言者となったのである。彼の預言は特定の民や国家や時代のためのものではなく、彼のメッセージはすべての人々、あらゆる時代のためのものであった。古い規範はムハンマド（彼の上に平安あれ）の出現とともに廃棄され、彼は新しい完全な生き方を世界に与えた。そのため「最後の日」までに、将来いかなる預言者も現われないし、いかなる宗教の法も啓示さ

れないのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えはアーダム（アダム）のすべての子孫、全人類のためのものである。イスラームはアッラーとムハンマド（彼の上に平安あれ）に従うこと、すなわち彼の預言を認め、彼が我々に信じるように求めたことを信じ、彼に従い彼のあらゆる命令と指図を唯一神の命令と指図として従うことを真髄としている。これがイスラームである。

以上のことは我々にひとつの疑問に抱かせる。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が我々に何を信じることを求めたのか。イスラームの信仰内容はどんなものであるか。それでは我々はこの信仰の内容を調べ、それがいかに簡易で、真実で、愛されて、価値があるものか、また現世と来世において人間の地位をどれほど高めるものか見ることにしよう。

1. タウヒード（神の唯一性）

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が説いた最も根本的で重要な教えは、神が唯一であることを信じることである。このことはイスラームの最も基本的なカリマ（信条）で「アッラーの外に神はなし（ラー・イラーハ・イッラッラー）」と表現されている。この美しい言葉はイスラームの根本であり、土台であり、精髄である。真のムスリムをカーフィル（不信の徒）やムシュリク（神の神性を他のものと結びつける者）から区別するものがこの信条である。この言葉を認めるか拒否するかによって、人間と人間の間に異なった世界を形成する。それを信じる人々はひとつの共同体を作り、それを信じない人々は反対の集団を形成する。信じる人々は正しい道を見出し、真理を知り、真実の光の中に彼らの進路を押し進める。信じない人々は次から次と幻影を追い、暗黒の中を彷徨する。信じる人々は何ものにも妨げられない進歩と、現世においても

来世においても確固たる成功がある。それを拒否する人々には、結局あるのは無駄と失敗の虚しき栄えである。まことにタウヒードは革命的な概念であり、恐ろしく威厳のある理念であり、かつイスラームの出発点そのものである。

しかし信者と不信者の間に生じる差異は、単に二つ三つの言葉を復唱した結果ではない。二つ三つ言葉を唱えても、こんなに大きな差異が生じるはずがない。その真の原動力はこの教理と条件を心から受け入れ、現実生活でそれを完全に守ることにある。「アッラーの外に神はなし」という言葉の真の意味と、それを人間生活へいかに取り入れるかという方法を知らないならば、この教理の真の重要性を認識することはできない。この基本的な事柄が行なわれなければ、決して効果がない。「食物」という言葉をただ繰り返し言ってみても、飢えを和げることはできない。処方箋をただ口に出して唱えても、病人を治すことはできない。同じように、その意味を理解しないでカリマを復唱しても、現われるはずの変化がいっこうに出てこない。教理の完全な意味を把握し、その意義を理解し、それを心から信じ、全身全霊をあげて受け入れ、それに従った時初めて、思想と生活に変化が起こるのである。このカリマを十分理解していなければ、それは完全に効力を発しない。我々は火が燃えることを知っているから、火を避ける。我々は人間が毒に触れると死ぬと知っているから毒を見ると避ける。同様にタウヒードの真の意味を十分に理解すると、我々は信仰と行動においてあらゆる形の不信仰、無神論、多神教を排斥することができる。これが神の唯一性を信じることの自然な成行きである。

A．カリマの意味

アラビア語でイラーilah という言葉は拝される人間、たとえば偉大

であり権威があるために崇拝され威服され、謙虚に頭を垂れる値があると思われる人間や、人間には理解できないような偉大な力を持つ存在を意味する。イラーの概念は無限の力、驚嘆すべき力を持つという意味も含んでいる。またイラーは、他のものがイラーに依存しているが、自らは何者にも依存しないという意味も持っている。さらにイラーという言葉は秘密や神秘という意味にも使う。つまりイラーは見えもしなければ五官で知覚することもできない存在である。ペルシャ語の「ホダー」、ヒンディー語の「デヴァ」、英語の「ゴッド」という語が、多少はイラーハと似た意味を持っている。その他の外国語にも同じような意味を持つ語がある。

＊注　たとえばギリシア語のOEOS、ラテン語のDeus、古代ゴード語のguth、デンマーク語のgud、ドイツ語のgottなど。(Encylopedia Britanica Vol 10、P460から引用。)

一方、アッラーという言葉は唯一神の根本的な名前である。「ラー・イラーハ・イッラッラー」は文字通りには「アッラー」という名で知られている至大唯一の存在の他にイラーはないという意味である。全宇宙でアッラーの外に礼拝に値するものは絶対にない。アッラーのみを畏服し賛美して頭を垂れるべきである。アッラーはあらゆる力を持ち給う唯一の御方であられ、万物はアッラーの御恵みを必要とし、万物はアッラーの助けを懇願しなくてはならないということを意味する。アッラーは我々の五感では認識できず、我々の知性ではアッラーがどんな方であるか知ることはできない。もちろん見ることも聞くことも触れることもできない。

これらの言葉の意味を学んだら、次にその言葉の真の意味を探究しよう。

知られている最も古い人間の歴史から、また我々が手に入れることができた最も古い古代の遺跡から、人間はあらゆる時代に神または神々を認め、礼拝していたことがわかる。現代でも世界のあらゆる民族は－最も原始的な民族から最も進歩した民族にいたるまで－神を信じ礼拝している。この事実は、神を信じ神を礼拝しようという思いが人間の本性に埋め込まれていることを明らかにしている。人間にそういう気持ちを抱かせるなにものかが人間の魂の中にある。

しかし、それは何であり、なぜ人間はそうせざるをえないような気になるのかということが問題になる。この問題に対する答えは我々が広大無辺の宇宙における人間の位置を考えてみるならば、見出されるだろう。この観点から人間の本性を考察すれば、人間は全能ではないことが明らかになる。人間は自給自足や単独で存在することもできないし、またその能力も無限ではない。まことに人間は弱く、もろく、貧しく、乏しいものである。人間は多種多様な力に依存し、それらの助けがなければ生きて行くことができない。人間の生存を支えるのに必要なものは数えきれないほどあるが、それらすべてが人間の能力の全く手の届かないところにある。人間は時にはそれらを自然から容易に見出すが、時にはそれらを失ってしまう。人間が得ようと努力する重要で価値あるものがたくさんある。時にはそれらを得るのに成功し、時には失敗する－なぜなら、それらを得ることは人間の能力を超えているからである。人間に有害なものも多くある。不慮の事故は人のライフワークを一瞬の間に破壊する。悪運は人間の希望を突如として失わせる。疾病、苦労、災害、不幸などはたえず人間をおびやかし、幸福への道を妨げる。人間はそれらを無くそうと努めるが、成功もするし失敗もする。山々、河川、巨大な動物、野獣など、偉大さと素晴らしさで人間を畏怖させる多くのものがある。人間は地震や嵐やその他の自然の災害を経験する。頭上にある黒雲がた

ちまち厚くなり暗くなり、雷鳴がとどろき、稲妻がひらめき、どしゃぶりになる。太陽や月や星が永劫不変の動きをしていのを見ると、人間は天体が何と偉大で力があり素晴らしいものであるか、それに反して人間は何と弱く価値のないものであるかということをしみじみ考える。太陽や月や星の驚嘆すべき現象と自分自身の虚弱さを意識することによって、自らが弱く、卑少で、無力であることを深く実感するのである。神に対する予備的な考えがこのような意識と合致するのは極めて当然である。人間はこれらの畏るべき不可抗力な力を持つもろもろの存在を考える。そしてそれらが偉大で不可抗力であるという意識は人を謙虚にし、頭を垂れさせる。それらが素晴らしくとてつもない力を持つという意識によって、人間はそれらに助けを求め、恵みを与えてくれるように、懇願する。またそれらを恐れ、それらから破壊されないように怒りを避けようとする。

無知の最も初めの段階においては、「偉大さや素晴らしさが眼に見えたり、人間に危害を加えたり恩恵を与えたりしそうに思える自然の存在そのものの中に、真の力と権威を具有している」と人間は考えた。その段階で人間は、樹木、動物、河川、山々、火、雨、空気、天体、雷その他数えきれないほど多くの有体物を崇拝する。これは無知の最も初歩的な形態である。

人間の無知がいくらか少なくなり、光と知識の微光が多少現われ、知性の視野が広まると、人間はこれらの偉大な強力なものは、それ自身は全く無力で他に依存しており、決して人間以上ではないと一人間よりももっと無力であるということを一知るようになる。最も巨大で強い動物も微小な細菌のように死に、あらゆる力を失う。大きな川も満たされたり欠けたりして、遂に水が涸れることもある。高い山も人間によって爆破、紛砕される。地上の作物が豊かであるかどうかも、土地自体が決定

するのではなく、実は水が豊作にさせるのであり、水の不足は凶作をもたらす。水でさえ何ものの支配も受けないのではなく、実は水は雲をもたらす空気に依存している。空気自体は力のないものであるが、空気を有効に利用させる他の原因がある。月や太陽や星もまた、ある強力な法則に支配されており、その法則の指令がなければ少しも運動することはできない。以上のようなことを考えると、目に見えるあらゆるものを支配し、あらゆる力の宝庫であるかもしれない、神とおぼしき偉大な神秘的な力を持つものの存在の可能性に、人間は心惹かれる。このようにして自然現象の奥にある神秘的な力への信仰が発生し、多くの神々が空気、光、水などのように自然のさまざま面を支配していると想像され、その神々を表現するために暗示的な形や象徴が作られる。そして人間はこの像や象徴を礼拝し始める。これもまた無知の一形式にほかならず、知的文化的であるべきこの段階においてさえも、真理はまだ人間の眼には隠されたままである。

人間の知識と学問が更に進歩し、生命や存在の根本的問題を更に深く考えるようになると、人間は宇宙における全能の法則と万物の支配を発見する。日出や日没、風や雨、星の運行、四季の変化などになんと完全な秩序が見られることだろう。数えきれないほどのさまざまな力が見事に調和して働いている。宇宙のあらゆる原因がそれに従って共同して働き、一定の時間に一定の結果を生ませる。なんと強力な「いとも賢き法」であろうか。「自然」のあらゆる面の中にあるこの秩序、調和、法則への完全な従順を考察するならば、多神教徒でさえ、「至高の権威を持ち給う、他の神々より偉大な神があらせ給うにちがいない」と信じざるを得ないであろう。なぜなら別々な独立した神々がいるとするならば、宇宙の全機構は群雄割居の戦国時代のごとく大混乱するからである。人間はこの最も偉大な神をアッラーやペルメシュワル、ゴッド、ホダーイ・

ホーダアイガンなどいろいろな名前で呼ぶ。しかし無知の暗闇が依然続いているので、人間は「至高者」と並んでその他の神々も礼拝し続ける。人間は神の国が地上の国と差がないと想像している。地上の支配者が多くの大臣、知事、その他の責任のある役人を持つように、一段格下る神々は「至高の神」のいわば責任ある役人のようなものになる。神の役人を喜ばせ、機嫌を取らなくては「至高の神」に近づくことはできない。だから神々も礼拝し、助けを求め決して怒らせてはならない。このようなわけで、神々は「至高の神」の御許に行く際に通らなければならない代理人のように考えられている。

人間の知識が増せば増すほど、人間は多数の神々に満足できなくなる。神々の数は減りはじめる。もっと人間が進歩すると神々の正体をひとつひとつ厳密に研究し、遂には人間が作りあげた神々はどれひとつとして神性を持っていないことを発見する。その神々と見なされているもの自身が、実は人間と同じく、いや人間よりももっと無力な、人間の手による被造物である。それゆえ、その神々はひとつひとつ脱落し、最後に「唯一神」のみが残る。しかし唯一神に対する人間の考え方は、依然、無知の要素の残滓が含まれている。人々は神が人間のように身体を持ち、ある特定の所に住むと想像する。ある者は人間の形をした神が地上に下りて来られると信じている。またある者は神に近づくには或種の仲介が必要であり、その仲介がなければ何も得ることができないと信じている。またある者は神がある姿と形を持っておられると想像し、礼拝するためにその神の像を自分の前に置かなければならないと思っている。このような歪曲した神の考え方はまだ消え去らず根強く続いており、それらの大半は現代ですらいろいろな民族の間に今も残っている。

タウヒードは神の最高の考え方であり、神があらゆる時代に預言者を通じて人類に授けられた知識である。最初にアーダム（アダム）が地上

に遣わされた時に持って来たのがこの知識であった。ヌーフ（ノア）、イブラーヒーム（アブラハム）、ムーサー（モーゼ）、イーサー（イエス）（彼らすべてに神の平安あれ）に啓示されたものと同じ知識であった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が人類にもたらしたのもこの知識そのものであった。それは純粋かつ絶対的で、少しも無知の影のない知識であった。預言者の教えから逸脱し、自分の誤った推理や偽りの認識や偏った解釈に頼るだけでも、人間はシルク（唯一神に他のものを付与すること）、偶像崇拝、クフルの罪になる。タウヒードはあらゆる無知の雲を追い払い、地上を真理の光で照らす。

では、このタウヒードー「ラー・イラーハ・イッラッラー」という短い言葉が、どんなに重要な真理を示しているかーそれがどんな真理を伝え、どんな信仰を育てたかを調べることにしよう。以下の点を熟慮すると、それを理解することができる。

まず神性の問題に取り組んでみる。人間は壮大な無限の宇宙と向かい合っているが、宇宙の始まりを知ることもできなければ、その終わりを心に描くこともできない。宇宙は悠久の昔から定められた道を動き続け未来に向かってその旅を続けている。数えきれないほど被造物が宇宙に現われたーそして毎日毎日現われ続けている。ー宇宙の現象は驚嘆極まりないものであり、それを考える人は度肝を抜かれ茫然自失する。誰の助けも借りず、自分のヴィジョンで宇宙の実体をつかみ、理解することは人間には不可能である。宇宙のすべてのものが、単に運や偶然だけで現われたとは信じられない。宇宙は物質の偶然の集団ではない。宇宙は関係ない雑然とした物を寄せ集めてできているのではない。宇宙は渾沌とした無秩序な意味のないものの集塊ではない。宇宙のすべては、創造者、設計者、管理者、支配者がいなければありえないのである。しかし

誰がこの巨大な宇宙を創造し、管理することができるのだろうか。万物の主であらせ給う唯一神のみが、宇宙の創造者でありうるのである。唯一神は無限で永遠である。唯一神は全知全能である。唯一神はすべてを知り給い、すべてを見給う。唯一神は宇宙に存在するすべてのものの上に最高の権威を持ち給う。唯一神は無限の力を持ち、宇宙と宇宙に存在するすべてのものの主である。唯一神には欠陥や弱点は微塵もなく、唯一神の御業を妨げる力を持っているものはなにもない。このような御方だけが宇宙の創造者、管理者、支配者となることができる。

第二に、これらの神性と力はすべて唯一の神にのみ与えられていることが必要である。2つまたはそれ以上のものがあらゆる特質と能力をそれぞれ持ちつつ、共存することは実際不可能である。彼らは衝突するにちがいない。他のあらゆるものの上に立って、それらを統べる唯一の、ただひとつの最も勝れた支配者がいなければならない。あなたがたは同じ州に2人またはそれ以上の知事、同じ軍隊に2人以上の最高司令官がいると考えることができるだろうか。仮にこれらの力をさまざまの神々に平等に分配し、それぞれの神が独立した分野を持ち、ある神は知恵の神、ある神は摂理の神、ある神は生命の神であると考えたとしても、宇宙は分離することができない全体をなしているから、そのような各々の神々が自らの御業を果たす時には、他の神々に依存するであろう。神々が独立対等の時は神々の間で調整がとれない場合も起こるであろう。そしてもしこの不調整が起きれば、世界は粉々になってしまう運命になる。これらの特性は移すことはできないものである。ある特性がある時にはある神に依存し、また別の時には、それを別の神に見出すことは混乱を招く。なぜならば自らが生きていることができない神は他のものに生命を与えることができないし、自らの神性力を保つことができない神は、結局、無限に広大な宇宙を支配することはできないからである。

このように問題を深く考察すればするほど、神のあらゆる力と本性は唯一な神のみに存しなければならないという確信をますます強く持つであろう。多神教は無知から出たものであって、合理的な綿密な研究に耐えることはできない。多神教は実際不可能である。人生と自然の事実から多神教の説明の材料がでてこない。人生と自然を観察すると、神が唯一であることが真理であると人間に教えているのである。

さて、このように神を考えることが正しく完全であることを念頭に置きながら、この広大な宇宙を考察しよう。胸に手をあてて考えてみてください。あなたがたが見るすべての物の中に、あなたがたが感知するすべてのものの中に、あなたがたが考え、感じ、想像するすべてのものの中にーあなたがたが知っているありとあらゆるものの中にーこれらの神の象徴を持っているものが何かあるだろうか。太陽、月、星、動物、鳥、魚、鉱物、金属、機械、それに人間ーこれらすべての中で神の象徴を持つ機能がひとつでもあるだろうか。勿論ないのは当然である。なぜならば、宇宙の中にあるすべてのものは創造され、支配せられ、規定せられ、他のものに依存しており、不滅なものはなく、自由勝手な行動ができず、自ら推進できないからである。ーほんのかすかに動く時でも厳格な法則に支配せられ、その法則から外れることはできない。この無力な状態は、それらが神を疑うことができないことを証明する。それらは神のような顕われはない。神性を持たないばかりかを神と同列に論じることは真理を冒瀆するものである。これが「ラー・イラーハ　Lailah」の意味すなわち、神はいないーいかなる人間も物体も礼拝し服従するに値する神性と権威を持たないーという意味である。

しかしこれで問題が終わったのではない。神性は宇宙のいかなる物質的また人間的要素の中にも存在せず、それらは神性のかけらさえ持っていないということを我々は理解したのであるが、このことはとりもなお

さず人間のふし穴だらけの眼が宇宙の中に見るあらゆるもののはるか上に「至高の御方（存在）」が在ることを教えてくれる。その存在は神の本性を持ち、あらゆる現象の背後に働く「意志」であり、この壮大な宇宙の創造者であり、すばらしい法則の管理者であり、厳粛な調和の支配者であり、あらゆる行為の執行者であられる。その存在こそ、宇宙の主、現世と来世の主アッラーである。そしてアッラーは唯一無二の神である。これが「イッラッラー」（アッラーの外に‥‥）の意味である。

このことを知り信じることが、他の何事よりも重要であり、これを知るように努めるほど、これがあらゆる知識の出発点であるという確信をますます深めることであろう。物理学、化学、天文学、地質学、生物学、動物学、経済学、政治学、社会学、人文科学など、科学のいろいろな研究分野において問題を深く研究すればするほど、あらゆる学問と研究の分野において、「ラー・イラーハ・イッラッラー」の真理がますます明らかになってくることがわかるであろう。研究と調査の窓を開き、真理の光で真の知識にいたる道を照らすのは、この「ラー・イラーハ・イッラッラー」である。もしこの真理を拒否したり無視するならば、いたるところで幻滅に会うであろう。なぜならばこの根本的な真理を否定することは、宇宙にあるありとあらゆるものからその真の意義を奪うことに他ならないからである。そうなれば、宇宙は無意味なものとなり、進歩への展望は翳み、混乱を招くのみであろう。

B．タウヒードが人間生活に及ぼす影響

さて、「ラー・イラーハ・イッラッラー（アッラーの他に神はなし）」を信じることが人間生活にいかなる影響をもたらすかを調べ、どうしてそれを信じる人は終局においても現世においても必ず人生の成功者となり、信じない人は人生の失敗者となるのか見ることにしよう。

イ）このカリマを信じる人は決して狭隘な萎縮した見識に陥る心配はない。天と地の創造者、過去と現世と未来の主、全宇宙の支配者であられる神を信じる。この信仰を持っているから、世界の何物をも自分に無縁なものとは思わない。宇宙のありとあらゆるものを、自分が属する同じ主なる神に属していると考える。自分勝手な考え方と行動に固執しない。同情、愛情、奉仕はある特定な範囲や集団に限られていない。その視野は大きく、知的限界は広く、その見識は、神の王国のように、自由闊達で果てしない。無神論者や多神教徒や、人間のように限られた不完全な力を持つと想像されている神を信じる者などは、このような広い見識、寛大な精神を持つことができないであろう。

ロ）この信心は人間に最高の自尊心と自重心を植えつける。信じる人は、アッラーのみがあらゆる力の所有者であり、アッラーの他に人間に恵みを与えたり、生命を奪ったり、いかなる権威や影響を与えたるものもありえないことを知っている。この確信によって、神の力を除いて、あらゆる力に対して、平然とし恐れないようになる。神の被造物に礼拝することはなく、神の他に誰にも助けを求めるようなことはしない。ほかの何ものにも畏服圧倒されることはない。このような毅然とした心構えと態度は唯一神以外のものへの信仰からは決して生まれない。なぜならば、他の存在を唯一神と一緒にする者や、唯一神を認めない者は、代りに他の被造物を崇拝しなければならず、それが自分に恵みまたは危害を与えるかもしれないと考え、それを恐れ、それらにあらゆる希望を託さねばならないからである。

ハ）自尊心とともに、この確信は人間に謙虚な慎み深い心を植え付ける。この確信は人間を素朴かつ率直にする。これを信じる人は決して横柄、高慢にはならない。自分が持っているすべてのものは唯一神から与えられ、唯一神は与えることができるとともにすべてのものを奪うこと

もできると知っているから、権力や富やその他の世俗的価値を騒々しく誇示することなどは、およそ愚にもつかぬことであると考える。これと反対に、信じない者はなにか世俗的に価値があるものを得ると、その得た価値あるものは自分自身の価値によるものだと錯覚し、高慢になりうぬぼれる。同様に、高慢と自惚れはシルク（唯一神の神性を他のものと混迷すること）の当然の結果であり、随伴物である。なぜならば、ムシュリクは神々と他の人々の間には存在しない特殊な関係を自分が神々と持っていると信じているからである。

ニ）この信心は人間を高潔にまた公明正大にする。信じる人は、魂の純潔と行動の正直さ以外に成功と救いに導く手段は他にないという確信を抱いている。唯一神を一何ものにもまして必要とされ、何ものとも縁がなく、絶対的に正しく、神性の力に何ものも影響を及ぼしたり、口をはさむことができない唯一神を心から信仰している。この信心は、正しく生き、正しく行動しなければ、成功することはできないという意識を与える。またいかなる影響力も秘密活動も破壊から救うことはできないという意識も与える。これに反して、カーフィルやムシュリクは常に虚偽の希望を持って生きている。彼らのある者は神の子が彼らの罪を償ったと信じている。ある者は自分達が神に愛される者であるから、罰せられないだろうと考えている。ある者は彼らの聖人が信仰については神にうまく取り成してくれるだろうと信じている。ある者は神々に捧げ物をし、そのような神々を買収すれば、あらゆる不面目なことや不道徳なことをしてもよいという免許状を神々から貰うことができ、好き勝手に振舞ってもよいと信じている。このような誤った確信は人々を常に罪と悪行の罠に陥れ、自分達の神々にすがっているうちに、魂の純化を怠り、純潔で善良な生き方をしなくなるのである。無神論者はどうかというと、自分達を支配する力を持つ唯一神

が存在するとは信じない。それゆえ彼は、この世でどんなことをしようが全く自由であると考える。自分達の想像が神となり、また欲望と願望の奴隷になって生きる。

ホ)信じる人はどのようなみじめな環境に置かれても、失望落胆しない。地上と天上のすべての宝の持ち主であり給い、限りなき慈悲と恵みを与え給う、はかりしれない力を持ち給う唯一神を固く信じる。この信仰が心の確かな支えとなり、心は幸福に溢れ希望に胸をふくらませる。この世において四方八方から反撃に会い、この世の何ものも自分の目的に役立たず、あらゆる手段が次から次と見放すかもしれない。しかし唯一神への信頼と帰依は決して心から去らないで、その力に頼って雄雄しく闘いを続ける。このような強い確信は唯一神への信仰からだけ生まれ、それ以外の信仰からは決して生まれない。ムシュリクやカーフィルや無神論者は狭少な心しか持たない。彼らは限られた力にしか頼らないので、困難な事態に陥ると、絶望感におそわれ、自殺することも少なくない。

へ) この信心は人間に強い決意と辛抱強い忍耐を植え付ける。唯一神の喜びを得るために、全力をつくして唯一神の命令を実践しようと決意する時は自分が宇宙の主の援助と支持を受けているのだという確信を持っている。これが山のように不動な強い人間にならせ、いかなる困難、障害、敵意を持った反対にあっても遅疑、逡巡することなくその決意は不変である。ムシュリクやカーフィルや無神論者はこのようなわけにはいかない。

ト) この信心の表明は人間に勇気を鼓舞する。人間を臆病にさせるものが 2 つある。第一は、死を恐れ、安全を願うことである。第二は、神のほかに生命を奪うことができる何者かが存在し、人間はなにか工夫工作すれば、死を避けることができると考えていることである。「ラ

ー・イラーハ・イッラッラー（アッラーの外に神なし)」の信心は、これら 2 つの考えを心の中から追放する。これを信じる人は、自分の生命、財産、その他一切のものが本当に唯一神に属するものであることを知り、自分のすべてを唯一神の嘉みし給うところに喜んで献ずるから、この第一の考えは心から消え失せる。いかなる武器、いかなる人間や動物も自分の生命を奪う力を持たず唯一神のみがその力を持ち給うことを知っているから、彼は第二の考えも追い払う。現世で寿命の尽きる時は生物に定まっている。この世のあらゆる力を結集しても、その定まった時が来る前に何人の生命も無くなることはない。唯一神を信じる人の他に勇気がある人がいないのはこの理由のためである。何ものも彼を恐れさすことはできない。苦難の峠、反対の嵐、最強の軍隊さえ、彼を威服させることはできない。唯一神のために出陣する時は何十倍もの強い力さえ畏れない。それにひきかえ、ムシュリクやカーフィルや無神論者は、これほど偉大な決意と威力を持つことができるだろうか。彼らは生命をこの世で最も愛すべきものと考え、死は敵によってもたらされるもの、敵から逃れれば死を免れることができると信じている。

チ)「ラー・イラーハ・イッラッラー（アッラーの外に神はなし)」の信心は平和と満足の態度を生み出し、嫉妬や羨望や貪欲にかられて動揺する心を追い払い、成功を得るために卑怯で不正な手段を取ろうとする考えを寄せ付けない。これを信じる人は富が唯一神の御手にあり、唯一神はそれを御心のままに施し給うこと、名誉や権力や名声や権威のすべては唯一神の御意志に従い、唯一神が御心のままに与え給うこと、そして人間の義務はただ正しく努力し奮闘することであると知っている。成功や失敗は唯一神の慈悲いかんであり、もし唯一神が与えようと思召しになれば、唯一神がそうなされ給うことをこの世のいか

なる力も妨げることはできないし、唯一神が与えようと思召しにならなければ、それを得ることができないことを知っている。これに反して、ムシュリクやカーフィルや無神論者は、成功と失敗は自分達の努力の結果であり、また世俗的権力の援助と反対次第で決まると考えている。そのため、彼らは常に貪欲と羨望の奴隷となる。なぜならば、成果を得るためには買収、媚び、陰謀、その他あらゆる卑怯で不正な手段に訴えることも辞さない。他人の成功への嫉妬と羨望は心を蝕み、成功したライバルを没落させるためにあらゆることを試み、最悪の手段にすら訴えかねない。

リ）「ラー・イラーハ・イッラッラー（アッラーの外に神はなし）」の最も重要な効果は、人間を唯一神の法に従わせ遵守させることである。それを信じる人は、唯一神は隠れていることも顕われていることもすべて知り給い、頸動脈よりも自分に近いということを確信している。もし深夜に誰も見ていない所で罪を犯しても、唯一神はそれを知り給う。唯一神は良いものであれ悪いものであれ我々の考えや意図も知り給う。我々は人から隠すことができるが、しかし唯一神からは何事も隠すことはできない。我々は人を避けることができるが、しかし唯一神の統御力から逃れることはできない。この点を人間は固く信ずれば信じるほど、人間は唯一神の命令にますます従順になるであろう。信仰のある人間は唯一神の禁じ給うたことを避け、真暗闇に一人でいる時さえも、唯一神の命令を実行する。なぜならば唯一神の監視役が決して一人にしておかないということを知っているし、絶対に回避することができない唯一神の審判を恐れるからである。ムスリムであるべき最初の重要な条件は「ラー・イラーハ・イッラッラー」（アッラーの外に神はなし）を信じることだというのは以上の理由からである。「ムスリム」はすでに御承知のように、「唯一神に従順なる人」とい

う意味であるが、アッラーの外に礼拝するに値するものなしということを明らかに信じなければ唯一神に従うことはできない。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えの中で、唯一神を信じることは最も重要である。それがイスラームの根源であり、イスラームの源泉である。イスラームのあらゆる信仰、命令、規範はこの原理に強く基づいている。あらゆるものはこの源泉から力を得る。それをなくしてはイスラームにはなにも残らない。

2. 唯一神の天使達を信じること

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は唯一神の天使達を信じるように教えた。このことはイスラームの第二の信仰箇条であり、タウヒードの概念を考えられるあらゆる穢れから免れさせ、それを純粋に、簡潔に保ち、考えられるあらゆるシルク（多神教）の影響の危険をなくさせるために、非常に大切である。

多神教論者は二種類の被造物を神になぞらえてきた。

イ）有形の存在を持ち、人間の目に見えるもの。例えば、太陽、月、星、火、水、動物、偉大な人物など。

ロ）有形の存在を持たず、人間の目に見えないもの－宇宙の働きに従事していると信じられているもの。不可知な存在。例えば、火を司る神、光を司る神、雨をもたらす神など。

（イ）で主張されている神々は形のある存在で、人間の目の前にある。それらの神々が虚偽であることは、カリマーラー・イラーハ・イッラッラー（アッラーの外に神はなし）－により完全に暴露された。

（ロ）の類は非物質的であり、人間の眼から隠され、神秘的である。多神教論者はそれらを信仰する傾向が多分にある。彼らは、それらは神性を持つ、すなわち神々および神々の子と考えている。彼らはその像を作り、それらに捧げものをする。神の唯一性の信仰を純化させるため、またその信仰を（ロ）の目に見えない被造物との混同から明らかにするために、この信仰箇条が説かれてきたのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれらの感知できない、人々が神性を持つもの（あるいは神々または神々の子）と信じている霊的存在は、実は唯一神の天使達であると我々は考えている。それらは唯一神の神性とは関係がない。

天使達は唯一神の命令の下にあり、唯一神の命令に絶対に背くことができないほど、唯一神に従順している。唯一神は天使達を神の国を支配するために送られ、天使達は唯一神の命令を正確に忠実に実行する。天使達は自分達で何かをする機能を持たない。彼らは自ら考えた計画を唯一神の御前に提出することはできない。彼らはいかなる人間のためにも、唯一神に取り成すことさえ許されない。天使達を礼拝し彼らの助けを求めることは人間にとって、恥ずべきことであり、卑しいことである。なぜならば、人間を創り給うた最初の日に、唯一神は天使達をアーダム（アダム）の前に平伏させ給い、アーダムに彼らよりも偉大な叡智を授け給うたし、また唯一神は彼らをとばして、アーダムに地上における唯一神の代理権を授け給うたからである（注）。それこそ、かつて人間の前に平伏したものの前に平伏し、それらの愛顧を求めるほど、人間にとって堕落はまたとあるだろうか。

＊注　クルアーン第２章３４節、第７章11節を参照。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は天使達に礼拝することと、彼らを神聖なる唯一神と混合することを禁じた。しかしそれと共に、彼らは唯一神の選ばれたる被造物であり、罪に陥ることなく、彼らの性質自体が

唯一神に背くことができないものであり、常に唯一神の命令を実行することに専心しているとムハンマド(彼の上に平安あれ)は教えた。更に、唯一神の天使達は四方八方から人間を包囲し、付き添って、常に人間と一緒にいると彼は教えた。天使達は、良いことであれ悪いことであれ、人の行動をすべて注目し、観察している。彼らはすべての人間の生涯の完全なる記録をつける。死んでから、あなたがたが唯一神の御前に連れて行かれた時、彼らはあなたがたの地上における一生の完全な記録を提出するであろう。あなたがたはその記録の中に、どんなに取るにたらならことだろうが、ひとつも洩れなくあらゆることが正しく記録されているのを見るであろう。天使達の本質的な性格は我々には知らされていないが、彼らの価値と本性は若干知らされており、人間は彼らの存在を信じるように求められている。我々はアッラーによって知らされていること以外、彼らの性格、属性、本質を知る方法を持たない。それゆえ、勝手にある形や性格を彼らのすべてに与え、彼らを本当は知らないくせに、天使はかくかくしかじかのものであると言うことは全く愚劣である。天使達の存在を否定することはクフルである。なぜならば、我々はその否定の理由を持たないし、我々が天使達を否定するならば、ムハンマド(彼の上に平安あれ)が偽っているというのに等しくなるからである。我々は、唯一神の真の御使いが教えているというだけで、天使達の存在を信じるのである。

3. 聖典を信じること

ムハンマド(彼の上に平安あれ)が我々に信じるように命じた第三番目の信仰箇条は、聖典(神の書)ー代々の預言者を通じて人類に下し給うた諸啓典をーを信じることである。

唯一神はムハンマド（彼の上に平安あれ）より以前の預言者達に神の書（啓典）を下し給うたが、この啓典は、唯一神がムハンマド（彼の上に平安あれ）にクルアーンを下し給うたのと同じ方法で下ったのである。我々はこの啓典のいくつかの名前は知っている－イブラーヒーム（アブラハム）の書、ムーサー（モーゼ）のタウラート（律法）、ダーウード（ダビデ）のザブール（詩篇）、イーサー（イエス）のインジール（福音書）など。そして我々は過去において唯一神から贈られてきたあらゆる啓典は真実であることを暗黙のうちに信じている。

啓典として伝えられている諸書のうちで「イブラーヒームの書」は散逸し現存する世界の文学遺産の中に形を留めていない。「ザブール（詩編）」「タウラート（律法）」「インジール（福音書）」はユダヤ教徒やキリスト教徒と共存しているが、クルアーンは人々がそれらの諸啓典を勝手に作り変え、唯一神の言葉が人間の作った言葉と混合されていると教えている。この啓典の改ざんと改作の仕事があまりに大きく、あまりに明白であるから、ユダヤ教徒やキリスト教徒自身ですら「自分達は啓典の『原理』を持たない。自分たちの持っているのは、何世紀にもわたり多くの変更が加えられ、また今だにつけ加えられている啓典の翻訳書にすぎない。」ということを認めている。それらの諸書を研究すると、明らかに唯一神から下される筈のない多くの章句と記述を見出す。唯一神の言葉と人間の言葉は、これらの諸書の中では、混合し、どの部分が唯一神によって啓示され給うた部分で、どの部分が人間によって加筆された部分か識別することができないのである。クルアーンの以前に、唯一神が預言者達を通じて幾多の啓典を示し給いそれらの啓典はすべて唯一神－クルアーンを下し給うた神と同じ神から啓示されたのであり、しかも「神の書」としてのクルアーンの啓示は目新しく変わった出来事ではなく、人々がとっくの昔に忘却してしまった唯一神の教えを確認し、

繰り返し唱え、完成することに過ぎないという意味でクルアーン以前に啓示された諸書を信じるように命ぜられているのである。

クルアーンは唯一神によって啓示された最後の啓典であって、クルアーンとそれ以前の啓典の間には非常な相違がある。その相違点を要約して言えば次の如くである。

イ）以前の啓典の大部分はその原典を全く失い、その翻訳のみが今日、存在している。これに対して、クルアーンは預言者に啓示された一字一句そのままの姿で現存している。ひとつの言葉も変わっていない。クルアーンは原典のまま生きており、唯一神の言葉は永遠に保存されているのである。

ロ）以前の啓典においては人間が唯一神の言葉と人間の言葉を混合したが、クルアーンにおいては、わずかの変化も加筆もされていない。この事実はイスラームに反対する者にさえ認められている。

ハ）さまざまな民族の間で啓典とされている「神聖なる書」のどのひとつについても、精密な歴史的証明に基づいて、その書がほんとうに啓示された預言者のものであると言うことはできない。それらの諸書のあるものに関しては、どの時代に、どの預言者に啓示されたかということさえ分かっていないものがある。しかしクルアーンに関しては、それがムハンマド（彼の上に平安あれ）に啓示された証拠が非常に数多く、しかも納得せざるを得ないほど強い確信を与えるような証拠であるため、イスラームを攻撃する論者さえもクルアーンを疑うことはできない。この点に関する証拠は多くの文句や教えが、いつどこで啓示されたかはっきり知ることができるほどに豊富かつ詳細である。

ニ）以前の啓典は、ずっと昔に既に死語となった言葉で啓示されたものが多い。現代では、どこの民も集団もその言葉を話さず、それを理解することができると主張する人は極めて稀にしかいない。そのため、

たとえそれらの啓典が混ぜ物の入らない原典の形で今日存在していても、その教えを正しく理解し解釈し、要求される形でその教えを実行に移すことは、現代では事実上不可能である。これに対して、クルアーンの言葉は現在生きている言葉である。無数の人がそれを話し、書き、その言葉を知り理解できる人はさらに膨大な数となる。その言葉は世界のあらゆる大学で教えられ学ばれている。あらゆる人がそれを学ぶことができ、またそれを学ぶ時間がない人は、その言葉を知り、クルアーンの意味を説明してくれる人々を至る所に見出すことができる。

ホ）世界のさまざまな民族の間に存在する聖典はいずれも、ある特定の民族に対じて呼びかけてきた。いずれの聖典も、特定の歴史の時代にのみ意義があり、その時代の要求だけを満たしたように思える教義を含んでいる。それらは今日では必要もないし、また円滑適切に実行に移すこともできない。またこれらの諸書はある一定の民族だけに特に意味があるものであって、そのどれひとつとして全世界に対して通用するものはない。その上それらの諸書は、それが下された民族でさえも、永遠に従うことができないようなものもある。それらはある一定の時代にのみ効果を発揮するだけである。これに反して、クルアーンは全人類に対して呼びかけられている。クルアーンの中である特定の民族にだけ呼びかけられていると思われる教えはひとつもない。クルアーンの中のあらゆる法と教えはあらゆるところ、あらゆる時代に、全く同じように適合する性格のものである。この事実は、クルアーンが全世界に呼びかけられたものであり、終末の日までの人間生活の規範であることを証明している。

へ）以前の啓典も善と徳を包含し、道徳と真理の原理を教え、唯一神の嘉みし給うところにかなった生き方を示していたが、それらのうちで、

善き人間生活に必要なあらゆることを一過剰も、不足もなく一包含するほど総括的なものはひとつもなかった。それらのうちであるものはひとつの面で勝れていたが、他の面では他のものがより勝れていた。以前の啓典の中の善なるものをすべて包摂し、アッラーの道を完成し、アッラーの道をあますところなく示し、この世の人間に必要なあらゆることを総括した人生の規範を提示しているのはクルアーンであり、クルアーンの他にない。

ト）人間の勝手な手入れと書き換えの為に真理に反し、理性に背き、正義に絶対に合わないような多くの事柄がこれらの諸書の中に差し入れられた。その中には残酷で、不正で、人間の信仰と行動を不純にさせるものもある。さらには、不幸にも、猥らで、下品で、不道徳なものさえも付け加えられている。クルアーンはこれら一切の愚劣なことを超越している。クルアーンは理性に反するもの、誤りと認められるものは一切含んでいない。その教えに不正なものはひとつもない。その中には疑惑を起こさせるようなところはひとつもない。淫猥と不道徳の跡はその中には決して見出すことはできない。始終一貫この「万人の書」は叡知と真理に満ちている。クルアーンは人間の文明の為に最善の哲学と最高の規範を持っている。クルアーンは正しい道を指示し、成功と救済に人間を導く。全世界の人々がクルアーンを信じ、クルアーン以外の諸書を放棄し、クルアーンのみに従うのは、以上のようなクルアーンの特徴のためである。なぜならば、クルアーンは唯一神の嘉みし給うことに一致した生き方に不可欠なことを全て含み、それ以外に他の啓典を必要とすることは絶対にないからである。

クルアーンとその他の啓典の相違を研究すると、クルアーンを信仰するのと以前の啓典を信仰するのとは性質が同一ではないことが容易に

理解できる。以前の啓典への信仰は、それらの諸書が全て唯一神から下されたものであり、真理であり、クルアーンが下されたのと同じ目的を成就する為に下されたものである、ということの確認に制限すべきである。これに対してクルアーンの信仰は、純粋かつ絶対的に神御自身の御言葉であり、それは完全に真理であり、そのあらゆる言葉が保存されており、その中で述べられているあらゆることが正しく、そのあらゆる法を実行することが人間の責任をもってなすべき義務である。そしてそれに反逆するものは全て拒絶されなければならない。

4. 唯一神の預言者を信じること

前章では、唯一神の御使い達があらゆる民族の間に生まれ、彼らは全て本来、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が唱えたあの宗教ーイスラームーと全く同じ教えをもたらしたことを論じた。この点に関しては、唯一神のあらゆる御使い達は同じカテゴリーに属し、お互いに立場を同じくする。もし御使い達の中の一人に背くならば、全てに背くことになる。もし御使い達の一人を認め信じるならば、先駆的に全てを認めなければならない。十人の人間がひとつの同じ陳述をしたと仮定しよう。もしあなたがた十人の中一人を正しいと認めるならば、あなたがたは残りの九人をも正しいと認めたことになる。なぜならば彼らの一人を信じないならば、暗に彼ら全てを信じていないからである。イスラームにおいて、唯一神のあらゆる預言者達を絶対的に信じる必要があるのはこの理由のためである。預言者達の中で誰か一人を信じない者があるとすれば、たとえ他のあらゆる預言者を信仰していても、彼はカーフィルである。

様々な時代の様々な民族に出現した預言者達の総数は、伝説的に 12

万 4 千人と言われている。地球に人類が住むようになって以来、いかに多くの民族と民が地上に生まれ消えていったかを考えるならば、この預言者の数が決して多いとは思えないであろう。我々はクルアーンに述べられている預言者達を積極的に信じなければいけない。その他の預言者達については、我々は人類を導くために唯一神から遣わされたあらゆる預言者達は真実であると信じるように教えられている。我々はインド、中国、ペルシャ、エジプト、アフリカ、ヨーロッパ、その他世界のあらゆる国々に出現したあらゆる預言者達を信じる。しかしある人間に関しては、正確に知らされていないから、彼が本当に預言者であったかどうか明確に言えない立場にある。また我々には他の宗教の聖人に反するようなことを言うことは許されない。これらの聖人の中で何人かは唯一神の預言者であったかも知れないが、ちょうどムーサー（モーゼ）とイーサー（イエス）（2 人の上に平安あれ）の後継者達がその宗教を作り変えたように、彼らの後継者達が彼らの寂滅後に、その教えを作り変えたことはよくあり得ることである。それゆえ、我々がその聖人達のことを語る場合はいつでも、その宗教と教義と儀式についてであり、この宗教の創始者について語ることは、預言者に対して不敬の罪を犯すといけないから、それを避ける。

唯一神の預言者であるという事実と“イスラーム”という同一の正しい道を教えるために唯一神から遣わされたという事実に関しては、ムハンマド（彼の上に平安あれ）と他の預言者達（神の恵みが彼らすべてにありますように）の間に相違はない。我々は彼らをすべて同じように信じることを命ぜられているのである。しかしこの点に関して彼らが平等であるにもかかわらず、彼らの間には次のような 3 つの区別があるのである。

イ）過去の預言者達はある特定の時代に、特定の民族のために出現した

が、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は未来永遠にわたって全世界のために遣わされたのである。

＊注　この点では第３章に詳しく述べた。

ロ）預言者達の教えの真の意味はこの世から失われたか、残存していても純粋な形ではなく、多くの虚偽と誤解の記述が混ざって発見されるからである。このため、その教えに従おうとしても、従うことができないのである。これに反して、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教え、彼の説話、彼の生活方法、彼の道徳と習慣と美徳－要するに、彼の生涯と業跡のあらゆる詳細な記録－は保存されている。それゆえ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はあらゆる預言者の中で、生きた人格を持ち、その歩まれた跡を正しく自信をもって従うことができる唯一の預言者である。

ハ）過去の預言者達から伝えられた導きは完全かつ総括的ではなかった。あらゆる預言は次の後継者が受け継いだが、後継者は先人の教えと指示に変更を加え、このようにして改変と発展が続けられた。これが、初期の預言者達が説いた純粋の教えがある一定の時が経過した後、忘却された理由である。遂に最も完全な導きの規範がムハンマド（彼の上に平安あれ）を通じて人類に告げられ、以前の規範はすべて自動的に廃棄された。なぜならば、完璧なる規範が出現したのに、不完全な規範に従うことは無益で愚かだからである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）に従う人は全ての預言者達に従う。なぜならば、彼らの教えの中で、善であり終末まで有効なものはすべて彼の教えの中に具現されているからである。それゆえ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えに従うことを拒否し、他の預言者に従うことを選ぶ者は、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えの中に具現され、初期の預言者達の啓典に存在せず、最後の預言者を通じてのみ啓示された膨大な有益で

貴重な教えと導きを失うことになるだけである。

これがムハンマド（彼の上に平安あれ）を信仰し、彼のみに従うことがあらゆる人間の義務である理由である。真のムスリム（唯一神の遣わした預言者の生き方に従う人間）になるために、ムハンマド（彼の上に平安あれ）を完全に信じ、以下の事柄を確信することが必要である。

A. ムハンマド（彼の上に平安あれ）は唯一神の真の預言者である。

B. ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えは絶対的に完全で、少しも欠点や虚偽がない。

C. ムハンマド（彼の上に平安あれ）は最後の預言者である。彼の後には、最後の審判の日までいかなる民族の間にも決して預言者は現われないし、また預言者に類する人間が将来現われないと信じることがムスリムにとって絶対必要なことである。そして、もし彼が最後の預言者であることを否定する者がいるならば、その人はカーフィルである。

5. 死後の世界を信じること

イスラームの第５番目の信仰箇条は死後の世界を信じることである。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、死後の復活と最後の審判の日を信じるように指示している。この信仰の根本的な要因は、彼が教えるところによれば、次の如くである。

イ）この世の寿命とこの世に現存する一切のものの生命が、定められた日に終焉するということ。この時には地上のありとあらゆるものが絶滅し地上の生物界は終焉となる。その日が、キヤーマすなわち「最後の日」と呼ばれる。

ロ）この世の始まりから最後の日までに、この世に生を受けたあらゆる人間がその時に生命を復活し、至高者アッラーの前で最後の日の審判の座に立たされる。これがハシュル、すなわち、「復活」である。

ハ）あらゆる男女の全記録ー彼らの生前のすべての善行と罪業との完全な記録ーが最後の審判のために唯一神の御前に出される。

ニ）唯一神はあらゆる人間の報いを最終的に決められる。

唯一神は各人の善悪を清算され、善行に対しては善き報奨を、悪事非行に対しては罰を下し給う。唯一神の償罰には微塵の狂いもない。この審判に合格する者には永遠の楽園の門が開かれ、その悪行の為有罪を宣告された者は地獄ー火と苦しみの場ーへ送られる。以上が死後の世界に関する基本的な確信である。

A．この確信の重要性

死後の世界における生命の存在については今までの預言者達によっても常に説かれて来ている。どの預言者もその信者達に向かってこれを信じるように説いた。

最後の預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）もその例外ではなかった。これを信じることはイスラーム信者の基本的条件である。総ての預言者は「これに疑問を抱くものはカーフィルである」と宣言している。事実死後の生命を否定することは信仰の他の要素を無意味にし、善の成果を破壊し、人を無知と不信の淵へ追いやる。

少し考えればこの点はすぐ明白となる。日常生活において他人から何かやって欲しいと頼まれた時はそれをやる利益と、それをやらない不利益とをすぐ考えてみるだろう。これは極めて自然の事で、誰でも無駄な行為は本能的にやりたがらない。だれも無益で効果のない仕事に時間と

精力を費やそうとはしない。同様に無害なものに気を配る努力も不要である。概して利用しようとする決心が強ければ強いほど、それに対する関心は深まるし、効果が疑わしければ尻込みせざるを得ない。子供がなぜ火の中へ手を入れるか、それは火が危険であることを知らないからである。子供がなぜ勉強したがらないのか、それは勉強が安易なものでない他に、教育の重要性と効果を十分に把握せず、また先輩の云うことを信用しないからである。さてここで「最後の審判」を信じない人について考えてみよう。その人は唯一神そのものや唯一神の啓典による死後の世界についても信じないのか。彼にとっては唯一神への服従は何の利益もなく、唯一神への反逆も何ら損失がない。それゆえに彼は唯一神、その預言者、聖典の禁止事項を注意深く守ろうとすることができないのか。世俗的な快楽の追究にのみ汲々とせず、人生の試練や犠牲に耐え定められた道を力強く行き抜こうとする発想がないのだろうか。もし人が唯一神の法に従わないで自己の好き嫌いだけで生きようとするならば、一体彼は唯一神についてどのような考え方を持っているのか。

しかし少し掘り下げて冷静に考察すれば「死後の生命の存在を信じることは現世における最大の決定的要素である」との結論に到達するはずである。それを信じるか信じないかでその人の生き方が決定づけられる。

この世の成功と失敗だけを目的に物事を考える人は、その生涯に起こる利害のみに関心がある。現実的な利益を得る望みがない限り、決して善行をしようとせず、またいかなる不正不義でも自分の利益が侵害されない限りこれを避けたり拒んだりすることもしない。これに反し来世を信じ自分の行為の結末に確信をもつ者はすべて、この世の得失は一時的かつ暫定的なもので永遠の天国へ持ち運べるものではないことを知っている。物事を幅広い視野で眺め、利害に対して目先に捕らわれない。それが世俗的収益の点よりすればいかに有益であろうとも、また現実の

利害関係よりすればいかに不利であろうとも、必ず善を行ない、悪を避ける。たとえそれがいかに魅力的であろうとも、物事を長い目（現来世を通じて）で判断し、決して自分の気まぐれや好き嫌いで決めない。このように両者の間には信仰、行動、生活の上に根本的な開きがある。現世に縛られる人間にとって、善行とははかないこの世の金銭、財宝、社会的貴賤または他の同様のもの、たとえば地位、権力、名声および世俗的幸福と言う形で得られる範囲内の恩恵に限られたものである。個人の願望の充足、富の増大が生涯の幸せとなる。そのためには残酷で不正な手段も敢えて辞さない。同様に悪事に関する考え方も、この世において自分の利益を損なうもの、たとえば生命財産の喪失、病気、名声の失墜またはその他の不愉快な結果をもたらすものを指す事になる。

これに反し、信仰者の善悪についての考え方は全く異なる。彼らにとって唯一神を喜ばすものはすべて善であり、唯一神の怒りを買うものは総て悪である。たとえこの世で何の利益も与えずまた危害を伴なったり、所有物を失う結果になってもやはり善事は善事であると考える。唯一神が必ず善事に対して現世あるいは来世において報奨を用意されることを信じ、そしてそれが真の目的達成だと確信する。従って、この世の物質的な収益のために悪事に荷担することは決してない。たとえ短いこの世で罰を免れても唯一神の法廷において結局失敗者となることを知っているからである。道徳の相関関係を認めず、唯一神の啓示による絶対的規準を厳守し、現世の利害損失は後回しにする。

このように死後の生命を信じる者と否定する者は異なった人生を歩む。最後の審判を信じない者にはイスラーム的な人生を送ることは絶対的に不可能である。例えばイスラームでは「貧者にザカート（嘉捨）を施せ」というが、これに対して彼らは「いや、嘉捨をすれば自分の富が減る。逆に金利が欲しいくらいだ」と答える。金儲けにかけては情け容

赦なく、借り手が貧乏で飢えていても元利の回収に躊躇しない。イスラームは「常に真実を語れ。たとえ虚言によって得をし、真実を語って損するようなことがあっても真実を語れ。」と教える。しかしこの人の答えは「今すぐ何の役にも立たぬ真実などどうしようもない。まして損失を受けるなど真っ平、リスクも悪評も受けずに利益を得られる場合、なぜ嘘をつくのがよくないのか」と反撃する。仮に人気のない場所で貴重品を見つけた場合、イスラームは「それはあなたの財産ではないから手をつけてはならぬ」といい、その人は「ここには警察へ報告する人も、法廷で私の反対に立つ証人も、公衆に告げ口をする人も誰一人いないのに、なぜこの価値あるものを私が利用して悪いのか」と答える。ある人はこの男に密かに何かを預託しその後死亡したとする。イスラームは「託せられた財産について公正であれ。それは預託者の遺族に返してやりなさい」と教えるが、彼は反問して「私が彼の財産を預かっている何の証拠もないし、彼の遺族達は何も知らされていない。私が困ることもないし、法に問われる心配もない。また名を傷つけることもなくこれを自分のものとすることができるのになぜそうしてはいけないのか」

要するに人生の行動のひとつひとつにおいてイスラームはある特定の方向と態度とあり方を要請する。しかし不信者はまったく逆のコースを採ることが多い。イスラームは判断の標準を永遠の目標に定める。一方来世を信じない人は、常に刹那的な欲望に基づく個人的願望で行動する。ここに大きな開きがある。ここで「最後の審判を信じない者はムスリムたり得ない」ことの意味が明らかになったことと思う。イスラームの信者となるのは偉大なことである。信仰なくして真の善者にはなり得ない。その善行に確固たる根拠がないからである。最後の審判の否定は人間を最低の動物の地位に貶めることになる。

B．死後の生命

ここでは、信仰の構成要素が理論的に理解されるよう考慮してみた。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）が死後の生命に関して我々に語られた所は明らかに理由が存在する。その日についての信念は唯一神の使者を固く信頼することにかかっているが、一方で理論的に考察すればこの信念を再確認するのみならず、この面でムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えは死後の生命に関する他の人の見解よりも妥当かつ理解され易いものであった。死後の生命については、この世において次の解釈が行われている。

イ）ある一部の人々は言う。「人の死後は何も残されない。従ってこの人生の終焉はすべての終わりで他の生命なぞあり得ない」彼らは、死後の世界なぞ存在の可能性がないしそんな信念は非科学的であると言う。これはいわゆる無神論者の見解である。彼らは自分達の考え方は科学的であり、近代西欧文化に立脚することを主張する。

ロ）他の一派の人々は自己の行為の結果によってこの世へ何回も復活して来るという考え方を持つ。もし人が良くない生涯を過ごした後の生まれ変わりは動物の形、たとえば犬や猫、あるいは植物やある種の下等人間となり、人の一生が善だった時は高位の人間に再生してくる。この見解は東洋の宗教の中に見出される。

ハ）第三番目の見解は最後の審判（復活、唯一神の法廷への出廷、唯一神の賞罰）を信じる人々である。これはすべての預言者達の共通の信念であった。

さて以上の見解を検討して見ると、（イ）は科学の権威と支持にかけて死後の生命の存在を否定する。死人が死後生き返ったのを見た人は誰もいないし、復活の例は唯の一回もなかったと主張する。人は死んで土

と化す。それが人生の最後であり死後の生命など無いとする。しかしながらこれは本当に科学的な論法だろうか。この主張は正当な理論付けによるものだろうか。死者の復活を見たことが無いという理由で死後の生命を否定するのは明らかに論理の飛躍である。この場合「死後何が起きるのか我々には分からない」と述べるのが正しい態度であろう。彼らは知識の高さに誇りを持って「死後何事も起らない」と言い切るが、この場合科学は肯定も否定もし得ないはずである。彼らの主張は飛行機を見たことが無い者がその知識に基づいて飛行機は無いと断言しているようである。見たことが無いからそのものが無いとは言えない。これこそ正に幻影的で非科学的であり、ものの分かる人はこの説を重視できない。

次に（ロ）は言い換えれば、人間に生まれるのも動物になるのも前代における本人の行為の結果であるとする考え方であるが、では一体最初にどちらがあったのだろうか。人か動物か植物か、もし人間が動物より先に在ったというならその人の前身は動物だったがその善行によって人となったという理屈も通る。動物が先だといっても今の論の逆が通ずることになる。これは結局堂々巡りとなりこの信仰の主唱者は初めの型がいずれとも決定できない。ただ前代の行為の結果によって死後の生まれが定まるという見解であり、これは条理が立っていない。（ハ）の見解を要約すると、「この世はいつか最後の日が来る。唯一神は現在の宇宙を破壊し、絶滅し、新たに遥かに高級な宇宙を創られる」。この声明は否定の余地無く正しい。その真実性に疑いをかける者はいない。宇宙の姿を研究すればするほど現世の組織は永久不変のものではないことが判る。なぜならその中に動く全ての力は有限であり、いつの日か完全に停止する時が来る。太陽もいつかは冷却して運動のエネルギーを失い、星は互いに衝突し合って、やがて宇宙の組織が破壊される時が来ることを現代の科学者は認めている。現在の宇宙の構成要素について、進化論

に誤りがないとするならば、これが全ての場合に適用されないのだろうか。宇宙が全面的に非存在（消滅）の方向に向かっているというのに別の面においては、それが進化の過程をたどり更に一層進歩した理想的秩序が到来するであろうという主張には納得しかねる。この信念の第二の点は「人は再び生命を授けられる」である。これは不可能なのだろうか。もし不可能なら、今の人間にどのようにして生命が授けられたのだろうか。今の世に生を授け給うた神（創造主）が次の世ではそれが不可能であろうか。これは単に可能性の問題ではなく、後述の通り、必要性の問題である。

第三の点は「現世における人の行為は全て記録され、復活の日に提示される」については今日の科学によって証明され得る。例えば音は初めに空中に生ずる波状の運動体でやがて消滅すると考えられた。今はそれは周囲の物体に影響を残し、また再生し得ることが判った。蓄音機はこの原理の応用から発明された。人の運動（行為）の記録もその運動波と接触した全ての物の上に残されているはずである。そうであるならば、我々の行動の全てが完全に保存され再生され得るものであることは架空ではない。

第四の点の「復活の日、唯一神が審判の座に就かれ、人間の生前の善行悪行に対する賞罰を裁かれる」ことについて納得がいかないのだろうか。唯一神は公平に裁かれるというが、現実に善事をしてもこの世では全く報いられなかった人の例も我々は知っている。またさんざん悪業を重ねても何の咎めも受けなかった例も知っている。以上の例のみにあらず善行のゆえに眼前の不幸を招き、非業悪徳が却って満足と幸せをもたらした幾百千のケースを見ている。日常これを見るにつけ、この世の裁きはつくづく不完全なものと思う。そして正義に対する理性を強め、唯一神が真の正邪を両断し、公正な裁判が行われる日が来ることを希求し

て止まぬのである。現状の秩序は物質的法則の下に立っているため、悪事を行なう手段を持つ者は望む時にそれができる。その悪の結果が自分の上に全体的または部分的に跳ね返すかどうかはわからない。もし石油一缶とマッチ一箱あれば反対者の家へ火を放つことができる。そしてこの世の力が味方すれば、この行為の結果から逃れられる。その時はこの行為は結局何でもなかったのだろうか。ただ物理的な結果が現われて、道徳的結果が表面に出なかった。そしてこの道徳的結果がそのまま葬られてしまうのは当を得ているだろうか。もしそれが不当ならば問題はいつか、どこかへ姿をあらわすだろう。たぶん現世ではない。物質的現世においては行為の物質的結果のみが具現され、理性的道徳的結果は影をひそめる。この結果は、理性的道徳的法則が最高に活用され物質的法則が秩序の世界において初めて充分な効力を発揮するのである。先に述べた通りそれは宇宙の次期の進化の過程で来世に起きることであり、物質的法則よりむしろ道徳律に支配される点において進化すると言える。現世において全面的または部分的に残された人の行為の理性的結果はそこに姿を現わす。この試練の現世における行為に対して下された裁決の理性および道徳的価値によって人間の真の地位が決定付けられる。

この信念の最後の命題は天国と地獄の存在である。その存在は不可能だろうか。唯一神が太陽、月、星、地球を創られたのになぜ天国と地獄が創れないのか。唯一神が審判の法廷において最後の裁きを行ない、人の善悪を賞罰される際、善者に対する報償、栄誉、幸福を享受する場所すなわち天国と、罰を被った者達の刑に服するところすなわち地獄は当然必要となる。以上諸問題を詳細に検討すると、死後の生命を信じることは条理に沿った常識のある人ならば誰でも容認し得ることである。その上ムハンマド（彼の上に平安あれ）のような真の預言者がこれが事実であることを述べているし、知恵はそれを信じることの中にあり、反対

する中にはない。以上が信仰の 5 箇条でイスラームの柱となるものである。それの主旨はカリマ・タイイバと呼ばれる短い文章の中に含まれている。「ラー・イラーハ・イッラッラー」（アッラーの外に神はなし）を唱える時、誤った崇拝の対象を捨て、唯一神アッラーの被造者であることを真に自覚し、更に次の語を添える時ムスリムとして完全なものとなる。

「ムハンマドッラスールッラー」(ムハンマドはアッラーの使者である)。彼が預言者であることを受け容れた後は、唯一神の本性と属性を信じ、唯一神の天使達を信じ、唯一神の啓典を信じ、死後の生命を信じ、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の説かれた方法に則って唯一神に礼拝を捧げるよう真心を込めて従わなければならない。かくしてここに成功と唯一神の権威がある。

第５章　礼拝と崇拝行為

ここに預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が説いた５ヶ条の信仰の基礎を要約すると次のようになる。

イ）神の唯一性、絶対性を信じること。

ロ）唯一神の天使達を信じること。

ハ）唯一神の諸啓典を信じること。特にクルアーンは唯一神からの最後の啓典であること。

ニ）唯一神の諸預言者を信じること。特にムハンマド（彼の上に平安あれ）は唯一神の最後の使徒であること。

ホ）死後の生命（世界）があることを信じること。

以上のことを信じて疑わない者はイスラームの門に入り、ムスリム社会のメンバーとなる。しかし口頭の告白だけでは完全なムスリムとは言えない。ムハンマド（彼の上に平安あれ）を通じて下された唯一神の命令を立派に実行してこそ、初めて真のムスリムとなる。今や唯一絶対の神アッラーがあなたの神、創造者であり、あなたはその被造者である。唯一神はあなたの主であり、あなたは唯一神の下僕である。唯一神はあなたの支配者であり、あなたはその臣下である。唯一神があなたの主であり、支配者であると認めてからその命令を拒むことは自らの心の反逆者である。唯一神への忠誠のみならずクルアーンが唯一神の書なることを、あなたは認めた。すなわちクルアーンの内容はすべて唯一神から賜ったものであることを認める。そしてその中に書かれていることを学び、それを守ることが義務と同時に喜びとなる。あなたはムハンマド（彼の上に平安あれ）が唯一神の使徒であることを認められたのだから、彼が勧めることや禁じることのひとつひとつが唯一神の命令に基づくものであることに疑いを挟まない。そして使徒ムハンマド（彼の上に平安あ

れ）に対する従順もあなたの義務のひとつになる。すなわち告白に並行して実践が伴って一人前のムスリムと言える。そうでなければ不完全なムスリムである。

ここでムハンマド（彼の上に平安あれ）が全能者アッラーより授けられた行為の規定とはいかなるものか見てみよう。最初に挙げられることはイバーダート（アッラーを信じる者は誰でも守るべき基本的義務）である。

1. イバーダート（崇拝行為）の精神

イバーダートは元来アラビア語で、語源はアバダすなわち奴隷、下僕を意味し、そこから「従順」となる。唯一神はあなたの主であり、あなたは唯一神の下僕であるから主の思召に従順として汲々として仕えること、すなわちイバーダートである。この言葉のイスラーム的概念は非常に広い。卑猥、錯誤、悪意、罵詈雑言を口にせず、常に真実を話し、良いことのみ語り、唯一神の命ぜられたところのみを行なうことはイバーダートである。たとえ外見はいかに世俗的であっても、商売や取引において唯一神の法に従い、また両親、親族、朋友、その他接する一切の人々との応対に際してもこの心掛けを忘れないならば、あなたの行動はすべてイバーダートである。もし貧者や困窮者を助け、飢える人に食物を恵み、病める人や悩める人を慰めるなら、そしてそれが自分の利得のためでなく唯一神の喜びのためにのみ行われるのなら正にそれこそイバーダートである。自分の生活費および家族を養うために働く活動も誠実公正に唯一神の法則に従って行なう限り、イバーダートである。つまり人の活動、人生行動の全てがイバーダートであるとも言える。それが唯一神を畏敬し、唯一神の法に従い、唯一神を喜ばそうとの心掛けでな

されたものならば、人生の活動分野において常に唯一神を想い、善を行ない、悪を避けるならば、イスラームの義務を果たしていることになる。これがイバーダートの真の意味であって、要約すれば「唯一神を喜ばす日常行動を取ること」に他ならない。この目的の達成を容易にするために、形式的なイバーダートが実践訓練として定められている。この訓練を熱心に実践すればするほど、よりよい習慣が身につく。イバーダートはイスラームを構成する柱である。

2. サラート（礼拝）

礼拝はイスラームの義務の中で最も重要な第一義的なものである。礼拝とは何か。それはアッラーを賛美して捧げる、日常の定められた礼拝を言う。信仰を確実にするため毎日 5 回唯一神の前にその信念を反復して、それを新たに深める行為である。まず早朝日の出前に起きて身体を清め、その上で神に感謝の拝を捧げる。これが日の出の前に行われる礼拝である。礼拝の時の各種の姿勢は服従の精神を現わしたものであり、唯一神の御言葉を読誦し、唯一神への服従を再度確かめる。唯一神の導きを請い、その怒りを避け、選ばれた道を歩ませていただくことを祈る。唯一神の書クルアーンの章句を詠み、預言者の真実性を確証し、審判の日とその時に生涯の全記録を唯一神へ提示すべきことを想い起こして反省する。それから数時間後、正午過ぎに礼拝を捧げる。すべて礼拝の時が来れば、数分間の時間を割愛して、その時従事中の仕事や遊び事から離れ一切の雑念を払ってひたすら唯一神に祈る。この祈りにより人生におけるあなたの真の役割を反省し、魂の純化をはかる。礼拝の後は直ちに仕事に戻る。それから日が傾く頃に午後の礼拝を行ない、自分の信仰が誠実であるように気持ちを集中させて唯一神を再び想い起こす。次

は日没後の礼拝で、夜の闇がやって来ても信仰の義務を忘れないように、唯一神へのゆるぎない忠誠を誓う。その後、床に就く前に夜の礼拝を行なう。

このように、毎日の礼拝の回数と時刻は定められており、必ず定時、随所でこれを実行しなくてはならない。人は人生の目的と使命を世俗的な繁忙の迷路の中に見失ってはならないのである。

毎日の礼拝がどれほど信仰の基礎を強め、唯一神への忠誠、徳義の遵守を助け、勇気、誠実、希望、心の純潔、魂の浄化の培養に役立つものであるかは計り知れない。預言者の教えられた方法に従い、まずウドゥー（小浄）を済ませてから礼拝する。読誦も預言者の指示に従って行なう。なぜそうするか。それはムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者であることを信じるからである。なぜクルアーンの章句を畏れるのか。クルアーンは唯一神の書であり、故意にその教えから逸脱すれば罪である。礼拝は無言で唱える部分も多い。祈りの語句を飛ばしても誰もチェックできないが、誰も故意にそうしてはならない。唯一神は現われごとも秘めごとすべて知り給うからである。誰も見たり聞いたりしていない場所で礼拝するのは、唯一神が常に見守っておられるという確信に基づくものである。どうして重要な仕事や用事をさて置いて礼拝のためにモスクに駆けつけるのか。何故夜明け前から目覚め、あるいは暑い真昼にモスクに向かい、夕方の娯楽より礼拝に勤しむのか。それは信仰する者にとって、何はともあれ主に対する責任を果たそうとする義務感に他ならない。なぜ礼拝における過ちを気遣うのか。それは唯一神に対する畏れと審判の日にはそんな些細な事柄でさえ、良いことも悪いことも裁かれることを知っているからである。考えてみると、礼拝にまさる道徳と精神の訓練が他にあるだろうか。これこそムスリムの人格を完成する絶好の習練である。もし人が創造主に対する義務感を他のいかなる利益よ

り重要視し、礼拝を通じて常にそれを浄化するならば、その人の心と行ないに曇りがない。その人の信念によれば、礼拝を怠れば必ず唯一神の不興を被ることがわかっており、それこそ最も気に掛けて避けたいことである。信仰する者は全生涯を唯一神の法則に従って毎日 5 回の礼拝を続ける。人が生きるために毎日 3 回の食事を摂ることを忘れないように、礼拝をし、唯一神の教えを常に自覚することによって、人生活動の他の分野においても人から信頼される。なぜなら罪悪や欺瞞の誘惑が自分に近づいてきても、常に心の中に唯一神への畏れがあるため拒否するからである。

特に金曜日の礼拝は集団で行われるべきである。この礼拝はムスリムの間に相互に理解と愛を育み、互いに団結心を呼び起こし、民族的親善を助成する。参加者はすべて同じ行動の礼拝を捧げ、兄弟愛の深い感情に目覚める。礼拝は平等公平の象徴であり、人々は唯一神の前に、貧富、身分、主従関係、教育、皮膚の色、人種、老若の違いなく、全員が平等に一線上に並んで平身するのである。自分達が選んだ指導者の先導に従って、強い共感を持って一糸乱れぬ合同礼拝を行なうのである。礼拝とは個人生活と集団生活の豊かさを発展させる多くの徳性を高める訓練である。

以上が日常礼拝より得られる様々な徳の一部である。もし礼拝を避ければ、損をするのは他の誰でもない礼拝を怠ったその者である。礼拝を避けるのは、それを義務と認めないかあるいは義務と認めてもやろうとしないのかのいずれかである。前者の場合は信仰を持つ者としては恥知らずのたわごとである。なぜなら唯一神の命令を拒否することは、唯一神の権威を認めないことになる。後者の場合は唯一神の権威を認めて唯一神の命令を愚弄する者、従って地上に住む生物として最も不信極まるものである。なぜなら全宇宙の最高至上なものに対する愚弄は言語道断

であり、他の人間に対する同様の行為は許し難く、社会の秩序を破壊し、落ち行く先は不統一の地獄のみしかない。

3. サウム（断食）

礼拝は毎日 5 回捧げることが定められているが、ラマダーン月（イスラーム暦第 9 月）の断食は毎年 1 ヶ月に亘って行われる。この期間中は暁から日没に至る日中は飲食してはならない。たとえご馳走を目の前にし空腹であっても、どうして自発的に行動を規制しようとするのか。それは唯一神を崇拝し最後の審判を信じるからである。断食の最中常に感情と欲望を抑え、唯一神の法則が絶対であることを讃え奉る。義務を自覚し、耐え忍ぶ精神は 1 ヶ月の行を成功させ、信仰を強める。この月の厳格さと鍛錬は私たちに人生の現実に直面させ、その年の残りの 11 ヶ月を心から唯一神の意志に服従して生きることを助ける。

また他の観点からみても、断食は社会的に非常に大きな影響を及ぼす。すなわちムスリムはすべて身分や地位に関係なくこの期間に断食をしなければならない。このことは、人間の基本的平等性を高く引き上げ、兄弟愛と同情心を育ませる。ラマダーン月は、悪が自ら影をひそめ、善が前へ進み出て、社会の雰囲気が神聖かつ清浄となる。

断食は我々自身の利益としても大きくはね返ってくる。この課せられた原則的義務を果たさない者は他の義務を果たす時も十分信用され得ない。しかし最も好ましくない行為はこの聖なる月に平気で公然と飲食することである。自分たちの創造主および維持者として信仰するアッラーの法を全く意に介さず、自分勝手なことをする人達である。それだけではなく、彼らはムスリム社会の誠実なメンバーではないことを自ら示している。むしろムスリムの社会と縁のない人達である。この偽善者達

には最悪のものが訪れることは自明の理である。

4. ザカート（喜捨）

第 3 の義務はザカートである。ムスリムは誰でも財政状態が定められた最少額以上の余裕があれば、毎年その現金の残高の 2.5%を貧者、新入信者、旅行者などに施すのである。これは最低ラインであり、これ以上に喜捨することはアッラーの報奨が更に増大される。

ザカートとして支払われる金額はアッラーが必要とするものではなく、またアッラーが取るものでもない。唯一神は何の不足も要求もなく、唯その慈悲の御心より我々の善行に対し様々な報いを与えられるのである。ザカートを出す時はアッラーの御名において行ない、受取人からは何物をも決して期待、要求してはならない。また自己の宣伝を目的としてもならない。

ザカートは礼拝、断食と同じくイスラームの基本的な義務の行為である。ザカートの重要性は犠牲と献身の気持ちを助長させ、無慈悲と利己心より遠ざけることにある。自分で苦労して作り上げた富の一部を唯一神の道に進んで快く喜捨し、それによる直接の見返りや恩恵を考えない純粋な行為でなければならない。これは私欲家にはできない。真のムスリムは一旦唯一神の思召し（死）があれば、喜んで全ての所有物を己の手より離して去ることに徹している。ザカートによって充分に訓練されているから何の未練もない。

ムスリムの社会はザカートの制度によって莫大な恩恵を受けている。裕福なムスリムが己より貧しく困っている者を助ける一種の援助であり、社会全体の福祉と平安に貢献する。富者の富は全て快楽と贅沢のためにのみ消費されるべきではない。富に対して多くの正統な権利の主張

者がいることを忘れてはならない、すなわち寡婦、孤児、病人、身体障害者、失業者、苦学生など枚挙にいとまない。

富者が自分の所属する社会の中で困っている人達を助けようとしないならば、その社会の健全性は得られず、唯一神の繁栄と平安の道に沿うことができない。多数の人々が飢えに苦しみ、失業に歎いているのに、自分の懐に貯めることだけを考えているのは残酷である。そんな利己的で貪欲、強欲な者はイスラームの敵である。不信者や博愛心の欠けた者は、大金を貯めることに汲々とし、利子を取って他人に貸す。イスラームの教えはこれとは正反対である。人は自己の富を他人に分けて与え、独り立ちを助け、早く社会の有用な一員となれるように援助する。

5. ハッジ（巡礼）

巡礼すなわちハッジはイバーダートの第4番目の基本的義務である。これは経済的、時間的に余裕のある人に課せられた一生に1回は行なうべき義務である。今日のマッカは預言者イブラーヒーム（アブラハム）によって唯一神を礼拝するため建立された方形の建物（カアバ）を中心とする聖地である。唯一神はそれを「神の家」と呼び、地上における礼拝は全ていつもこの方向に向かって行なわれる。毎年イスラーム暦12月8日にマッカを出発して、9日は東方のアラファートの丘に至り、12月12日または13日に再びマッカに帰るまで、世界各地から集まった巡礼者によって勤行される諸行事がいわゆるハッジ（巡礼）である。ハッジは単なる儀礼的訪問ではない。この巡礼には我々の信仰の力と善行を強化するために一定の行事と条件が備わっている。ハッジに参加する場合、信仰に対する情熱を燃やし、殺生を慎み、言動に心を配ることが要求される。唯一神は我々の誠実さと忠順を御喜びになるであろう。ハ

ッジはイバーダートの最大のものである。なぜなら真の唯一神を敬愛することなく、近親や最愛の者を残してこのような長い旅に出られるはずがないであろう。

しかもハッジは物見遊山の旅行とは異なる。全思考は唯一神に集中され、生命は唯一神への強い献身の精神に打ち震え、やがてミナの谷の聖地に到達すると、信仰と崇拝が充満する周囲の雰囲気に包まれる。更にイスラームの光栄にゆかり深いアラファートの丘にあるムズダリファの両聖地を歴訪した後、強く焼き付けられる消すことのできない清らかな印象は一生永く心に残るであろう。イバーダートが持つ他の意味においても、巡礼を果たした人たちが享受し得る利益は数多くある。マッカはムスリムが 1 年に 1 回集結する中心地であり、会合し、意見を交換し、共同利害関係を討議して、地域や文化の差に係わりなく全信徒の平等な相互親愛の信念を強化実践するところである。このような巡礼によって、世界のムスリムはアッラーが教える国際友愛の下に団結される。

6. イスラームの防衛とジハード (聖戦)

イスラームの防衛はイスラームの柱のひとつではないが、クルアーンやハディースにおいてこのことが繰返し強調されている。

それはイスラームの信奉者としての誠意と実直さを示すものである。もし自分の友を敵の陰謀や公然たる攻撃から守ろうとせず、友人の利益に無頓着で、利己一点張りで振舞うならば、それは実に偽の友情と云わざるをえない。同様にイスラームを信じる限りは、イスラームの尊貴を守り、それを掲げなくてはならない。我々の行動の目標はムスリム大衆の関心事であり、その最も重要であるイスラームへの奉仕には、この考慮が深く浸透していなくてはならない。

ジハードはイスラームの総括的な防衛の一部である。ジハードは個人の能力を最大限に活用し努力することを意味する。自己を肉体的、精神的に唯一神の道に捧げ、そのための物質的支出も顧みない態度がジハードに専念している姿である。シャリーアによれば、これは特にイスラームの敵として侵略する者に対し「唯一神の御名の下に行われる総ての戦い」として用いられる。この唯一神に対する人生で最大の犠牲はすべてのムスリムに負わされる。だが、もし集団の中で一部のムスリムがジハードへの参加を申し出た場合は、全集団の参加は免除される。しかし誰も参加する者がない場合は全員の義務が問われる。この免除は、非教徒の勢力がイスラーム国家に攻撃を仕掛けてきた場合には通用しない。この場合は誰でも全てジハードのために立ち上がらなければならない。攻撃された国が反撃する充分な力がない時は、近隣のムスリムはこれを助ける宗教的義務がある。もしそれでも失敗すれば、全世界のムスリムはこの共通の敵に対して立ち上がらなければならない。このように、ジハードは日常の礼拝や断食と同様にムスリムの基本的な義務である。これを避けることは罪である。そしてその人のムスリムとしての存在自体が疑問視される。それは明らかに偽善者であり、誠実さとイバーダートの失敗者であり、その礼拝は偽善であり、無価値でうつろな見世物的なものにすぎない。

第6章　ディーンとシャリーア

本書では、これまでディーン、すなわち信仰そのものの関係について述べてきた。これから預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のシャリーアを取り上げ論じる。最初に、ディーンとシャリーアの相違を明らかにしたい。

1. ディーンとシャリーアの区別

既に各章で述べたように、過去の各時代に遣わされたすべて預言者は、イスラームの道を説き広めた。これは極めて重要な基本的事実である。彼らはイスラームを伝播した。すなわち唯一神－諸々の属性を持つ－に対する信仰、最後の審判に対する信仰、預言者と啓典に対する信仰、そして主に対する服従・帰依の生活を送ることを人々に説いたのであった。

これがディーン（信仰）を構成するものであり、すべての預言者の教えに共通する。

このディーン（基本的信仰）とは別に、シャリーアすなわち人間行為の詳細な法典あるいは崇拝の方法や形式を編録した規則、道徳と生活の標準、容認および禁止に関する法律、善悪の判別をするのがシャリーアである。こういった施行細則的な規則は時代に応じて修正する必要がある。預言者達は皆同じディーンをもたらしたが、その時代の特定の人々の条件に適応した別々のシャリーアを持って来たのであった。これはすべての時代を通じて、それぞれ異なった人々を訓練する目的において、さらによりよい文明の建設のため、さらにより高い道徳の育成のために役立った。この過程は最後の預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の出現によってピリオドが打たれた。彼は来るべき人類すべてに適合する

完全かつ最終的な法典をもたらしたのである。ディーン（基本的信仰）には何の変化もないが、過去のシャリーアの総てはムハンマド（彼の上に平安あれ）のこの総括的なシャリーアに取って代わったのである。これは人類時代の黎明期に発足した鍛錬の大過程におけるクライマックスであり、フィナーレでもある。

2. シャリーアの法源

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のシャリーアの二大原典、すなわちクルアーンとハディースについて要約すれば、クルアーンは唯一神の啓示であり、その章句はすべて唯一神より出たものであり、ハディースは最後の預言者であるムハンマド（彼の上に平安あれ）の言行の記録と教訓の集大成である。それは預言者と直接会った教友たちによって伝承されたものである。この資料が後に神学者達によって集積され厳選され叢書の形式として編纂されたのがハディース集である。この叢書の中のマーリク、ブハーリー、ムスリム、ティルミズィー、アブー・ダーウード、ナサーイー、およびイブン・マージャ等諸氏のコレクションが最も信頼度が高いと云われる。

3. フィクフの学説

人の世の流れの中で起こる千差万別の諸事件に関する細則（クルアーンとハディースに基づく）はすでに多くの著名な立法学者によって公版されている。我々ムスリムはこれら鍛達の博識者や、一生をクルアーンとハディースの精通のために捧げ、またシャリーアの要請に従い、いかに日常生活に適用させるかを明快かつ平易に書き表した立派な人々に

対して、我々は感謝すべきである。世界中のムスリムがシャリーアに容易に従うことができるようになったのは、これら諸先覚者の功績に帰するところが大きい。たとえクルアーンやハディースについて正確に要点を明らかにする解釈を下せるほどの学識がない人達でも、このような先達の解説から大きな利益を受けている。

当初は多数の指導者たちがこの仕事に取り組み専念したが、今は以下の 4 学説が代表学説として残っている。

イ）ハナフィー学説

アブー・ハニーファによって主唱された学説でアブー・ユースフ、ズー・ファルその他信頼されたイスラーム碩学者の支持と協力によって編述されたもの

ロ）マーリキ学説

主唱者マーリク・イブン・アナスによって解釈された学説

ハ）シャーフィイー学説

ムハンマド・イブン・イドリース・アッシャーフィイーによって創唱された学説

ニ）ハンバリー学説

アフマド・イブン・ハンバルの主唱した学説

アブー・ハニーファは西暦 699 年（ヒジュラ暦 80 年）に生まれ 767 年に没した。この学説の同調者は主としてトルコ、パキスタン、アフガニスタン、ヨルダン、インド、ソ連等でその数は 3 億 4 千万と云われている。マーリク・イブン・アナスは 714 年に生まれ 798 年に没す。同調者は 4 千 5 百万でモロッコ、アルジェリア、チュニジア、スーダン、クエートおよびバハレーン等に多い。

ムハンマド・イブン・イドリース・アッシャーフィイーは 767 年に

生まれ 852 年に没した。同調者はレバノン、エジプト、イラク、サウディアラビア、イエメン、インドネシアに多い。

アフマド・イブン・ハンバルは 780 年に生まれ、855 年に没す。サウディアラビア、シリア、レバノン方面に約 3 百万の同調者がある。

これらの学説のすべては預言者の時代から 200 年間の内に最終形式が整えられた。4 つの学説に見られる違いは、真理が多くの面を持つという事実の当然の結果にすぎない。これらのいろいろな学説に真実性を与えるものは、それぞれの主唱者の高貴な人格と彼らの取った方法の真実性である。そのため、ムスリムがどの学説を受け入れようとも、4 つの学説は基本的にすべて真実で正しいと信じる理由である。

もっとも、知識と学問を習得した者は直接クルアーンと言行録（ハディース）に導きを求めるべきであり、それだけの知識と能力のない者は、特に好きな学説を選んで、それに従うべきだと説くアハリ・ハディースというグループもある。

4. タサウーフ

・フィクフは一目で明らかに解かる行為、すなわち外見的所作に関するものを扱い、文字通り義務の遂行である。行為の精神的な面に関することはタサウーフと呼ばれる。例えば礼拝する時、フィクフはウドゥーに関することやカアバの方向に向くこと、ラカアト（礼拝単位）数や時間などに関するものについて規定するが、タサウーフは精神の集中力、熱心さ、純粋さ、礼拝に対する精魂の打ち込み方などに関することに言及する。このようにフィクフは戒律を最後まで詳細にわたって遂行することに関係しており、真のイスラームのタサウーフは信者がどれほど従順で誠実であるかの度合いである。その所作が正しくても精神の伴わない

イバーダートは、外見はハンサムであるが品性が欠けている人のようなものであり、精神は入っているがその方法に欠点があるイバーダートは、品性は高貴であるが外見は端麗でない人のようなものである。

この例えはフィクフとタサウーフの関係を明らかにしている。後にムスリムは知識と品性に埋もれてしまい、外見をなおざりにしたため（つまり実践が空転したため）、時が経つにつれて、当時流行した、イスラームを歪曲し教義を偽装した、誤った国家の理念に妥協したことは、ムスリムにとって不幸なことである。

誤った国家の指導方針は、いくら善意に解釈しても、クルアーンと言行録に基づいて正当化することができない非常識さのため、タサウーフの純粋性を汚した。次第にムスリムはシャリーアの要求に麻痺し、それを超越していると考えたり主張するムスリムの一派が現われてきた。かれらは全くイスラームを知らないのである。なぜならば、イスラームはシャリーアから遊離して勝手に振舞うタサウーフを許すはずがないからである。いかなる信者もシャリーアの限界を超える権利を持たないし、日常のサラート（礼拝）、サウム（断食）、ザカート（喜捨）、ハッジ（巡礼）などの基本的義務を軽視することは許されない。タサウーフは本当の意味ではアッラーとムハンマド（彼の上に平安あれ）に対する心からなる敬愛である。そして、そのような敬愛は唯一神の啓典と唯一神の預言者のスンナに記されているアッラーとムハンマド（彼の上に平安あれ）の命令に厳重に従うことを要求するのである。この命令に背く者はアッラーとその使者に対して偽りの愛を抱く者である。

第7章　シャリーア（法典）の原理

イスラームの原理を研究し、イスラームがどのような人間と社会を作ろうとしているのかを明確に理解しなければ、イスラームの本質について議論することはできない。この最後の章では、我々のイスラームの概念が完全になり、イスラームの生き方がいかに素晴らしいものであるかがよく分かるように、シャリーアの原理の研究をしてみたい。

1. シャリーアの性格と意味

人間は発展する能力と機能を与えられており、唯一神はこの点において全く惜しみなく人間に恵み給われた。人間は知性と叡知、意志と決断力、五感、四肢の機能、喜怒哀楽の感情等を与えられている。これらすべては人間に非常に役立ち、そのどれひとつとっても不必要であったり余分であったりするものはない。与えられたこのさまざまの能力は人間にとって切実に必要であり、人間に必要欠くべからざるものとなっている。人間の生活と幸福そのものが、己の必要と欲望を満たすためにこれらの能力をいかに使うかによって決まるほど、重要になっている。この天賦の能力は人間に役立つために与えられているのであって、それを十二分に活用しなければ、人生は生きがいのあるものとはならない。唯一神はさらに、人間が天賦の能力を働かせ、要求を満たすために必要なあらゆる手段と原動力を与え給うた。人間の肉体は人生の目標を達成する闘いにおいて、最も偉大な武器となるように作られている。さらに人間が住んでいる世界がある。人間の住む世界は、あらゆる種類の資源を有している。その資源を人間は己の目的を達成する手段として使うのである。ありとあらゆるものは人間の利用を待っており、人間はそれをあら

ゆることに利用することができる。その上、よりよく豊かな生活を構築するためにお互いに協力できるように、人間の同胞がいるのである。

この現実をもう少し考えてみると、これらの能力や資源はすべての人類が使えるように与えられていたのである。これらは人間の幸福のために賦与されたものであり、決して人間を傷つけたり破壊するためではない。それらを活用するのは、善意と美徳をもって人生を豊かにし、人生を危険に陥れないためである。これらの能力をどのように適切に使うかは、それらを自分達のためにどのように役立たせるかにかかっている。多少困難があっても、それをできるかぎり無駄にしないようにしなければならない。そうしてこそ、これらの能力を適切に活用したことになる。その結果が浪費や破壊になるようなことはすべて愚かであり、誤りであり、不合理である。例えば、もし自分を傷つけたり、自分のためにならないことをするならば、それは過ちである。また、自分の行為が他人に危害を与え、迷惑をかけるなら、それは全く愚かな行為であり、唯一神から与えられた能力を誤って使ったことになる。あるいは資源を浪費し、それらを無意味なことに濫用したり破壊すれば、それもまた大きな過失である。このような行為は言語道断の不合理であるが、破壊と損害を避けて繁栄と利益の道を追求しなければならないと示唆するのが人間の理性というものである。もし損害が起こる場合は、それが不可抗力の場合か、将来さらに大きな利益を生む場合か、どちらかのみである。それ以外は不合理というものである。

この根本的な考察を念頭において人間を観察すると、人間には 2 種類のタイプがあることがわかる。

第 1 は、故意に自分の能力と資源を誤って使い、この誤用によって天然の資源を浪費し、自分の重要な利益を損ない、他の人々にも害を及ぼす人間である。第 2 は、誠実で真面目であるが、無知のために誤り

を犯す人である。第 1 の故意に能力を誤用する人間は悪質であり、彼らを補導し改心させるためには断固たる法的処置をとる必要があるが、第 2 の無知のために誤りを犯す人間には、彼らが正しい道を知り、自分の能力を最大限に活用できるように、適当な知識と指導が必要である。そしてこの必要を満たすために、唯一神が人間に啓示し給うた行動の規範ーシャリーアが重要となる。

シャリーアは唯一神を根源とする法典であり、人間に最も便宜を与えるような生活態度の道徳を提供している。その目的は人間に「至上の道」を示し、人間の要求を最も効果的かつ最も望ましい形で満たす方法と手段を与えることである。唯一神の法典は常に人間の幸福のためにある。その中には、能力を浪費したり、また人間の本来の要求と欲望を抑制したり、さらには正常な感情と本能を阻止したりするものは全くない。それは難行苦行をせよとは云っていない。「世界から隠遁せよ。人生のあらゆる安逸と快楽を捨てよ。出家し、食物も着物も持たずに、荒野や山や密林を行脚し、苦難に身をさらせ。」というようなことは一切言っていない。

このような説教はイスラームの法とは無縁である。イスラームの原理は宇宙を創り給うた唯一神によって規定されたものである。シャリーアは万物を人間の下に創り与えた。唯一神は神自身の創造物の破壊を望まれない。唯一神は人間にひとつとして不必要で無駄な能力は与えられなかった。また唯一神は人間の役に立つ諸々のものを、天上にも地上にも創り給われた。人間ー被造物の中で最も高貴なるものーが、地上でも天空でもその能力を活用して、人間の利用を待っているあらゆるものを最も上手に最も建設的に活用することができるために、唯一神は明確な御意志を持ってこの宇宙ーこの複雑多岐な運動をする壮大な工場ーを支障なく円滑に働かせ続けているのである。人間はそれらから素晴らしい

収穫を得ることができるように活用すべきであり、故意であれ、無意識であれ、唯一神の創造物を決して損ねてはならない。シャリーアはこの点で人間の道しるべとなるのである。シャリーアは人間に害になるあらゆることを禁じ、人間に有益・有効・有為なことを薦めている。この規範の根本的原理とは、「人間はあらゆる純粋な要素と欲望を成就し、かつ利益を高め、繁栄と幸福を獲得するためにあらゆる努力をする権利を持っているし、ある場合にはそれが義務である。ーしかし（この「しかし」は重要である）人間は、他人の利益の妨害をしたり、彼らが自分達の権利と義務を達成するために奮闘しているのを邪魔したりしては絶対にいけない」のである。それぞれの目的の達成を目指して奮闘している人間同士の間には、できる限りの社会協力と相互扶助が不可欠である。善と悪、利益と損失が不可避的に結びついているものに関しては、「大きな利益を得るためには、できるだけ少ない損失を選び、大きな損害を避けるためにできるだけ少ない利益を犠牲にする」というのが、この規範の教義である。これがシャリーアの基本的なアプローチである。

我々は人間の知識が限られていることを知っている。自分にとって何がためになり何が害になるか、いかなる時代のいかなる人間も、自分だけでは判らなかった。その知識は、人間に正しい真理を与えるにはあまりに限られている。そのため唯一神は人間がこの面で過誤に陥らないように配慮され、全人類の正しく完全な生活の規範となる法を啓示された。この規範の価値と真理は時を経るにつれて、ますます人間に明らかになってきている。数世紀前には、この規範価値の多くは人々の目から閉ざされていた。しかし今や知識の発達と共にそれらは次第に明らかになってきたのである。今日でも一部の人々はこの規範の価値を認めないが、もっと知識が進歩すればそれらに新しい光があてられ、この規範がいかに優れているかが明らかになるだろう。世界は否応なしに唯一神の法に

向かっている－この法を認めない者の大部分は暗中模索と試練と過誤を重ねたあげく、結局この規範のいくつかの条項に従わざるをえない。啓示の真理を否定し、導標のない人間の理性を絶対的に信仰してきた人も、過失と苦しい経験を経た後、結果的にシャリーアの教えをいくつも実践している。しかしこういう人はなんと損しているのだろうか。そして遅ればせに唯一神の道に従っても完全ではないのである。これに反して唯一神の預言者達を信じ、その言葉を受け入れ、シャリーアを学び完全に理解し、それに従う人々がいる。彼らはある教えについては、その総ての価値を知らないかもしれないが、真の知識の真髄であり、害悪無知の暗中模索や過失から救ってくれる規範を全面的に受け入れているのである。このような人々こそ正しい道を進み、栄えるにちがいない人々である。

2. シャリーアその権利と義務

イスラームが描く人生の計画は権利と義務から成り立っている。イスラームを信じる人間は総てそれらによって生きなければならない。おおまかに言えば、イスラームの規範は次の 4 つの権利と義務を総ての人間に課している。（1）すべての義務が果たされなければならない唯一神に対する権利（2）自分自身に対する自分自身の権利（3）自分に対する他の人々の権利（4）唯一神が人間に奉仕するようにと作り給い、また人間がそれらを使うことができるようにさせ給うた能力と資源の権利。これらの権利と義務はイスラームの礎石をなしており、それらを理解し、真剣に用心深く実践することが、あらゆる真のムスリムの義務である。シャリーアはあらゆる権利を明確に論じ、仔細に説明している。シャリーアはさらに、それらがすべて実践され、ひとつとして無視され

たり蹂躙されたりするものがないように、その義務を行なう方法と手段を説明している。ここで、イスラームの生き方とその根本的な価値の概念をはっきりと理解できるように、この権利と義務について若干考察しよう。

A．唯一神の権利

まず、人間の創造主に対する基本的な関係を研究しなければならない。唯一神の最も根本的で第 1 義的な権利は、人間は唯一神のみを信仰すべきであると言うことである。人間は唯一神の権威を認め、唯一神に何ものをも結び付けてはならない。このことはラー・イラーハ・イッラッラーというカリマに要約されている。

＊注　このことは既に第4章で詳しく述べた。

人間に対する唯一神の第 2 の権利は、我々が唯一神の導き－唯一神が人間に啓示し給うた規範－を心から受け入れ従い、全身全霊を尽くして唯一神の満足を求めることである。我々は唯一神の預言者の導きと指示に従い、この権利の神命を成就する。

人間に対する唯一神の第 3 の権利は、我々が唯一神に誠実に何等の含みもなく従わなければならないということである。我々はこの権利の要求をクルアーンとスンナに記されている唯一神の法に誠心誠意従うことによって成就できる。

人間に対する唯一神の第 4 の権利は唯一神を崇拝することである。これは礼拝を捧げることと前述のイバーダートを実行することによって成就される。

これらの権利と義務は他のあらゆる義務に先行するため、他をある程度犠牲にしても、それらを最初に成就しなければならない。例えば、礼拝や断食をする時は、個人的な権利の多くを犠牲にする。唯一神に対す

る義務を完全に果たすために、人間は困難を克服し犠牲を払わなければならないのである。礼拝するために朝早く起きなければならないから、そのために睡眠と休息を犠牲にする。日中には創造主を礼拝するために、多くの重要な仕事を後回しにし、休憩を犠牲にする。ラマダーン月（断食月）には、ただ唯一神の喜びを得るために、空腹と苦難を耐え忍ぶ。ザカート（義務的喜捨）をすることで富の一部を手放すが、唯一神への愛はなにものにもまして大きく、富への愛もそれを妨げることはできないということを示す。巡礼の時には、富と時間を犠牲にして、困難な旅をする。そしてジハード（聖戦）に際しては、金も物もその他持てるあらゆるもの－生命さえも－を犠牲にするのである。

同様に、これらの義務を遂行するためには、人間は他人の権利をもある程度犠牲にすることも生じ、そのために結局自分の利益を犠牲にしなければならない。召使いは仕事をそのままにして、主なる唯一神を礼拝しに行く。実業家は事業を中断して、マッカに巡礼に行く。ジハードの時には、ただアッラーのためのみに生命を奪ったり捨てたりする。同様に、唯一神の権利を遂行するためには、例えば家畜や財貨のような大事に貯えている多くのものを犠牲にするのである。しかし唯一神は人生のさまざまな場面で調和と均衡が取れ、他の権利の犠牲はできる限り少なくてすむようにシャリーア（法典）を規定された。つまり唯一神から規定された限界を守ればよいのである。唯一神はサラート（礼拝）の義務を遂行するのにあらゆる便宜を我々に授け給うた。もしウドゥー（小浄）をするのに水がない場合、あるいは病気の場合には、タヤンムム（土による小浄）をすることができる。旅行中はサラートを短縮することもできる。病状に伏し、立って礼拝ができない場合は、坐ったり横になったりしたまま礼拝を捧げることができる。礼拝時のクルアーン章句の朗誦は自由であるから、礼拝は好きなように短くすることも長くすることも

できる。

用事がない時はクルアーンの長い章を読み、忙しい時にはほんの数行読むだけでもよい。集会や仕事時間の礼拝では、読誦は短くなければならないと指示されているほどである。唯一神はそれぞれの場合に任意の礼拝を喜ばれるのであって、礼拝のためにまったく眠らなかったり休まなかったり、子供の権利を犠牲にしたり、家庭を犠牲にしたりすることを認められないのである。イスラームは人生の様々な活動の調和を計ることを我々に要望しているのである。

サウム（断食）についても同様である。1年の断食の義務はわずか1ヶ月である。旅行中や病気の際はこれをしなくてもよく、代わりに都合の良い月にすればよい。婦人は妊娠中や、乳児のある時、生理中の場合は断食を免れている。断食は定められた時間に解き、それよりも遅れることは良いこととされない。そして日没から夜明けまでの間は、通常通り食べたり飲んだりして過ごす。また時々任意に断食をすることは大変よいことであり、唯一神も喜ばれる。だが唯一神はいつも断食を続け、普通の仕事も満足にできないほど身体を衰弱させることを厭われる。

同様に、ザカート（喜捨）の場合を見ると、ザカートの最低限だけが唯一神から定められているが、人間はアッラーのために好きなだけ多く喜捨する自由を持っている。もし喜捨するならば、義務を果たしたことになるが、もっと多く慈善の施しをするならば、もっと多くの唯一神の恩寵を得る。しかし唯一神は我々の財産を全て慈善に施すことや、自分自身と親戚縁者がもたなければならない権利と慰安まで犠牲にすることをお喜びにならない。唯一神は我々が貧困になることを望まれない。我々は適度に喜捨することを要求されているのである。

次にハッジ(巡礼)を見てみよう。巡礼は旅行する経済的余裕があり、その困難に耐えうる健康を持った人々にだけ課せられた義務である。し

かしそれは一生にただ 1 度だけ、都合の良い年に行くことが義務なのである。もし戦争や生命の危険がある場合には、巡礼を延期することもできる。その場合、年老いた両親が巡礼者の留守中に不愉快なことに悩むといけないから、両親の許可を得ることが巡礼の大事な条件である。このことは唯一神が人間の権利をどれほど尊重しているかを明白に示している。ー時には唯一神は神自らの権利以上に人間の権利を尊重されているのである。

唯一神の義のための最大の犠牲はジハード(聖戦)の際に発揮される。そのときこそ人間は唯一神のために自分の生命も財産も捧げるのである。だがこの場合においてすら、甚大な損害から我々を救うために多少の損失はやむを得ないというのがイスラームの原則である。たとえ数人の生命をー数千人またはそれ以上の生命を失ったとしても、それは、悪が善を制覇した悲惨、無神論が唯一神の宗教を侵略した悲惨、世界のムスリムが屈服させられて堕落した悲惨に替えることは絶対にできない。明らかにそれは最大の悲惨であり不幸である。何故ならば、その結果は、唯一神の宗教が破壊するばかりでなく、世間は不道徳と曲解の地獄と化し、生活は内からも外からも崩壊するからである。だが同時に唯一神は不必要な流血沙汰と、老人、婦人、子供、病人、負傷者に危害を与えることを固く禁じられる。唯一神の命は戦いを挑む者に対してのみ戦うことである。敵国の中にさえ不必要な撹乱を起こしてはならない。また敗者にも名誉を重んじて公正に対処するべきであると唯一神は我々に命じられている。我々は敵との協定を遵守し、相手方が挑戦を中止するか侵略的な反イスラーム行動を止めれば、戦闘を中止するべきであると教えられている。この様にイスラームは唯一神の権利を擁護するために生命、財産、その他の権利の、最小限の犠牲を許すだけである。イスラームは人間の様々な要求の調和を作り、生活が最高の価値と実績で豊かに

なるように様々な権利と義務を調整することに主眼が置かれている。

B．自己の権利

次に人間個人の権利、すなわち自分自身の権利について述べてみよう。実際に、人間は他人に対してよりも自分自身に対してより残虐で不正である。ちょっと考えると、これは非常に奇異に聞こえるかもしれないが、人間は自分自身を最も愛するといわれるのに、どうして自分自身に最も残虐であり得るのか。どうして人間は自分自身の敵となり得るのか。それは全く理解しがたいように思われる。だがもっと深く考えれば、そこには大きな真理が含まれていることが明らかになる。人間の最大の弱みは、強い欲望を感じるとそれに抵抗できず、誘惑されてしまい、悪いと知りながらずるずるとそれに耽溺し、自分自身を傷つけることである。酒に耽溺している人がいる。一彼は酒を飲むとコントロールがきかなくなるが、金、健康、名声その他彼の持つあらゆるものを犠牲にしても飲酒を止めないのである。また、健康を害し、生命を危なくするほど大食することが好きな人もいる。性欲の虜となり、過度の性的享楽のために身を滅ぼす人もいる。さらに霊性を向上させることに凝り固まっている人もいる。一彼は純粋な欲望をも抑制し、肉体的な欲求と必要を満たすこともせず、食欲を制限し、着物もまとわず家出して山野に隠遁する。彼は世界が自分には全く無意味であると信じ込み、世界のあらゆる形姿と表示を憎悪するのである。これらは極端に走りやすく、偏狭な世界に迷い易い人間の性格の例である。日常生活の中でそのような不調和と不均衡の例はここであえて取り上げないが他にもたくさんある。

イスラームは人間の幸福を標榜し、その高く掲げている目的は人生に均衡と調和をもたらすことである。シャリーアがあなた方自身も自分に対してこの権利があると明言するのもこの理由からである。その基本的

原理は、人間には自分自身に対する権利がある、ということである。

シャリーアは人間の肉体的、精神的、道徳的に有害なあらゆることを禁じている。血を流すこと、酒類など興奮させる薬物、死体、死肉、血液、豚肉、肉食獣、有毒で不潔な動物などを食べることを禁じている。これらは全て人間の生活に、肉体的、精神的、知性的霊的に見て悪い影響を与えるからである。そのようなものは禁じているが、イスラームは清潔で健康的で有益なことを積極的に勧め、人間の肉体も人間に対して権利を持っていることから、我々の肉体から食物を奪ってはならないと説いている。このイスラームの規範は裸でいることの代わりに優雅で威厳のある着物を着ることを命じている。さらに真面目に働くことを勧め、怠惰を強く非難する。シャリーアの精神とは、人間は唯一神によって授けられた能力と唯一神が地上と天上に与えられた資源を、人間の平安と幸福のために十分に活用すべきであるということに他ならない。

イスラームは性的欲望をすべて抑圧せよと言っているのではない。それを制御し調節し、結婚においてそれを正しく満足させることを我々に要望しているのである。

イスラームは自己虐待や全面的な自己否定を禁じ、むしろ人生の正しい慰安の快楽を肯定し、その中において敬虔で堅実に生きることを薦めている。霊的向上、道徳の純粋、唯一神への接近、来世での救いを求めるために、この世から乖離隠遁する必要はない。いや、人間の試練はこの世に存在するから、我々はこの世の真っ只中に在って、まずアッラーへの道に従うべきである。－それ故生命を軽々しく取扱ったり、無駄に使ったり、破壊させてはならない。このことが人間個人はそれぞれある権利を持ち、この権利をシャリーアに示唆されているような方法で最大限に果たすことが人間の義務である。それが、イスラームが人間の心に呼びかける所以であり、またこのことが人間が自分自身に対して真実で

ありえる所以である。

C．他人の権利

シャリーアは人間に自分自身の権利を遂行し、自己に忠実であれと命じているが、他方それはまた、他人の権利を侵さないようにして自己の権利を遂行しなければならないと教えている。シャリーアは人間の権利と社会の権利の間の衝突を避け、あらゆるものが協力して唯一神の法を立証するように両者の調和を計っている。イスラームは嘘を強く禁止している。嘘はその人を汚し、他の人々に害悪をもたらし、社会に対して不幸の前兆となるからである。イスラームは窃盗、強盗、贈賄、偽造、詐欺、高利貸し、金利稼ぎの行為を固く禁じている。このような不正な手段で得られたものはすべて他人に迷惑や損害をかけて得たものである。陰口、告げ口、中傷、讒謗なども禁じられる。賭博、富籤、相場投機その他あらゆる偶然が目当ての賭け事は一人の人間が利益を得るために、他の何千人もの人々が犠牲にならなければならないから、禁止されている。一方だけが損失するようなあらゆる形態の搾取的な商売は禁じられている。殺人、流血沙汰、社会的不安の流布などは罪とされる。何人も他人の生命や財産をただ自分の利益や満足のために奪う権利を持たないからである。不貞、姦通、不自然な性行為は厳重に禁じられている。何故ならば、それらは道徳を汚し、社会に堕落と頽廃を撒き散らし、病原となって、生活の健全性を破壊し、若い世代の健康と道徳を低下させ、人間同士の関係の転落、文化の根本と社会の機構そのものの分裂を招くからである。イスラームはそのような忌まわしい不義の罪を徹底的に根絶しようとする。

これらのイスラームのあらゆる禁令と破壊は他人の権利を侵害しないとする原則によって定められている。イスラームは、人間が肉体的あ

るいは精神的ないくつかの魅惑的なことを達成するために、恥知らずにも他人の権利を侵害したり、道徳に外れることをするなど利己的で自己本位になることを嫌う。またイスラームは自分個人の権利を達成するために他人の利害を犯すことも許さない。イスラームの法は万人に幸福が得られるように人生を規定している。しかし人類の幸福と文化の向上を達成するためには、少しぐらいの禁令だけでは不十分である。本当に平和で栄えた社会を作るには、人間が他人の権利を侵害せず彼らの利害を妨害しないだけでなく、お互いに積極的に協力し合い、万人の幸福と理想的な人間社会の建設に貢献するような相互関係と社会機構を打ち立てなければならない。シャリーアはこの点でもまた我々の道徳となるのである。

ではさらにこの人生と社会の面を解明するいくつかのイスラームの教えを見ることにしよう。人間が最初に成長する場所は家庭である。人間の根本的な性質が形成されるのは家庭である。そのため家庭は人間のゆりかごであるばかりでなく、文明の揺籃地である。では一体、家族とは何であろうか。家族は両親とその子供達で構成されている。子供が目を開き、養育されて成長し、人生の第一印象を受けるのは実はこの家族の間において行われる。家族に関するイスラームの教えは非常に明白に示される。イスラームは世の男性に対し自分の妻と子供たちのために働き、生活の糧を供給し、人生の荒波から彼らを保護する責任を命じている。女性に対しては、イスラームは家族を切り盛りし、子供たちをできるだけよく育てて躾し、夫と子供たちにできる限りの休息と満足を与える義務を命じている。子供たちの義務は両親を尊敬し、両親に従い、そして成人になったならば両親に孝行し、その願望を叶えてあげ、家庭を居心地の良いところにすることである。

そのために、イスラームは次の2つの方法を取っている。

イ）夫は家族の家長の地位を与えられている。リーダーとなる人がいなければ、いかなる団体も円滑に働かない。校長のいない学校や市長のいない都市を考えることはできない。もし団体を管理する人がいなければ、混乱を招くだけである。もし家族の全員が自分勝手に振舞えば、混乱以外の何ものも残らないだろう。もし夫が一方の道を行き、妻が別な道を行くとすれば、子供たちは路頭に迷うであろう。家庭に規律が保たれ、家族が社会の理想的な結合体となるためには、家長となる誰かがいなくてはならない。イスラームはこの地位を夫に与え、家族を良くするために維持された文明の基礎単位、社会全般のモデルとするのである。

ロ）この家長はいくつも責任を負っている。生活の糧を得て、家庭外でのあらゆる仕事をやりとげるのが夫の義務である。それによって主婦は家庭外の用務から解放され、それらの用務は夫の方にかかっている。主婦は家庭外の用事から開放されているから、家庭内の用事に十分専心することができ、家庭の維持と将来の民の構成員となる子供の養育に全力を尽くすことができるのである。主婦は家に留まり、割り当てられた責任を果たすように命ぜられている。イスラームは主婦に二重の負担、つまり子供を育て、家庭を守ることと、生活の糧を得て、家庭外の仕事をすることをさせないようにしている。二重の責任は明らかに全く不公平である。そのためイスラームは男女の本質にふさわしい仕事の分担を定めている。

しかしこのことは婦人が家から一歩も出てはならないということではない。婦人は必要な時には家庭の外に出てもよい。イスラームの原理においては、家庭こそ女性の本質にふさわしい働きの場であることを明白にし、女性は家庭生活の向上に専心すべきであると強調している。女

性が外に出なければならない時は、男性と同様、ある必要な規定を守らねばならない。

家庭の範囲は通例、血縁関係と結婚関係を通じて広がる。家族の構成員をひとつに結びつけるために、家族相互の間柄を親密にまた健全に保つために、また家族の一人一人を他の者の支え、活力、満足の源にさせるために、イスラームは基本的な規範を規定する。それらを要約したものが以下に示される。

ア．近親同士の結婚は禁じられている。結婚が禁じられている間柄は母と息子、父と娘、継父と継娘、兄と妹、異母兄弟と異母姉妹、伯父と姪、叔母と甥、義理の母と義理の息子、義理の父と義理の娘。これらの結婚が禁じられている理由は、家庭内親戚間の関係を清純潔白にし、お互いにこだわりなく誠実な情愛で結びつけるためである。

イ．以上の間柄をのぞけば、血縁関係でも結婚できる。互いに交際し合い、互いに習慣、伝統を知り合っている両家の間の結婚はうまくいくことが多い。そのため、シャリーアは血縁関係の結婚を許しているばかりか、全く知らない家族同士の結婚（もちろん禁じられていない）よりも優れているとしてむしろ薦めている。

ウ．血縁関係の親族の中には、富者もいれば貧者もおり、繁栄している者もいれば、没落している者もあろう。イスラームの原則によれば、親戚を必ず大切にしなければならず、親戚同士の関係を尊重する。ムスリムはできるかぎり、この絆を尊重しなければならない。親戚の者に対して誠意を持たず、自分が背負っている彼らの権利を無視することは大きな罪であって、唯一神はこれを許されない。もし親戚の者が貧困や苦難に悩んでいる場合は、それを助けるのが富み栄えている親戚の義務である。ザカート（喜捨）やその他の慈善の形で親戚の権利に対して、特に考慮を払わなければならない。

エ．相続の原則もイスラームの法則の中に規定されている。故人が残した遺産はある一部の者だけが独占することはできない。遺産はすべての親族の間で分配しなければならない。故人の息子、娘、妻、夫、父、母、兄弟、姉妹は最も近い親族であるから、遺産の相続の分配は優先的に彼らに与えられる。つまり彼らが第一の相続人となるのである。このような親族がいない場合には、遺産は次に近い親族の間で分配される。そのため人が死亡すると、その人の財産はまず彼の親類縁者の間で分配される。これは富が一個人に集中することを回避する目的がある。この遺産分配に関するイスラームの法則は他に類を見ないほど優れている。だが皮肉なことに、ムスリム自身がこの方法が非常に優れたものであることを十分に気がつかず、無知であるため、それを実行することを避けている者がある。インドとパキスタンのある地方では、娘には遺産相続の権利がないとしているところがある。これは明らかに不正であり、クルアーンの賢明な教えに違反している。

以上家族とその関係を取り上げてきたが、次に友人や隣人、村落や都市などの同じ地域の住民、日常交際する人々に対する人間関係を調べてみよう。イスラームはこのような関係を重視し、人々には正直、誠実、公平、礼儀正しく対応するように命じている。イスラームは信者に、他人の気持ちを尊重すること、不平や口汚い言葉を避けること、お互いに助け合うこと、病人の看護をすること、困窮者や障害者を助けること、悩み苦しむ者に同情すること、孤児と寡婦を世話すること、飢える者に食物を恵むこと、着物がない者には着物を恵むこと、失業者を助けることなども命じている。イスラームはもし唯一神が富を恵み給うたならば、富を贅沢三昧のために浪費してはならないと説いている。イスラームは金や銀の容器を使うことや男性が高価な絹の着物を身につけること、つ

まらぬ事業や贅沢な享楽のために金を無駄遣いすることを禁じている。このシャリーアの教えは、数千人の人間を養えるほどの富を自分一人のために浪費することは許されないという原則に基づいている。多くの貧窮者の生活を維持できるほどの金が無意味で贅沢な装飾や見世物などに浪費されるのは非情かつ不正である。イスラームは人間から富や所有物を奪おうというのではない。働いて得た物や相続を受けた物は勿論当事者の所有物である。イスラームは人間の権利を尊重し、人間がその権利を享楽しそれを最大限に活かすことを教えている。イスラームはまた、もし富裕であればよい着物を着て、結構な構え、安楽な生活をするように薦めている。だがイスラームは人間のあらゆる行為の中で人間的本質が見失われてはならぬと提言する。イスラームが厳しく排撃することは、他人の繁栄と幸福を無視し、極端な個人主義を生み出す高慢な自己中心主義である。イスラームでは限られたわずかの個人が私服を肥やすのではなく、社会全体が繁栄することを要求している。イスラームは信者の心に社会への意識を教え込み、質素倹約の生活をし、過度に人生の欲求を持つことをやめて、自分たちの欲求を充足している間にも親類縁者や友人同僚、隣人同胞の欲求と願望を配慮すべきであると信者たちに提言している。

クルアーンは、あなたがたの富は貧者　乞食、困窮者にも分かち与えなければならない、と教えている。

以上身近で親しい交際範囲に対する人間関係について論じてきたが、次にもっと視野を拡大し、イスラームがどんな社会を建設しようとしているかを見ることにする。イスラームを受け入れると、誰でも教義を信奉するだけでなく、進んでイスラーム社会の一員となる。シャリーアは広い範囲で社会に対する行為の規範を規定している。ムスリムがお互い

に助け合うことを命じ、善をすすめ、悪を禁じ、害悪がイスラーム社会に忍び込まないように見守っている。この点に関するイスラームの規範の主要な教えは次のとおりである。

イ）民の道徳の源泉を守り、健全なる社会の発展を期するために、男女両性の区別を混合することは禁じられる。イスラームは男女両性の本質にふさわしい分担を定め、両性の本質に適したそれぞれの活動範囲を定めている。女性は家庭内の仕事に専心するのに適しており、男性は社会経済分野の活動に従事するのに適している。結婚が禁じられている親戚同士のような近親の家庭の範囲外では、男女の自由勝手な交際は禁じられている。

女性が外出する時は、男性と同様、華美な服飾を避け、きちんと身なりを整える。また女性は結婚を禁じられた親戚以外の前では顔と手以外を覆うべきである。一方男性は眼を下にして女性を凝視しないように努める。たとえば偶然に視線が女性に触れた場合は急いで眼をそらさなければならない。女性を見つめようとすることは悪徳であり、女性の容姿を凝視することはさらに悪い。自分の徳義を守り、魂から不純なものをすべて一掃することがあらゆる男女の義務である。結婚は性的関係の適切な姿である。何びともこの限界を逸脱したり、性の放縦を考えることは許されない。

ロ）人間の思想と想像そのものを堕落頽廃した考えから純潔に保たなければならない。

ハ）また同じ目的のために人間は適当な着物を常に着て、男は身体の膝からへそまでの部分を見せず、女は夫と結婚を禁じられた親族以外のいかなる男にも顔と手を除く部分を見せてはならないと定められている。それらの身体の部分を覆っていることはあらゆる男女にとって宗教上の義務である。この戒律を通じてイスラームは信者が深い謹慎

と純潔の念を養い、無秩序と道徳の堕落のあらゆる現われを抑制することを望んでいるのである。

ニ）イスラームは色情の官能を刺激し、道徳の規範に外れるような娯楽や慰安を認めない。このような行為はまったく金と時間と精力の浪費であり、社会の道徳的基盤を蝕む。しかし慰安そのものは必要である。それは活動への刺激となり、みなぎる活力と冒険を喚起してくれる。慰安は水や空気のように人生にとって必要であり、体験と慰安がなければ困難な仕事はなかなか貫徹しがたい。しかし慰安は精神を蘇らせ、活力を喚起するものでなければならない。意気沮喪させ精神を堕落させるようなものであってはいけない。多くの人々が耽り、罪悪感を無くさせ不道徳に駆らせる愚劣で無駄な娯楽は健康な慰安にはおよそほど遠いものである。そのような娯楽は官能を満足させるかもしれないが、人々の精神と道徳に与える影響は実に恐ろしい。それは民の伝統と道徳を破壊し、イスラームの社会と文化にいかなる意義をも与えることができないのである。

ホ）民の結束と団結を保ち、ムスリム社会の繁栄と幸福を達成するために、信者は相互の敵意、社会的不和と見解の相違、主義のセクショナリズムを捨てることが要求されている。ムスリムはそれらの不和や紛争をクルアーンとスンナで規定されている原則に従って解決することが勧められている。もし紛争の関係者や当事者が解決に到らなかった場合は、彼ら同士で口論や喧嘩をせずに、アッラーの御名によってその紛争の決定を唯一神に委ねるべきである。

国家の安寧のためにお互いに助け合い、紛争を避け、指導者に従う。些細なことに闘争して精力を浪費してはならない。このような不和や分裂は社会の不名誉であり、国家弱体化の原因にもなるから、いかなる犠

牲を払っても避けるべきである。

（へ）イスラームは知識と科学を人間の共同の遺産と考えている。ムスリムはその応用方法をあらゆる方面において学びえる完全なる自由を持っている。

しかし文化と生活方法の問題に関する限り、イスラームは他の民の生活方法を模倣することを禁ずる。模倣する心理は劣等感と屈辱感から生まれ、物質的豊かさを重視する価値観を培養する恐れがある。他国の文化的模倣は時に国家に破壊的な結果をもたらす。－それは自国の内的活力を破壊し、そのヴィジョンを曇らせ、その批判能力を麻痺させ、劣等感を生み、徐々にではあるが確実に文化の源泉を枯渇させ、死の弔鐘を鳴らさせるのである。これが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が非ムスリムの文化と生活方法を受け入れることを強固に禁じた理由である。国家の強さはその衣裳や作法や美術にあるのではなく、国家の真の力や繁栄は正しい知識、科学、規律、組織、活動力に負っているのである。他国から何かを学ぼうとするならば、その国の活動への意志と社会的規律から教訓を汲み取り、その学問と技術的業績を活用すべきであるが、文化的隷属と国家的劣等感を生み出す芸術や手先の技術に幻惑されてはならない。ムスリムはそのような影響から自国を保護すべきである。

次にムスリムと非ムスリムに対する関係を見ることにしよう。ムスリムが非ムスリムに対応する時には、寛容を欠き偏狭であってはならないと教えられている。ムスリムは、他の民族の宗教指導者や聖人を非難したり、悪口を云ったり、彼らの宗教を侮辱することを口にしてはならないと命じられている。ムスリムは彼らと紛争してはならない。平和と友愛をもって生きるべきであると教えられている。非ムスリムがムスリムに対して平和的友好的な態度を守り、その領土やその他の権利を侵害し

ないならば、それにふさわしい友好的な関係を彼らと結び、公明正大に対応すべきである。ムスリムがいかなる民よりも偉大な人間的同情心と礼儀を保ち、最も気品に溢れ、また慎ましく振舞うべきであるとイスラームは命じている。不作法、無礼な言動、抑圧、侵略、偏屈などはイスラームの精神に反する。ムスリムは善行、高貴、慈悲の生ける象徴となるためにこの世に生まれてきたのである。ムスリムは自己の品性と模範によって人々を心服させるべきである。そうしてこそムスリムはイスラームの真の使節となることができるのである。

D．あらゆるものの権利

さて今や最後の権利を考察することになった。唯一神は人間に唯一神の創り給うた数限りない被造物を支配する能力を与え給うた。万物は人間に利用される。人間はそれらを服従させ、人間の目的のためにそれらを役立てる力を与えられている。この優越した立場は万物の長たる権威を人間に与え、人間は好きなようにそれらを利用できる権利を持っている。しかしこのことは唯一神が人間に勝手気ままな自由を与え給うたという意味ではない。イスラームはあらゆる被造物が人間に対して一定の種の権利を持つと説く。その権利とはすなわち、人間はそれらを無益なことのために浪費してはならいし、不必要にそれらを傷つけたり害したりしてはならない。人間がそれらを役立てようとして利用する時は、それらにできるだけ害を与えないようにしなければならない。またそれらを利用する際に最上で最も傷がつかない方法を取らなければならない。

イスラームの原理はこれらの権利について多くの教えを具現している。たとえば食用に動物を屠殺することは許されているが、ただ慰みや遊びのために動物を殺すこと、必要もないのに動物の生命を奪うことは禁じられている。動物を屠殺するための方法（ザバハ）一動物から肉を

得る最も良い方法ーが規定されている。他の方法は動物にもっと苦痛を与えるかまたは肉を悪くさせ肉の上等な部分をなくさせるからである。イスラームはこのような障害を避け、動物に与える苦痛を少なくすると共に、有益で良質な肉の部分を保存させる方法を教えている。さらに、動物の苦痛が長引くような方法で殺すことはイスラームでは残忍なこととみなされている。イスラームは危険で有害な動物と猛獣を殺すことを許しているのは、イスラームがそれら動物の生命よりも人間の生命を尊重するからに他ならない。だがこの場合でもまた、苦痛の長引くような方法によって殺すことは許されない。

使役や乗物や運搬で使われる動物については、イスラームはそれらの動物を飢えさせておくこと、それらに耐えられないほど困難な仕事をさせること、それらを酷使し鞭打つことなどを厳重に禁じている。鳥を捕まえて、特別の目的もないのに籠の中に拘束することは残忍とみなされる。動物だけではない。イスラームは樹木を無益に切ることさえ認めていない。人間は樹木から果実やその他の収穫を得ることはできるが、それを破壊する権利を持たないのである。野菜も生命を持っている。それればかりではない。イスラームは生命のないものでさえ浪費することを許さない。イスラームはあまりに多量の水を浪費することも非難している。イスラームが自ら公然と認める目的は、考えられるあらゆる形の浪費を避け、あらゆる資源ー生物も無生物も含めーを最大限に活用することである。

E．シャリーアは永遠普遍の法

既に述べた通り、イスラームの法ー預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が人類に与えた永遠の法ーの簡単な要約を挙げた。この法は信仰と宗教以外で人間と人間の差別を認めない。人種、国籍、皮膚の色など

に基づいて人間を差別する宗教、社会機構、政治、文化、イデオロギーは決して普遍的な信条や全世界のイデオロギーになることはできない。解りきった理由であるが、ある人種に属する人間は別の人種に生まれ変わることはできないし、黒人や中国人や白人の持って生まれた皮膚の色は変えることができない。そのようなイデオロギーや社会機構はひとつの人種、国家、社会に留めておくべきである。それらは常に偏狭、頑迷、国粋主義的であり、普遍的ではない。これに反して、イスラームは普遍的なイデオロギーである。ラー・イラーハ・イッラッラー、ムハンマドッラスールッラー（アッラーの外に崇拝に値する神はなし、ムハンマドは唯一神の使徒なり）を信じると宣言した人は誰でもイスラームの門に入り、他のムスリムと同じ権利を受ける資格を持つのである。イスラームは人種、国家、皮膚の色、言語などに基づいて差別することは決してない。イスラームの呼びかけは全人類に対してであり、イスラームは偏狭な差別を認めていない。

さらにこの法はまた永遠である。この法はいかなる特定の民族の慣習や伝統に基づいていないし、また人間の歴史の特定の時代にのみ意義があるのではない。そしてその自然はいかなる時代、いかなる環境の下にあっても同一であるから、その完全な原理に基づいた法もまたいかなる時代、いかなる環境の下にあっても当てはまるのである。この普遍的な永遠の宗教こそイスラームである。

مبادئ الإسلام

الطبعة الثانية

٢٢٠١٠١٠ ياباني

المكتب التعاوني للدعوة والإرشاد وتوعية الجاليات بالسلي

ص.ب/١٤١٩ الرياض/١١٤٣١ هاتف/٢٤١٠٦١٥ ناسوخ/٢٤١٤٤٨٨-٢٣٢

البريد الإلكتروني/ sulay@w.cn